四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
22

花園遺跡
試掘調査総括

2001
徳島県教育委員会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

花園遺跡　遺構完掘状況

例　　言

1．本書は1994年度から1996年度にかけて調査を実施した四国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財試掘調査および発掘調査報告書である。

2．本書には、三好郡三野町所在の花園遺跡の発掘調査および本調査に至らなかった同じく三野町の太刀野山遺跡（Ⅰ）・太刀野山遺跡（Ⅱ）と三好郡三好町の宮ノ岡遺跡（Ⅰ）・宮ノ岡遺跡（Ⅱ）・台遺跡の報告書を収録した。

3．発掘調査は日本道路公団高松建設局（現日本道路公団四国支社）から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

4．発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

・発掘調査期間

花園遺跡	1995年６月５日～1995年６月７日（第一次試掘調査）
	1995年９月12日～1995年９月29日（第二次試掘調査）
	1996年４月３日～1996年９月30日（本調査）
太刀野山遺跡（Ⅰ）	1994年５月９日～1994年５月23日（試掘調査）
太刀野山遺跡（Ⅱ）	1994年10月４日～1994年10月７日（試掘調査）
	1995年10月９日～1995年10月11日（第二次試掘調査）
宮ノ岡遺跡（Ⅰ）	1996年４月15日～1996年５月８日（試掘調査）
宮ノ岡遺跡（Ⅱ）	1996年５月９日～1996年５月16日（試掘調査）
台遺跡	1996年５月17日～1996年５月31日（試掘調査）

・整理業務、報告書作成期間　2001年４月１日～2002年３月31日

5．遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡例

ＳＡ　掘立柱建物跡	ＳＤ　溝	ＳＪ　水利施設
ＳＫ　土坑	ＳＯ　窯跡	ＳＰ　柱穴
ＳＲ　流路	ＳＴ　埋葬施設	ＳＸ　不明遺構

6．方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T.P）を表す。

7．本書で用いた土層及び土器の色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』1989年版によった。

8．遺物番号・挿図番号は，遺跡ごとに全て通し番号とした。

9．第２図の地形図は建設省国土地理院発行の1／50,000の地形図「阿波池田」を縮小・転載使用した。

10．本書の執筆はⅠを貞野保仁、その他を烏野美子が担当し、全体の編集は烏野が行った。写真は遺物を烏野美子、Ｘ線写真を植地岳彦、遺構はそれぞれの担当者が撮影した。

序　　文

本報告書は、四国縦貫自動車道（美馬～池田）の建設に伴い、1994年度より1996年度にかけて調査を実施した三好郡三野町の花園遺跡および三好郡三野町から三好町に所在する本調査に至らなかった５遺跡の試掘調査の成果をまとめたものであります。

これらの遺跡は、いずれも吉野川上流北岸、阿讃山脈南側の緩やかな傾斜面や山麓に位置しており、主に弥生時代と中世から近世にかけての遺構・遺物が確認されました。特に花園遺跡では、室町時代の遺構・遺物が検出され、貴重な成果を上げることができました。

本書が調査研究の一資料として活用され、埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書の作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様の多大な御援助、御協力をいただきましたことに深く感謝の意を表します。

平成14年３月

財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
理事長　松　村　通　治

本 文 目 次

Ⅰ　調査にいたる経緯 …… 1
　1　調査の経緯 …… 2

Ⅱ　花園遺跡 …… 7
　1　調査の経過 …… 8
　　(1)　調査の経過 …… 8
　　(2)　発掘調査の方法 …… 8
　　(3)　調査日誌抄 …… 9
　2　遺跡の立地と環境 …… 11
　　(1)　遺跡の地理的環境 …… 11
　　(2)　遺跡の歴史的環境 …… 11
　3　花園遺跡調査成果 …… 15
　　(1)　遺跡の基本層序 …… 15
　　(2)　検出された遺構と遺物 …… 22
　　A　区 …… 22
　　暗渠1（SJ1001） …… 22
　　暗渠2（SJ1002） …… 26
　　暗渠3（SJ1003） …… 26
　　柱穴19（SP1019） …… 26
　　自然流路1（SR1001） …… 27
　　火葬墓1（ST1001） …… 27
　　不明遺構1（SX1001） …… 27
　　不明遺構2（SX1002） …… 27
　　不明遺構3（SX1003） …… 30
　　不明遺構4（SX1004） …… 30
　　不明遺構6（SX1006） …… 30
　　不明遺構7（SX1007） …… 30
　　不明遺構8（SX1008） …… 30
　　不明遺構9（SX1009） …… 30
　　不明遺構10（SX1010） …… 33
　　不明遺構11（SX1011） …… 33
　　不明遺構13（SX1013） …… 33

B　区 …… 35
掘立柱建物跡１（SA1001） …… 35
掘立柱建物跡２（SA1002） …… 35
炉跡１（SH1001） …… 38
炉跡２（SH1002） …… 38
窯跡１（SO1001） …… 38
柱穴140（SP1140） …… 38
柱穴161（SP1161） …… 40
柱穴164（SP1164） …… 40
柱穴192（SP1192） …… 40
土坑１（SK1001） …… 42
不明遺構14（SX1014） …… 42
不明遺構15（SX1015） …… 42
不明遺構16（SX1016） …… 43
不明遺構17（SX1017） …… 43
不明遺構18（SX1018） …… 43
不明遺構19（SX1019） …… 43
不明遺構20（SX1020） …… 43
不明遺構21（SX1021） …… 43
不明遺構22（SX1022） …… 43
不明遺構23（SX1023） …… 47
C　区 …… 49
掘立柱建物跡３（SA1003） …… 49
溝１（SD1001） …… 50
溝２（SD1002） …… 50
溝３（SD1003） …… 50
溝４（SD1004） …… 50
不明遺構24（SX1024） …… 52
不明遺構25（SX1025） …… 52
不明遺構26（SX1026） …… 52
不明遺構27（SX1027） …… 52
不明遺構28（SX1028） …… 52
不明遺構29（SX1029） …… 52
遺物包含層の出土遺物 …… 56
(3)　まとめ …… 74

Ⅲ　試掘調査総括 …… 99

1　太刀野山遺跡（Ⅰ） …… 100
(1)　遺跡の位置 …… 100
(2)　トレンチの設定 …… 100
(3)　基本層序 …… 100
(4)　出土遺物 …… 102
(5)　まとめ …… 102

2　太刀野山遺跡（Ⅱ） …… 106
(1)　遺跡の位置 …… 106
(2)　トレンチの設定 …… 106
(3)　基本層序 …… 106
(4)　まとめ …… 106

3　宮ノ岡遺跡（Ⅰ） …… 109
(1)　遺跡の位置 …… 109
(2)　トレンチの設定 …… 109
(3)　基本層序 …… 109
(4)　出土遺物 …… 111
(5)　まとめ …… 111

4　宮ノ岡遺跡（Ⅱ） …… 116
(1)　遺跡の位置 …… 116
(2)　トレンチの設定 …… 116
(3)　基本層序 …… 116
(4)　出土遺物 …… 118
(5)　まとめ …… 118

5　台遺跡 …… 123
(1)　遺跡の位置 …… 123
(2)　トレンチの設定 …… 123
(3)　基本層序 …… 123
(4)　出土遺物 …… 125
(5)　まとめ …… 125

挿 図 目 次

Ⅱ 花園遺跡

第１図 花園遺跡グリッド配置図 …… 8
第２図 花園遺跡周辺主要遺跡分布図 …… 13
第３図 Ａ区北壁基本土層図 …… 16
第４図 Ｂ区西壁基本土層図 …… 16
第５図 花園遺跡調査区位置図 …… 17
第６図 花園遺跡遺構全体図 …… 19・20
第７図 Ａ区遺構配置図 …… 21
第８図 SR1001・SJ1001・2・3実測図 …… 23
第９図 SJ1001遺構断面図 …… 24
第10図 SJ1001出土遺物実測図 …… 24
第11図 SJ1002遺構断面図 …… 25
第12図 SJ1003遺構断面図 …… 25
第13図 SJ1003出土遺物実測図 …… 25
第14図 SP1019実測図 …… 25
第15図 SP1019出土遺物実測図 …… 25
第16図 ST1001実測図 …… 28
第17図 ST1001出土遺物実測図 …… 28
第18図 SX1001実測図 …… 29
第19図 SX1002実測図 …… 29
第20図 SX1003実測図 …… 29
第21図 SX1004実測図 …… 29
第22図 SX1006実測図 …… 31
第23図 SX1008実測図 …… 31
第24図 SX1007実測図 …… 31
第25図 SX1013実測図 …… 31
第26図 SX1009実測図 …… 32
第27図 SX1010実測図 …… 32
第28図 SX1011実測図 …… 32
第29図 Ｂ区遺構配置図 …… 34
第30図 SA1001実測図 …… 36
第31図 SA1002実測図 …… 36
第32図 SH1001実測図 …… 37
第33図 SH1001出土遺物実測図 …… 37
第34図 SH1002実測図 …… 37
第35図 SO1001遺構・出土遺物実測図 …… 39
第36図 SP1140実測図 …… 41
第37図 SP1140出土遺物実測図 …… 41
第38図 SP1161実測図 …… 41
第39図 SP1161出土遺物実測図 …… 41
第40図 SP1164実測図 …… 41
第41図 SP1164出土遺物実測図 …… 41
第42図 SP1192実測図 …… 42
第43図 SP1192出土遺物実測図 …… 42
第44図 SK1001実測図 …… 42
第45図 SX1014実測図 …… 44
第46図 SX1015実測図 …… 44
第47図 SX1015出土遺物実測図 …… 44
第48図 SX1016実測図 …… 44
第49図 SX1017実測図 …… 45
第50図 SX1018実測図 …… 45
第51図 SX1019実測図 …… 45
第52図 SX1020実測図 …… 45
第53図 SX1021実測図 …… 46
第54図 SX1022実測図 …… 46
第55図 SX1023実測図 …… 46
第56図 Ｃ区遺構配置図 …… 48
第57図 SA1003実測図 …… 49
第58図 SD1001実測図 …… 51
第59図 SD1002実測図 …… 51
第60図 SD1003実測図 …… 51
第61図 SD1004実測図 …… 53
第62図 SX1024実測図 …… 53
第63図 SX1025実測図 …… 54
第64図 SX1026実測図 …… 54
第65図 SX1027実測図 …… 55
第66図 SX1028実測図 …… 55
第67図 SX1029実測図 …… 55
第68図 SX1029出土遺物実測図 …… 56
第69図 包含層出土遺物実測図(1) …… 57
第70図 包含層出土遺物実測図(2) …… 58
第71図 包含層出土遺物実測図(3) …… 59
第72図 包含層出土遺物実測図(4) …… 60
第73図 包含層出土遺物実測図(5) …… 61
第74図 包含層出土遺物実測図(6) …… 62
第75図 包含層出土遺物実測図(7) …… 63
第76図 包含層出土遺物実測図(8) …… 64
第77図 包含層出土遺物実測図(9) …… 65
第78図 包含層出土遺物実測図⑩ …… 67
第79図 包含層出土遺物実測図⑪ …… 68
第80図 包含層出土遺物実測図⑫ …… 69
第81図 包含層出土遺物実測図⑬ …… 71
第82図 包含層出土遺物実測図⑭ …… 72
第83図 包含層出土遺物実測図⑮ …… 73

Ⅲ 試掘調査総括

1 太刀野山遺跡（Ⅰ）

第１図 基本土層柱状図 …… 100
第２図 太刀野山遺跡（Ⅰ）調査地位置図 …… 101
第３図 出土遺物実測図 …… 103

2 太刀野山遺跡（Ⅱ）

第１図 基本土層柱状図 …… 106
第２図 太刀野山遺跡（Ⅱ）調査地位置図 …… 107

3　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）
第１図　基本土層図 …… 109
第２図　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）調査地位置図 …… 110
第３図　出土遺物実測図 …… 112

4　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）
第１図　基本土層柱状図 …… 116
第２図　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）調査地位置図 …… 117
第３図　出土遺物実測図 …… 119

5　台遺跡
第１図　基本土層柱状図 …… 123
第２図　台遺跡調査地位置図 …… 124
第３図　SQ1001実測図 …… 125
第４図　SQ1001出土遺物実測図 …… 125

表　目　次

Ⅰ　調査の経緯
第１表　四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表 …… 5

Ⅱ　花園遺跡
第１表　花園遺跡検出遺構一覧表掘立柱建物跡　75
第２表　花園遺跡掘立柱建物柱穴観察表 …… 75
第３表　花園遺跡検出遺構一覧表（Ａ区） …… 75
第４表　花園遺跡検出遺構一覧表（Ｂ区） …… 76
第５表　花園遺跡検出遺構一覧表（Ｃ区） …… 76
第６表　花園遺跡出土遺物観察表（土器） …… 76
第７表　花園遺跡出土遺物観察表（石器） …… 87
第８表　花園遺跡出土遺物観察表（瓦） …… 87
第９表　花園遺跡出土遺物観察表（金属製品）　87

Ⅲ　試掘調査総括
太刀野山遺跡（Ⅰ）
第１表　太刀野山遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（土器） …… 104
宮ノ岡遺跡（Ⅰ）
第１表　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（土器） …… 113
第２表　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）出土遺物観察表（金属製品） …… 114
宮ノ岡遺跡（Ⅱ）
第１表　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（土器） …… 120
第２表　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（金属製品） …… 121

図　版　目　次

巻頭図版　花園遺跡遺構完掘状況

Ⅱ　花園遺跡
図版１　花園遺跡調査区全景　西より …… 89
花園遺跡Ｂ区西壁土層 …… 89
図版２　SJ1001・1002・1003、SR1001
遺構検出状況　東より …… 90
SJ1001・1002・1003、SR1001
完掘状況　東より …… 90
図版３　ST1001土層断面　北より …… 91
ST1001完掘状況　北より …… 91
図版４　SA1001完掘状況　南より …… 92
SA1003完掘状況　西より …… 92
図版５　SH1001遺物出土状況　南より …… 93
SH1001・1002完掘状況　東より …… 93
図版６　SO1001完掘状況　南より …… 94
SK1001完掘状況　南より …… 94
図版７　遺構内・包含層出土遺物(1) …… 95
図版８　包含層出土遺物(2) …… 96
図版９　包含層出土遺物(3) …… 97

Ⅲ　試掘調査総括
1　太刀野山遺跡（Ⅰ）
図版１　太刀野山遺跡（Ⅰ）調査前風景 …… 105
№47トレンチ土層堆積状況 …… 105
調査風景 …… 105
2　太刀野山遺跡（Ⅱ）
図版１　太刀野山遺跡（Ⅱ）調査前風景 …… 108
№１トレンチ土層堆積状況 …… 108
№10トレンチ土層堆積状況 …… 108
3　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）
図版１　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）調査前風景 …… 115
№１トレンチ土層堆積状況 …… 115
№12トレンチ土層堆積状況 …… 115
4　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）
図版１　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）調査前風景 …… 122
№29トレンチ土層堆積状況 …… 122
溝№5トレンチ遺物出土状況 …… 122
5　台遺跡
図版１　台遺跡調査前風景 …… 126
№１トレンチ土層堆積状況 …… 126
SQ1001完掘状況 …… 126

Ⅰ　調査にいたる経緯

1　調査の経緯

1　調査にいたる経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づいて、四国４県を結ぶ幹線道路として計画された。徳島自動車道においては、まず最初に徳島～脇間について昭和48（1973）年10月「道路整備特別法」に基づき、建設大臣から第７次の施工命令が出され、昭和55年実施計画の許可、昭和56年１月に路線発表がされた。

昭和61年４月には道路局長通達により暫定施工に変更され、昭和62年11月に徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年５月には、藍住Ｉ．Ｃ（追加Ｉ．Ｃ）の施工命令が出され、６月に実施計画が許可されている。

この区間は徳島市川内町の徳島Ｉ．Ｃを起点とし、吉野川に並行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇Ｉ．Ｃ（区間41.4km）を結ぶものである。

この間、徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係わる分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。また、県教委は供用が第10次５カ年計画に取り入れられ、平成５年が目標となっていることを受けて、昭和63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成５年４月、財団法人埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、発掘調査に対応することとなった。センターでは発掘調査に当たって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することで、調査の効率化、迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、工事請負として発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い調査を実施した。その結果、平成５年３月に徳島～脇間の埋蔵文化財調査を終了することとなった。

脇～美馬間の第10次区間（区間11.7km）については、昭和63年５月に施行命令が出され、６月に路線発表が行われた。この区間の遺跡に関しても、徳島～脇間で実施された調査等に関しての基本的な事項については適用され、その成果に基づいて周知の遺跡等は予定路線から極力回避するような方向で話し合いが行われた。平成４年４月には埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が成立し、脇町分で10遺跡65,600㎡、美馬町分で５遺跡40,400㎡の合計15遺跡106,000㎡が調査の対象となった。発掘に際しては対象面積の規模やその立地状況等から調査効率の低下や進入路等の確保に関する問題点も多く、調査を進めるうえで困難を極める状況が想定された。また、当該区間の供用開始目標が平成９年度に設定されたことも受け、美馬～脇間においては、これまでの調査の経緯を踏まえ、より実態に即した調査基準の設定が図られ導入された。

平成４年度末に脇町内３カ所（佐城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、美馬町内1カ所（滝ノ宮遺跡）の試掘調査が実施され、当該区間の調査が開始されることとなった。それから３年後、脇～美馬間の10次区間における発掘はピークを迎えることになる。一方、10次区間における発掘調査がピークを迎える頃、美馬～川之

江間の第11次区間でも試掘・本調査が本格化し始め、県教委には各種団体からの要望書・質問書が提出された。これに先だって県教委では、センターの組織改正を行うとともに、より一層の調査体制の充実、強化を図り発掘調査に対応することとなった。センターとしても事業の一部変更などを実施して体制の充実を図り、当該区間の調査完了を目指して調査にあたった。そして、平成８年６月、田上Ⅱ、薬師遺跡芝坂地区の調査終了をもってすべて完了することとなった。

美馬～川之江間の第11次区間については、39遺跡323,195㎡が調査対象面積となっており、平成10年度に供用目標が設定された。調査にあたっては、試掘調査が優先されたが、当初の実堀見込み面積を上回る結果が出された。さらに一部の遺跡において調査の遅延を生じたため、他事業を割いて調査班を投入したが効果はあまりあがらなかった。そこで、先にも述べたがこうした様々な要因を踏まえ県教委は不足人員を教員派遣で対応する等、さらなる調査体制の充実、強化を図ることとなったのである。

ところで、各調査現場においてはきびしい発掘調査が続く中、貴重な遺構、遺物等が確認されたことはきわめて注目される。一重の環濠を巡らせ、防御的機能を具備した高地性集落の大谷尻遺跡、弥生時代前期末から後期後半の水田遺構が確認された吉野川上流域を代表する大柿遺跡、煙管状土器焼成窯１基・灰原が検出された土井遺跡等、当時の社会構造の研究を今後さらに深めていく上で貴重な資料となるだろう。尚、発掘調査のベースとなっていた西部事務所は平成10年３月31日をもって閉鎖されることになり、昭和60年度の分布調査から始まった一連の発掘調査は閉じることとなった。また、調査終了後の出土遺物の整理作業については、公団・県教委の協議により平成10年度から開始することとなり、基本年次計画案を作成し、現在整理作業が進行中である。

調査組織及び整理体制は以下である。

（調査組織）

所長	筒井豊祐（平成７・８年度）	
事務局長	柴田　広（平成６・７年度）	庄野徳保（平成８年度）
事務局次長	谷　一郎（平成８年度）	
総務課長	小林啓治（平成６・７年度）	長江　仁（平成８年度）
主事	三木和文（平成６・７年度）	西木未香（平成７・８年度）
	集堂正士（平成８年度）	
調査課長	紀伊司郎（平成６年度）	
調査第１課長	島巡賢二（平成８年度）	
調査第２課長	菅原康夫（平成８年度）	
調整係長	島巡賢二（平成６年度）	
調査係長	菅原康夫（平成６年度）	
課長兼調査第１係長	島巡賢二（平成７年度）	
主査兼調査第２係長	逢坂俊男（平成７・８年度主査兼調査係長）	
主査兼調査第１係長	南　信義（平成８年度）	
主査兼調査第２係長	佐々木清克（平成８年度）	
技術主任	酒井彰彦（平成６年度）	
技師	青木雅和（平成７・８年度）	笠井達雄（平成８年度）

西部事務所　所長　　谷　一郎（平成８年度）
　　次長　　菅原康夫（平成８年度）
　　縦貫担当係長　　南　信義（平成８年度）

調査担当

花園遺跡

研究員　　泊　　強（当時）　　有月義明（当時）

太刀野山遺跡（Ⅰ・Ⅱ）

研究員　　小泉信司（当時）　　谷　恒二（当時）

宮ノ岡遺跡（Ⅰ・Ⅱ）

研究員　　近藤　理（当時）　　寒川芳裕（当時）

台遺跡

研究員　　近藤　理（当時）　　寒川芳裕（当時）

〈整理組織〉

所長　　本淨敏之（平成13年度）
事務局長　　伊丹康裕（平成13年度）
総務課長　　高野　明（平成13年度）
主査兼係長　　福本紀美子（平成13年度）
主事　　田所政儀（平成13年度）
整理普及課長　　島巡賢二（平成13年度）
整理係長　　貞野保仁（平成13年度）
整理担当　報告書作成
研究員　　鳥野美子

第1表　四国縦貫自動車道（脇～美馬・美馬～川之江）埋蔵文化財調査地一覧表

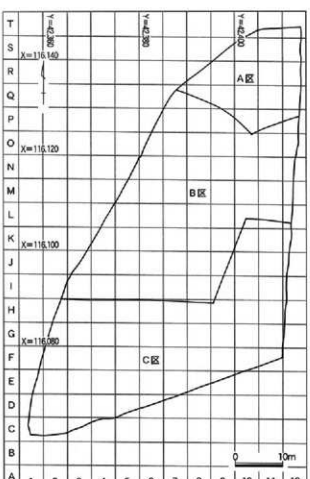
番号	遺跡名	所在地	面積（㎡）								備考
			実掘面積	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	
1	原（Ⅰ）	美馬郡脇町北庄	380		380						
2	原（Ⅱ）	美馬郡脇町北庄	1,560		1,560						
3	鶴射	美馬郡脇町北庄	1,544		240	1,304					
4	佐城（Ⅰ）	美馬郡脇町脇町	565	165	400						
5	佐城（Ⅱ）	美馬郡脇町脇町	779	89	70	620					
6	佐城（Ⅲ）	美馬郡脇町脇町	146	146							
7	田上（Ⅰ）	美馬郡脇町田上	891			873	18				報告書27集所収
8	田上（Ⅱ）	美馬郡脇町西田上	9,258			4,610	4,478	170			報告書27集所収
9	田上（Ⅲ）	美馬郡脇町西田上	6,062		150	1,822	4,090				報告書27集所収
10	井口	美馬郡脇町井口	150		150						
11	薬師（薬師）	美馬郡美馬町芝坂	9,335			330	9,005				報告書34集所収
12	薬師（芝坂）	美馬郡美馬町芝坂	6,937			41	4,613	2,283			報告書34集所収
13	坊僧（坊僧）	美馬郡美馬町坊僧	12,455		750	56	11,649				報告書34集所収
14	坊僧（中馬）	美馬郡美馬町坊僧	229			154	75				報告書34集所収
15	坊僧（東殺）	美馬郡美馬町坊僧	5,850			116	5,734				報告書34集所収
16	坊僧（西殺）	美馬郡美馬町坊僧	63			63					報告書34集所収
17	池ノ浦	美馬郡美馬町池ノ浦	26			26					
18	滝ノ宮	美馬郡美馬町滝ノ宮	2,563	350	500		1,713				
19	下宮出	美馬郡美馬町中横尾	2,600				2,600				
	脇～美馬		61,393	750	4,200	10,015	43,975	2,453			
20	荒川	美馬郡美馬町荒川	17,782				202	15,530	2,050		
21	吉水	美馬郡美馬町吉水	3,820				120	3,700			報告書39集所収
22	西屋敷	美馬郡美馬町中西	288				288				
23	中山	美馬郡美馬町中山	172				172				
24	西大佐吉	美馬郡美馬町安窪	153				108	45			
25	清水	三好郡三野町清水	10,692			692		10,000			
26	塩塚	三好郡三野町清水	2,332			310	72	1,950			
27	加茂野宮（Ⅱ）	三好郡三野町加茂野宮	300			300					
28	加茂野宮（Ⅰ）	三好郡三野町加茂野宮	340			340					
29	大谷尻	三好郡三野町北原	4,595			95	4,500				
30	丸山	三好郡三野町勝力	14,760				11,110	3,650			
31	花園	三好郡三野町太刀野	3,456				356	3,100			本報告書所収
32	太刀野山（Ⅱ）	三好郡三野町アミダ堂	157			103	54				本報告書所収
33	太刀野山（Ⅰ）	三好郡三野町アミダ堂	450			450					本報告書所収
34	台	三好郡三好町足代	1,203					1,203			本報告書所収
35	宮ノ岡（Ⅱ）	三好郡三好町足代	345					345			本報告書所収
36	宮ノ岡（Ⅰ）	三好郡三好町足代	898					898			本報告書所収
37	東原	三好郡三好町足代	16,365			217	323	15,825			
38	西原	三好郡三好町足代	10,853			157	616	8,153	1,927		
39	円通寺	三好郡三好町足代	42,453				808	30,375	11,270		報告書28集所収
40	土井	三好郡三好町星岡	35,630			140	378	19,520	15,592		報告書38集所収
41	大柿	三好郡三好町星岡	53,012				1,562	22,980	28,490		
42	八幡	三好郡井川町八幡	1,250				20	1,230			報告書29集所収
43	井内	三好郡井川町西井川	277					277			報告書29集所収
44	井出上	三好郡井川町西井川	6,336				30	6,306			
45	相知	三好郡井川町西井川	15,500				120	15,380			
46	坊	三好郡井川町西井川	420					120	300		報告書29集所収
47	須賀	三好郡井川町西井川	3,869					689	3,180		報告書29集所収
48	東	三好郡井川町西井川	240					240			報告書29集所収
49	お塚	三好郡池田町トウゲ	5,314			354	1,238	3,722			
50	供養地	三好郡池田町クヤウジ	1,811			111	1,700				
51	山田（Ⅱ）	三好郡池田町ヤマダ	1,515			285	1,230				
52	山田（Ⅰ）	三好郡池田町ヤマダ	703			53		650			
53	馬路	三好郡池田町馬路	970						320	650	
54	源氏岡	三好郡池田町源氏岡	175							175	
55	林	三好郡池田町佐野	130						130		
56	和田	三好郡池田町佐野	1,220					1,220			
57	森高	三好郡池田町銅山	90						90		
58	高毛	三好郡池田町高毛	25						25		
	美馬～川之江		259,901			3,607	25,007	167,088	63,374	825	
	計		321,294	750	4,200	13,622	68,982	169,541	63,374	825	

Ⅱ 花園遺跡

1　調査の経過

(1)　調査の経過

花園遺跡は阿讃山脈裾部に位置し、吉野川の支流である河内谷川によって形成された扇状地の西側に立地する。標高110m付近の北東から南東に傾斜して下る緩斜面上にある遺跡である。分布調査では、弥生式土器・中世以前の紡錘車が採取されており、中世以前の遺構が予想された。また、花園中365番地で中世の花園窯跡の存在が確認されていることもあり、その関連の遺構も予想された。そこで、1995年6月5日から6月7日に行われた一次試掘調査では、4,345㎡を対象面積とし、130㎡が調査された。しかし、この調査では耕作土下の土層は地形的な要因から河川の堆積の影響や山土の押し出しを受け遺構らしきものは検出されなかった。次の二次試掘調査は同年9月12日から9月29日に行われ、一次試掘調査時の西側25,255㎡を対象面積とし、226㎡が調査された。この結果、東の部分と西の高台及び斜面では、一次の試掘調査の時と同じように河川の堆積による影響や山土の押し出しとみられる層が広がり、共に遺構も残存せず、遺物の採取もできなかった。一方平野西部分は、サヌカイト製石鏃や中世の釜の脚の一部などの遺物数点が採取され、またしまりのよい地山からは遺構が検出され遺構構築面の広がりが認められたため、町道花園川又線に沿う段々畑からなる3100㎡が本調査の対象となった。



第1図　花園遺跡グリッド配置図

調査は、1996年4月3日から開始し、同年9月30日に終了した。

(2)　発掘調査の方法

調査区の設定に際しては、第4系国土座標の座標軸、X軸、Y軸の線上に5m×5mをひとつのグリッドの大きさとしたメッシュを設定して調査の基準とし、南西の隅を基点にこれより北へはアルファベット（A～T）、東にはアラビア数字（1～12）を記号として順にふり、その組み合わせで各グリッドを表すこととした。また、調査区の設定は北よりA区、B区、C区と3調査区に区分し調査した。（第1図）

遺構番号は検出時に決定し、掘削後確実性の乏しいと判断されるものについては欠番とし、A区からC区の通し番号とした。

(3) 調査日誌抄

1995年（試掘調査）

6月5日　第一次試掘調査開始
6月7日　第一次試掘調査終了
9月12日　第二次試掘調査開始
9月29日　第二次試掘調査終了

1996年（本調査）

4月2日　入札
4月3日　調査準備
4月8日　業者との打ち合わせ
4月15日　現地調査、担当者挨拶回り
4月16日　草刈り、伐採
4月18日　測量開始
4月22日　現地盤立会、測量終了
　　調査区西側の壁写真撮影
4月23日　安全柵設置、機械掘削開始
5月9日　測量開始
5月10日　機械掘削終了、包含層掘削開始
5月13日　包含層人力掘削開始、溝掘削開始
5月16日　包含層北1/3人力掘削終了
5月24日　機械掘削
5月28日　A区溝掘削、B区機械掘削開始
5月29日　A区B区機械掘削
5月31日　C区機械掘削、
　　土層堆積状況　写真撮影

C区作業風景　西より

6月3日　B区C区機械掘削、
　　C区人力掘削開始
　　A区北壁土層断面図作成
6月5日　B区機械掘削
　　C区SX半裁
6月6日　北壁土層写真撮影
6月10日　A区機械掘削
6月19日　B区機械掘削、A区遺構面検出
6月25日　A区遺構面写真撮影
7月1日　A区平面図作成開始、
　　B区機械掘削高測量
　　C区精査、遺構面検出
7月8日　B区包含層掘り下げ
7月9日　A区平面図作成、遺構掘り下げ
　　B区遺構検出
7月11日　C区遺構検出状況写真撮影
7月12日　A区遺構掘削、B区包含層掘削
　　C区人力掘削高測量
7月15日　A区平・断面図作成、SP写真撮影
7月16日　A区SJ平面図作成、SP写真撮影
7月18日　台風接近のための準備
7月22日　A区遺構掘り下げ
7月25日　B区遺構検出
7月26日　A区SP遺構掘り下げ、
　　B区遺構検出、平面図作成
7月30日　A区遺構掘り下げ、
　　B区包含層人力掘削
8月5日　A区SJ平面図終了、
　　B区包含層人力掘削、
　　遺構掘り下げ、SP断面図作成
8月8日　A区SJ土層断面写真撮影、
　　B区包含層人力掘削終了、
　　SP土層断面写真撮影
8月9日　A区SJ土層断面図作成開始、
　　B区精査
8月19日　B区遺構検出、

SP1053～1120完掘

8月20日　A区SJ土層断面写真撮影、
B区遺構掘削C区遺構掘削、
平面図作成

8月22日　A区SJ土層断面図終了、
B区遺構精査、C区遺構掘り下げ

A区作業風景

8月26日　B区遺構面検出、平断面図作成

8月28日　B区平面図作成、
C区土層断面図作成

8月29日　B区SP平面図作成、SP半裁、
SH1001より土器出土、
C区SP土層断面図作成

8月30日　B区SH1001・2写真撮影

9月10日　B区遺構完掘状況写真撮影、
B区西壁断面図作成
基本土層図作成、写真撮影、
空撮準備

9月11日　空撮、遺構完掘状況写真撮影

9月12日　A区遺構掘削

9月17日　SJ1001～3遺構内掘削

9月18日　確認トレンチ掘削、引っ越し

9月19日　確認トレンチ立会、埋め戻し開始

9月25日　埋め戻し終了

9月26日　室内でのまとめ作業開始

9月30日　調査終了

2　遺跡の立地と環境

(1)　地理的環境

花園遺跡は、徳島県三好町三野町大字太刀野字花園窪に所在する。三好郡は、徳島県の北西端部に位置し吉野川の上・中流域を占める。郡の面積の80％以上が山地で北部に讃岐山脈、南部に四国山地がある。この讃岐山脈と四国山地の間を四国最大の河川である吉野川が直線的に東流し、紀伊水道に注いでいる。三野町は、吉野川北岸中流域にあって讃岐山脈の南斜面に開け、郡の東端に位置する。東は、美馬郡美馬町、西は三好町、南は吉野川の対岸にある三加茂町、北は讃岐山脈を挟み香川県仲多度郡琴南町、仲南町と接する。花園遺跡は、三野町の中央部を讃岐山脈を浸食して南流する吉野川の支流河内谷川によってできた扇状地の西側、南向きの緩斜面上にあり標高およそ110mの高台に位置する。南部を主要地方道である鳴門－池田線が東西に横断し、河内谷川に沿って讃岐山脈を越えて県道琴南－三野線が香川県へと通じている。

地質的には当該地区には、わが国最大の断層である中央構造線が吉野川に沿うように東西に貫き、三野町においてもその活動による大規模な破砕帯が東西40mに渡って見られる。中央構造線の南北では、地質にも違いが見られ、吉野川南岸は四国山地を形成する三波川編成岩類でおもに結晶片岩類（阿波の青石）が含まれるのに対し、北岸は白亜系和泉層群に属しおもに砂岩と頁岩との互層から構成されている。

(2)　歴史的環境

原始

旧石器時代の遺跡は、三野町東上野遺跡で小型のナイフ形石器が出土している。周辺の遺跡としては三好町土取遺跡、吉野川を挟んで南に位置する三加茂町丹田遺跡などがあり、土取遺跡からはサヌカイト製の横剥ぎナイフ形石器・宮田山型ナイフ形石器や剥片が、三加茂町丹田遺跡からは国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、芝生上の台地より土器片・サヌカイト製の石匙・石鏃が出土している。周辺の遺跡としては、三加茂町加茂谷川岩隙遺跡群や同町稲持遺跡がある。加茂谷川岩隙遺跡群では縄文時代早期の複合山形文土器・楕円形押型文土器・前期の爪形文土器・中期から後期にかけての土器が出土している。また稲持遺跡では縄文時代晩期後半の集落が確認され、蛇紋岩製およびサヌカイト製の磨製石斧・サヌカイト製の石鏃・石鎌・石核が出土、出土遺物より石器製作集落と考えられる。

弥生時代の遺跡は、三野町勢力の大谷尻遺跡、その西に位置する丸山遺跡がある。大谷尻遺跡は、館山遺跡の別称であり、この地点は中世山城の屋形山城が存在したと伝承され、館山の呼称が定着しているが、弥生時代の高地性集落としても知られている。遺跡は中期末から後期初頭にかけて存在した環濠を伴う高地性集落で、標高135mから145mの段丘上に位置し、平地部との標高差は50mを測る。一重の環濠を巡らせ、環濠の内側から縦穴住居跡12軒、石器製作工房跡１軒、祭祀遺構などが確認された。また石鏃の他、石包丁・石斧・磨石などの農耕具・調理具や稲・豆などの炭化種子類が出土した。こうし

たことから防衛的機能と同時に生産的機能を持っていたことが想定される。また、丸山遺跡は大谷尻遺跡の西側に谷を一つ隔てた段丘上に位置している。大谷尻遺跡よりも若干先行する弥生時代中期中葉を中心とした遺跡で、出土した石器も農耕具の比率が高く、環濠を持たない高地性集落である。弥生中期から後期末の遺跡としては三野町加茂野宮遺跡がある。加茂野宮遺跡は加茂野宮・塩塚の滝谷川の扇状地に位置し、遺構については不明であるが、壺形土器など多数の土器片が出土した（三野町史記載）。また、河内谷川扇状地の東側段丘上に位置する芝生上からは弥生時代の石鏃が多数出土している（三野町史記載）。このころの周辺のおもな遺跡としては三好町の大柿遺跡、同町足代東原遺跡、三加茂町の稲持遺跡がある。大柿遺跡からは、中期初頭の灌漑用水路と棚田が検出されており、当時のシステムを検討するのに重要な遺跡である。足代東原遺跡は三好町の東端の吉野川の河岸段丘上、黒川原谷川によって形成された扇状地に位置し、砂岩礫を積み上げた前方後円形積石墓１基と36基以上の円形積石墓から構成される弥生時代終末期の集団墓地である。この積石墓のなかには副葬品として石鏃・石包丁・打製石斧が出土した。また土器溜まりからは猪形土製品と猿形土製品が出土している。この積石墓群を形成した集団は焼畑を含む畑作を中心とする生業を基盤としていたことが予想される。稲持遺跡は、この足代東原遺跡の対岸に位置し、四国で唯一の蛇紋岩を素材とした生産遺跡であり、多量の蛇紋岩製勾玉、および勾玉未製品・原石・筋砥石・叩石・台石が出土した。

古墳時代では、三野町芝生の大塚古墳、桶川古墳がある。大塚古墳は沖積層の水田の少し引きあがったところに位置する円墳で、古墳時代後期のものと思われる。また、桶川古墳は芝生の桶川池西側の丘陵斜面に位置していたが、芝生小学校校地に移転した。組合式箱形石棺で時代は特定できない（三野町史記載）。周辺の主な遺跡では、三加茂町丹田古墳がある。県西部唯一の前方後円墳とされ、全長35mを測り、合掌型竪穴式石室からは獣型鏡１・鉄剣２・袋状鉄斧１・刀子１などが出土している。

古代

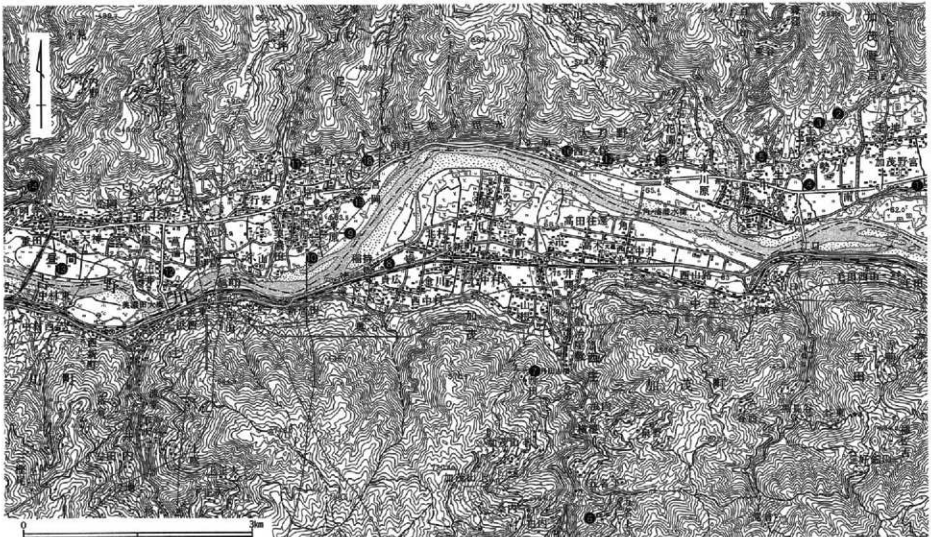
天平七－八年（735－736）頃のものと推定される平城京二条大路出土木簡に「阿波国美馬郡三野郷戸主佐伯国麻呂米五斗」「阿波国美馬郡三野郷戸主佐伯国分米」とあり、八世紀前半の段階で佐伯氏がすでに有力な氏族として存在していたことがわかる。佐伯氏は讃岐国多度郡の国造積直氏の系譜を直接引くといわれ、讃岐との関連が注目される。七世紀中・後期の孝徳・天智天皇頃から当地域では讃岐からの影響を受けながら初期仏教寺院の建設が進んだ。代表例が現美馬郡域にある美馬町の郡里廃寺や現三好郡三加茂町の金丸廃寺（中庄廃寺）である。また、三野町でも弘法大師（空海）が天長年間に開いた、中世三好氏の菩提寺であった加茂野宮の滝寺などの寺院も見られる（寺伝、三野町史記載）。古代の遺跡・遺構では三野町加茂宮遺跡や三好町大柿遺跡、井川町相知遺跡において集落跡が確認された。加茂野宮遺跡からは印や鏡が、相知遺跡からは石帯や掘立柱建物跡が検出されており、両遺構とも官衙的性格をもつ遺跡と推定される。

中世

「阿波国郡村誌」・「阿波古城記」・「阿波志」などによると三野町の勢力には中世山城の屋形山城（館山）・芝生には三好氏（戦国期に阿波および畿内で活躍する三好氏は三好郡を出自とし、郡名を名乗ったとされる）が本拠としていたといわれる芝生城・また清水城・田中城・加茂野宮城などの存在が記載されている。また本調査地の近辺には、中世の窯跡である花園窯もあった。

近世

長宗我部元親が土佐に退くと、蜂須賀家政が入部し、本地域もその知行下となった。江戸時代には当



遺跡名

1 加茂宮遺跡
2 大谷尻遺跡
3 丸山遺跡
4 大塚遺跡
5 楠川遺跡
6 加茂谷岩陰遺跡
7 丹田古墳
8 楠神遺跡
9 東原遺跡
10 西原遺跡
11 足代東原遺跡
12 土井遺跡
13 大柳遺跡
14 土取遺跡
15 花園遺跡
16 太刀野山遺跡(Ⅰ)
17 太刀野山遺跡(Ⅱ)
18 台遺跡
19 宮ノ岡遺跡(Ⅰ・Ⅱ)

第2図　花園遺跡周辺主要遺跡分布図

郡のほとんどが徳島藩の領地であったが現三野町の芝生・太刀野と現三加茂町の加茂村は延宝六年（1678）から享保十年（1725）に富田藩の家臣領であった。三野町には撫養街道のほか讃岐国への街道として撫養街道から分岐して讃岐の塩入村に至る太刀野山越え・真鈴峠越えの道、樫の休場峠越えなどの道があり、中世には武士の通路として利用され、近世以降は、金比羅参詣や塩や米の道となった。加茂野宮滝寺の麓に滝口番所が設けられ、切支丹信者の入国、庶民の出入国、密輸品などの取り締まりを行った。徳島藩は天明期以降山間部の煙草栽培を保護して特産品にしたてていったが美馬郡、三好郡は栽培の中心となった。これらの煙草は、先の讃岐街道が利用され、讃岐・伊予・大阪などへ運ばれていった。三野町の扇状地では、旱魃と洪水が繰り返され、河内谷川の治水に着手したのは、近世後期のことで、文化－文政期（1804－30）には三村用水・太刀野用水などが開削された。

近現代

明治22年（1899）の町村制施行により、三野町が成立し、大正13年（1924）町制を施行して現在に至る。近代以降も水との戦いは続き、ため池や用水路が整備された。また、近世以来の讃岐への街道は、明治以降三好郡の山間部一帯から借耕牛の出稼ぎなどのために通った。

主な参考文献

奥村清　西村宏　村田守　小澤大成　共著　自然の歴史シリーズ④　『徳島　自然の歴史』

寺戸恒夫　編著　『徳島の地理』　徳島地理学会

湯浅良幸　『徳島県』

『徳島県の地名　日本歴史地名大系37』平凡社

福井好行　『徳島県の歴史』

天羽利夫　岡山真知子　『徳島の遺跡散歩』

森浩一企画　菅原康夫　『日本の古代遺跡　37　徳島』

東　潮他　『川と人間―吉野川流域史―』

『三野町誌』

『三好町誌』

同志社大学文学部考古学調査報告　第４冊『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』1971年

『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.7　1995年、Vol.9　1997年

3 調 査 成 果

(1) 遺跡の基本層序

本遺跡は、吉野川の支流河内谷川の扇状地の西側および吉野川により形成された河岸段丘上の南に向かった緩傾斜面に位置する。標高は約107.5m～112mを測り、北西方向から南東方向に向かって、A区、B区、C区とだんだん低くなる。調査地の標高は最も高い地点が、段丘上の上位面に位置するA区の北西端で約112m、南東にかけて低くなり南東端で約109mを測る。B区は北西端で約111mを測り、同じく南東にかけて低くなり南東端では約108mとなる。C区はさらに低くなり、北西端で109mを測り、南東端で約107mとなる。したがってA区からC区は約4.5mの高低差がある。

本調査地は、調査前は段々畑としてみかん畑や桑畑として利用されていたり、荒地となっていた土地である。そのためこうした段々畑の耕作に伴う削平や石垣の構築などによる盛り土、あるいは斜面にあるため大雨の鉄砲水による土砂崩れなどにより遺構の遺存状況は良好とはいえない。

A区北壁の基本層序は、次のとおりである。(第3図)

1．暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土　耕作土である。
みかん、桑、植材用の苗木の育成などに利用されている。調査区全体にわたり確認される。

2．暗オリーブ色砂質土2.5Y3/3砂質土　0.2cm～3cmの礫を大量に含む。磁器、陶磁器片を含む。灰化物を小量含む。

3．黄灰色2.5Y4/1砂質土　砂性強く灰化物・マンガン・0.2cm～0.5cmの礫を少量含む。
1～3層は北壁の東側で2度にわたる大雨による鉄砲水で流され、山土の押し出しを受けている。

4．オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土　砂性強く、灰化物少量含む、0.2cm～1cmの礫を多量に含む。磁器・土器片少量含む。
近世の磁器が出土し、近世の遺構面と思われる。北壁の東側では、大雨によると思われる流出で見られない。

5．灰黄褐色10YR4/2砂質土　砂性強く、磁器・陶器・灰化物少量含む。0.2cm～1cm大の礫を含む。
近世の包含層。

6．褐灰色10YR4/1砂礫層　黒い粘土状（牛糞）の塊をブロック状に多量に含む。0.5cm～3cmの礫を多量に含み、10cm大の礫・灰化物を少量含む。

7．暗灰黄色2.5Y4/2砂質土　0.2cm～1cm大の礫を含む。マンガンを極少量含む。

8．暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土　0.2cm～1cm大の礫を少量含む。中世の包含層。

9．灰黄褐色10YR4/2砂質土　粘性ややあり、0.2cm～6cm大の礫を少量含む。中世の遺構面。

10．灰黄褐色10YR4/2砂質土　砂性強く0.5cm～1cm大の礫を含む。

11．暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土　粘性強く灰化物を少量含む、0.5cm～1cmの礫を少量含む。

12．にぶい黄褐色10YR4/3砂質土　粘性強く、0.5cm～2cm大の礫を少量含む。

B区西壁の基本層序は次の通りである。(第４図)

1．黒褐色10YR3/2砂質土　灰化物を含む。耕作土である。

2．灰黄褐色10YR4/2砂質土　粘性やや有り、0.2cm～１cm大の礫を含む。

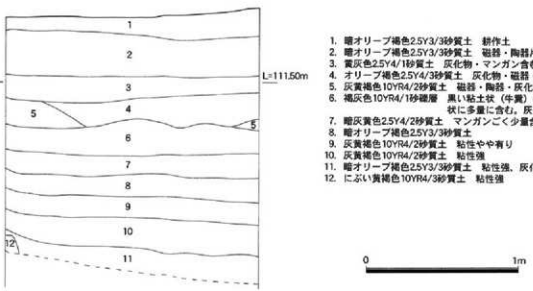
3．にぶい黄褐色10YR4/3砂質土　0.2cm～１cm大の礫・土器片を含む。遺物包含層。

4．にぶい黄褐色10YR5/3砂質土　0.2cm～１cmの礫を極少量含む。この上の面が遺構面。

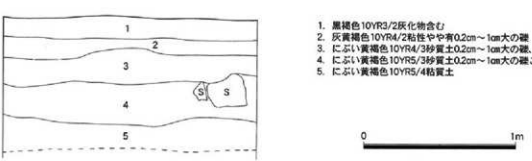
5．にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

C区西壁の基本層序

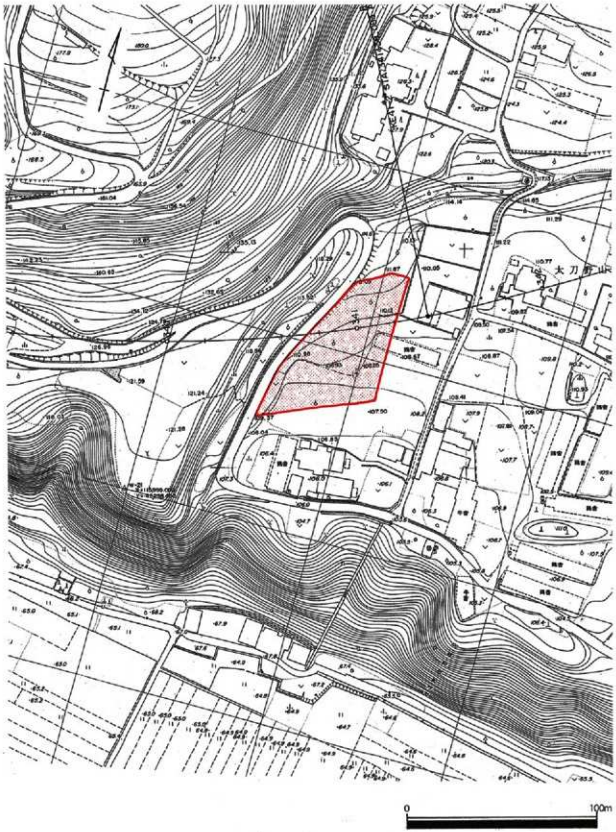
C区はA区、B区でみられた上層が剥ぎ取られ、表土直下に地山がみられる。近世のころに開墾され、耕作土を盛り土したと思われる。



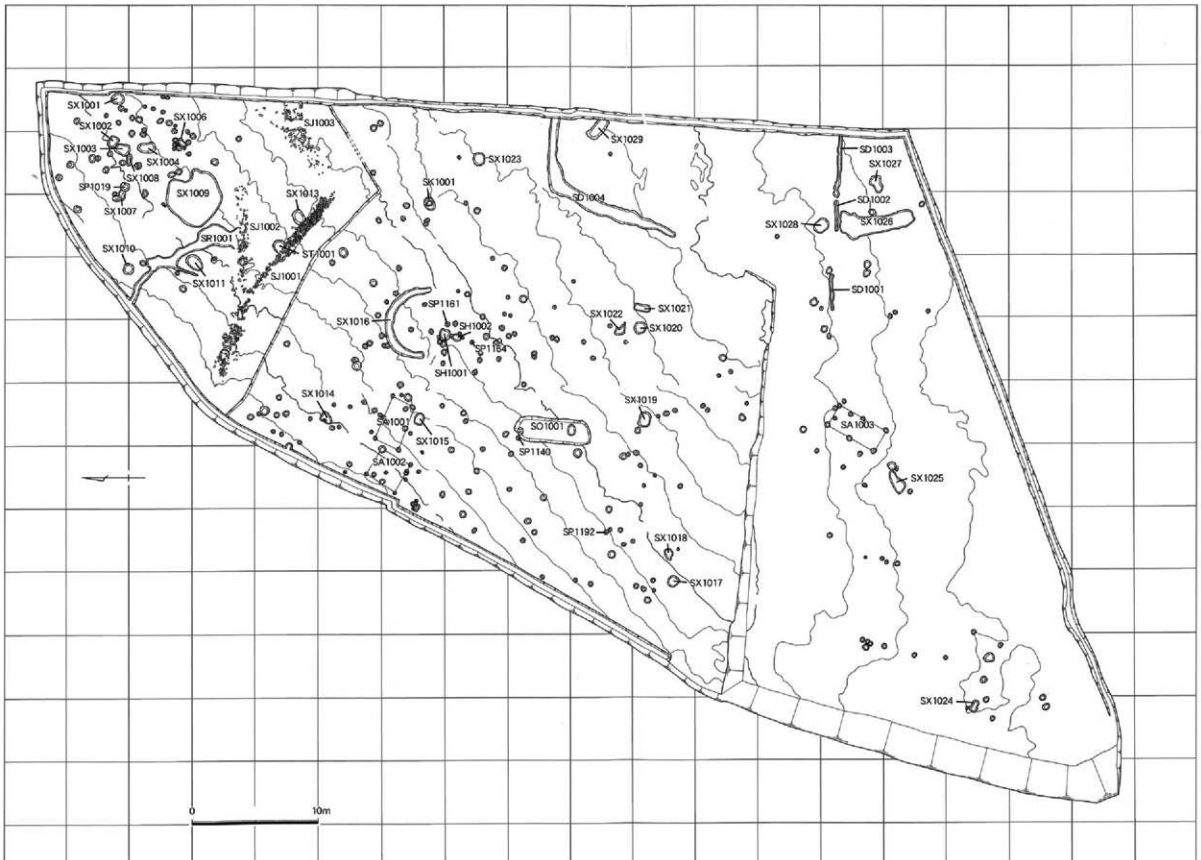
第３図　A区北壁基本土層図



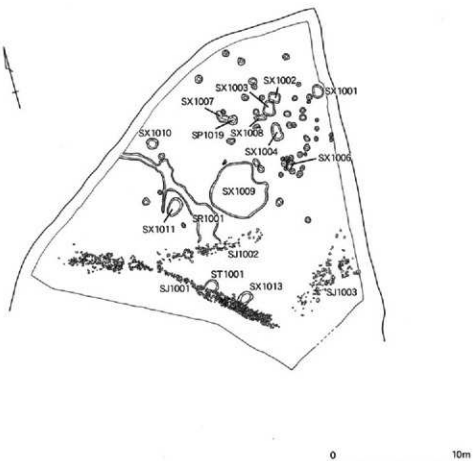
第４図　B区西壁基本土層図



第５図　花園遺跡調査地位置図



第６図　花園遺跡遺構全体図


SX1002
SX1003
SX1001
SX1007
SX1010
SP1019
SX1008
SX1004
SX1006
SX1009
SR1001
SX1011
SJ1002
ST1001
SX1013
SJ1001
SJ1003
0
10m

第７図　Ａ区遺構配置図

(2) 検出された遺構と遺物

A　区（第７図）

調査区の中では最も北側に位置するＡ区からは、暗渠３条・柱穴52基・自然流路１条・火葬墓１基・不明遺構11基が検出された。遺構はＡ区とＢ区の北部に集中している。Ａ調査区は標高約110.5mから109.1mに位置する緩斜面で、南東方向に向かって低くなる。出土土器は全体に中世、室町時代のものが多く土鍋、土釜、擂鉢が大半を占める。また土器類はいずれも小片となって出土しており、出土遺物で全体の器形が判明する個体は少ない。

Ａ区の遺構と遺物

暗渠１（SJ1001）（第８・９図）

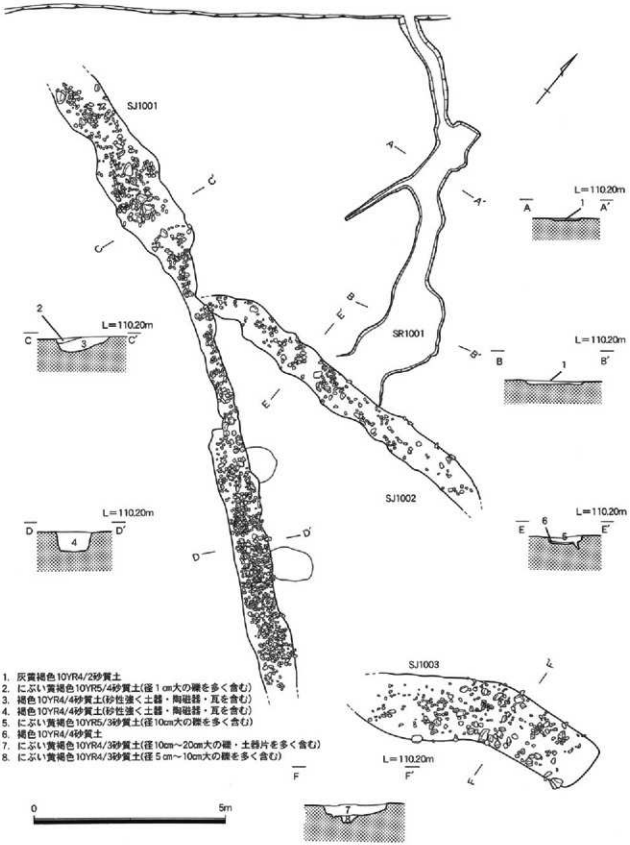
Ａ区南部、Q-８・Q-９・P-９・P-10・O-10グリッドにかけて検出した暗渠である。標高約110.4mから109.3mに位置し緩傾斜面に対して垂直に北西方向から南東方向に延びる暗渠であり、その途中で焼土墓１（ST1001）と不明遺構13（SX1013）の遺構と切り合っている。また、暗渠１（SJ1001）は東西方向に構築された暗渠３条のうちの最も長いものであり、北西から南東方向に長さ約17m、幅約0.8m～1.6m、最深部で約0.6mを測る。覆土はCC′地点では２層となっており、１層はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～1.0cm大の礫を多量に含む。２層は褐色砂質土で砂性が強く0.2cm～20.0cm大の礫を多量に含み、また土器、陶磁器、瓦も含む。一方DD′地点では覆土は１層となっており、褐色砂質土で砂性強く0.2cm～20.0cm大の円礫を多量に含むとともに、CC′地点と同じく土器、陶磁器、瓦を含む。この暗渠１（SJ1001）からは底の部分から石鏃、上の部分からたくさんの瓦や陶磁器が出土した。また、円礫は砂岩でにぎり拳大（約10cm前後）のものが一番多く、無作為に並べられた感じで、割れた瓦も所々に入っていた。これらの遺物は大半が近世のもので、底の部分から出土した石鏃は水の流れ込みなどによるものと考えられる。室町時代と考えられる火葬墓１（ST1001）を半分切るように構築されており、出土遺物等からも時期は近世のものと考えられる。

出土遺物（第10図）

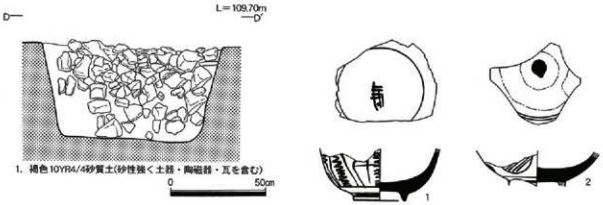
磁器碗、陶器、多量の平瓦および丸瓦、土師質の火鉢、土師質の釜、土師質の皿の細片、サヌカイト製の石鏃などが出土した。

１・２は、肥前系の磁器碗である。１は、畳付のみ無釉で砂が付着している。見込みに「寿」の字、外面に線描きの文様を染め付けている。２は、見込蛇ノ目釉剥ぎである。外面に丸文が描かれている。18世紀後半のものである。３・４は、大谷焼の陶器鉢である。内外面に暗いみのブラウンの鉄釉をかけている。高台および底面は無釉である。同一個体と考えられる。５は、土師質土器の椀である。底径は4.6cmで内外面はナデ調整、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり底部と体部との境は外方向へ突出する。底部は静止糸切りで、16世紀のものと考えられる。

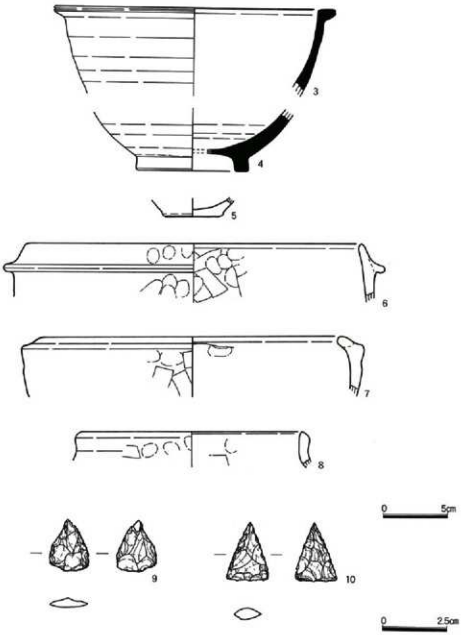
６・７・８は、土師質土器の釜である。６は、口径26cm、鍔径30.0cmで口縁部はやや内傾し、下方に断面楕円形の長めの鍔が水平につく。内外面ともユビオサエ後ナデ調整である。７は、口径23.4cmで口縁部が体部との境で内方向へ屈曲し肥厚、退化した鍔が口縁部と体部との境に突出するようにつく。内



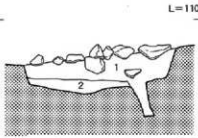
第8図　SR1001，SJ1001・1002・1003実測図



第９図　SJ1001遺構断面図



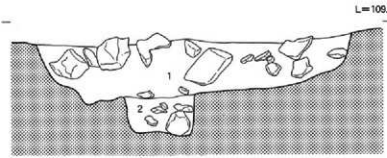
第10図　SJ1001出土遺物実測図



1. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土(径10cm大の礫を多く含む)
2. 褐色10YR4/4砂質土

0　50cm

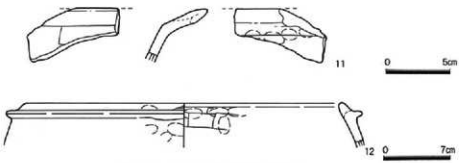
第11図　SJ1002遺構断面図



1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(径10cm～20cm大の礫・土器片を多く含む)
2. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(径5cm～10cm大の礫を多く含む)

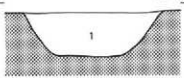
0　50cm

第12図　SJ1003遺構断面図



第13図　SJ1003出土遺物実測図

第15図　SP1019出土遺物実測図



1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土

0　50cm

第14図　SP1019実測図

外面ともユビオサエ、ナデ調整である。8は、茶釜である。口径17.4cmを測り、口縁部が直立し口縁端部を丸くおさめる。内外面はユビオサエ、ナデ調整である。

9・10は、サヌカイト製の石鏃である。いずれも鏃身三角形の平基無茎式の石鏃である。9は、長さ2.0cm、幅1.55cm、厚さ0.4cm、重さ0.9g、10は、長さ2.3cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ1.2gを測る。いずれも表裏面とも細かな調整加工が施され、横断面形は凸レンズ状を呈する。9は、器体先端の一部を欠損する。5から10は、発掘時あるいは大雨などによる混入と考えられる。

暗渠2（SJ1002）（第8・11図）

A区南側、Q-9・Q-10・Q-11にかけて検出した暗渠である。標高約110mから109.6mに位置し、東西方向に斜面に沿ってほぼ平行に検出された。長さ約8.4m、幅約0.6m～1.0m、深さ約0.3mを測る。西端は暗渠1（SJ1001）と接し、暗渠2（SJ1002）へ流れ込むように構築されている。覆土は2層に分層でき、1層は、にぶい黄褐色砂質土0.2cm～1.0cmの礫および10cmの礫を多量に含む。2層は、褐色砂質土である。底面はやや中央部が低くなり、1層が大きく突出した部分が見えるが、暗渠の杭の跡と考えられる。時期は暗渠1（SJ1001）と同じ近世のものと考えている。多量の石は出土したが土器などの遺物の出土はなかった。

暗渠3（SJ1003）（第8・12図）

A区南東端部、O-11・P-11・P-12にかけて検出した暗渠である。標高約109.2m～109.3m前後に位置し、斜面に対してほぼ平行に検出された。A区南東端部より南西方向に延び、西端ははっきりしないが暗渠1（SJ1001）と接していた可能性がある。また、暗渠2（SJ1002）と平行に延びるように構築されている。長さ約5.5m、幅約1.7m、深さ0.5mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は、にぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、10cm～20cm大の礫を多量に含む。また、土器片も含む。2層は、同じくにぶい黄褐色砂質土で5cm～10cm大の礫を多量に含む。覆土中より土師質土器の釜、鍋、器種不明の小さな土器片などが出土したが大半は実測不能であった。時期は同じく近世と考えている。

出土遺物（第13図）

11は、土師質土器の鍋である。径は測定できなかった。口縁部は「く」の字状に体部との境で大きく外上方へ屈曲し、口縁端部は尖り気味におさめる。内面は丁寧な板状工具によるナデ、外面はユビオサエ後丁寧なナデ調整である。12は、土師質土器の釜である。口径33.2cm、鍔径37.4cm、を測る。口縁部は体部上位より内傾し口縁端部を丸くおさめる。また、口縁部下方に断面楕円形の長めの鍔が水平につく。内外面ともユビオサエ後板状工具によるナデ調整を施している。

柱穴19（SP1019）（第14図）

A区北部の中央、S-11で検出された柱穴である。標高約110mに位置し、西側を不明遺構7（SX1007）と切り合っている。長軸0.67m、短軸0.53m、深さ0.22mを測る。平面形は不整な円形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～1cm大の礫を多量に含む。覆土中より土師質土器の皿と擂鉢の破片1個が出土している。擂鉢の破片は実測不能であった。

出土遺物（第15図）

13は、土師質土器の皿である。底径5.3cmを測る。体部は底部から外上方に直線的に立ち上がり、体部外面の強いナデにより底部との境に段を有する。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。

自然流路１（SR1001）（第８図）

Ａ区中央部、西端より中央へR-９・R-10・Q-10グリッドにかけて検出した。標高約110.4m～109.9mに位置し、長さ約10.5m、幅約0.3m～1.6m、最大深度0.22mを測る。南端は、暗渠２（SJ1002）と接し、大雨などによってできた自然流路で暗渠２（SJ1002）へと流れ込んでいたと考えられる。覆土は、にぶい黄褐色砂質土で0.2～１cm大の礫と５cm～10cmの礫を少量含む。また炭化物も含む。覆土中遺物の出土は見られなかった。

火葬墓１（ST1001）（第16図）

Ａ区の南部中央、P-10グリッドから検出された火葬墓である。標高約109.7mに位置する。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.21mを測る。平面形は不整な半円形で、底面はほぼ平坦である。遺構の南半分は暗渠１（SJ1001）に切られており、実際は短軸方向にもっと拡がった楕円形であったと思われる。埋土に炭や焼土に混じって２cm未満の骨片が多数見られた。埋土は３層に分層でき、１層は、灰黄褐色砂質土で砂性強く、炭・骨片・土器片・焼土を多く含み、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。２層は、灰黄褐色砂質土で焼土、炭を含む。３層は、灰黄褐色砂質土で焼土、炭化物を含む。埋土の上部で土師質土器の小皿２枚が出土した。出土遺物より室町時代後半の遺構と考える。

出土遺物（第17図）

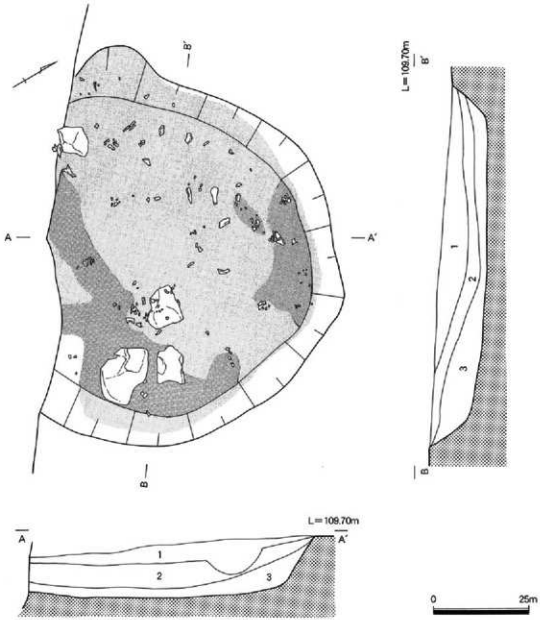
14・15は、土師質土器の皿である。14は、口径5.7cm、器高2.3cm、底径4.7cmを測る。体部が底部より外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。内外面ともにナデ調整で底面は静止糸切りである。15は、口径11.1cm、器高2.4cm、底径4.8cmを測る。体部は底部より直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面の強いナデにより底部との境に段を有する。内外面ともナデ調整を施し、底部静止糸切りである。いずれも16世紀室町時代のものと考える。

不明遺構１（SX1001）（第18図）

Ａ区北部東端、S-12グリッドで検出した不明遺構である。標高約109.9mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈し底面はほぼ平坦である。長軸0.84m、短軸0.52m、深さ0.21mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫および土器片を少量含む。土師質の土器片３個が出土したが、細片のため実測不能であった。時期は16世紀ごろと考える。

不明遺構２（SX1002）（第19図）

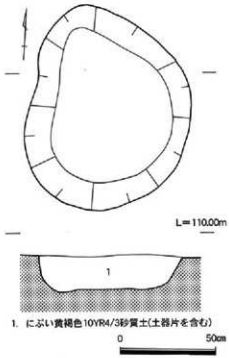
Ａ区北部、S-11グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構３（SX1003）の隣、標高約110mに位置する。平面形は隅丸の長方形で長軸1.03m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。底面は東の方が低くなっている。埋土は褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、10cm大の礫、土器片を少量含む。土師質土器の皿の底部が出土したが、細片のため実測不能であった。時期は16世紀ごろと考える。



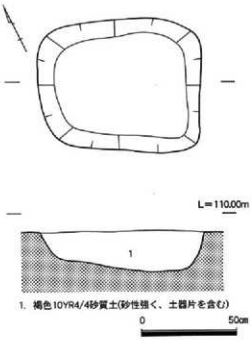
1. 灰黄褐色10YR4/2砂質土(砂性強く、炭・骨片・土器片・焼土を含む)
2. (焼土・炭を含む)
3. (焼土・炭化物を含む)

第16図　ST1001実測図

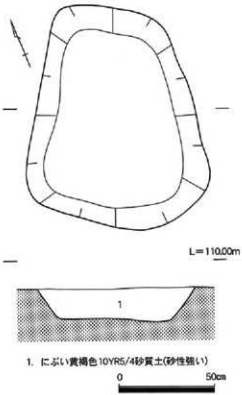
第17図　ST1001出土遺物実測図



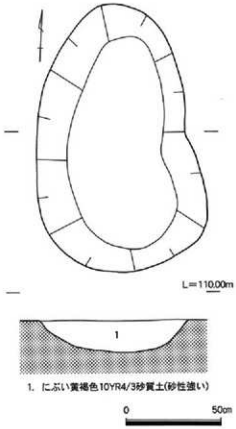
第18図　SX1001実測図



第19図　SX1002実測図



第20図　SX1003実測図



第21図　SX1004実測図

不明遺構３（SX1003）（第20図）

Ａ区北部、S-11・R-11グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構２（SX1002）とは北東の隅で、不明遺構８（SX1008）とは南西の隅で隣接する。標高約110mに位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸1.14m、短軸0.72m、深さ0.19mを測る。底面は東がやや低くなっているがほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、５cm～10cm大の礫を含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構４（SX1004）（第21図）

Ａ区北部の東側寄り、R-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約109.8m、不明遺構３（SX1003）の南に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.32m、短軸0.6m、深さ0.25mを測る。底面は丸く緩やかに立ち上がる。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～0.5cm大の礫、５cm～10cm大の礫を少量含む。土師質土器の皿を２点出土したが細片のため実測不能であった。時期は16世紀ごろと考える。

不明遺構５（SX1005）欠番

不明遺構６（SX1006）（第22図）

Ａ区中央部東側寄り、R-11グリッドで検出した不明遺構である。平面形は中央が少し窪んだ不整な楕円形で、底面は平坦である。標高約109.7mに位置し、長軸0.88m、短軸0.52m、深さ0.16mを測る。埋土は灰黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構７（SX1007）（第24図）

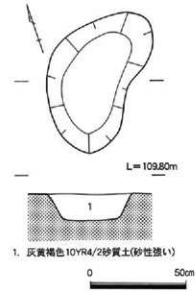
Ａ区北部の中央、S-10、S-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約110mに位置し、平面形は「く」の字型に屈折した不整な楕円形であるが、２つの遺構が切り合っている可能性もある。また、東の端は柱穴19（SP1019）と切り合う。長軸0.95m、短軸0.74m、深さ0.16mを測る。底面はやや丸みをおび、東側の底面は緩やかに立ち上がる。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～1cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構８（SX1008）（第23図）

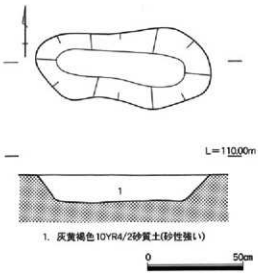
Ａ区北部の中央、S-11、R-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約110mに位置し、平面形は不整な楕円形で底面は平坦である。長軸0.90m、短軸0.22m、深さ0.15mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、５cm～10cm大の礫多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構９（SX1009）（第26図）

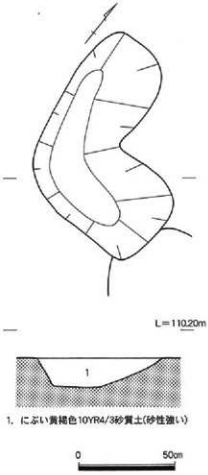
Ａ区中央部、R-10、R-11、Q-10、Q-11グリッドで検出した不明遺構である。自然流路１の約0.2m東、標高約110mに位置する。平面形は一部が窪んだ不整な円形で、底面はほぼ平坦、東に向かって低くなっている。長軸4.55m、短軸4.40m、深さ0.18mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、土器片を含む。また0.2cm～１cm大の礫を多量に含む。覆土中より土師質土器の擂鉢、器種不明の底部などの細片が３点出土したが実測不能であった。時期は出土遺物より16世紀ごろと考える。



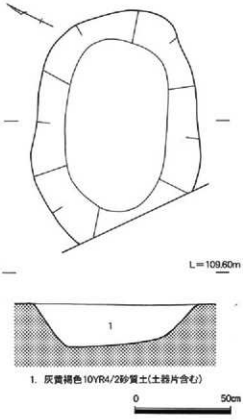
第22図　SX1006実測図



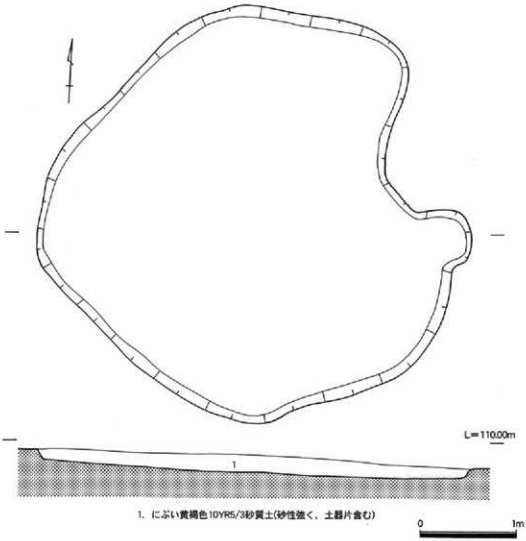
第23図　SX1008実測図



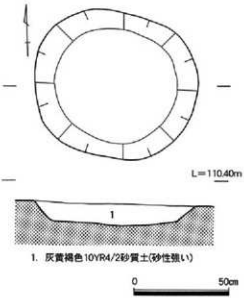
第24図　SX1007実測図



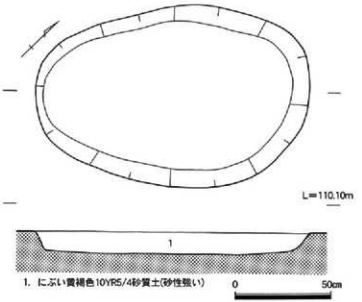
第25図　SX1013実測図



第26図　SX1009実測図



第27図　SX1010実測図



第28図　SX1011実測図

不明遺構10（SX1010）（第27図）

A区中央部の西端、自然流路1（SR1001）の北、S-9、R-9グリッドで検出した不明遺構である。平面形は円形を呈し、底面は平坦である。標高約110.3mに位置し、長軸0.84m、短軸0.78m、深さ0.13mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～1cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

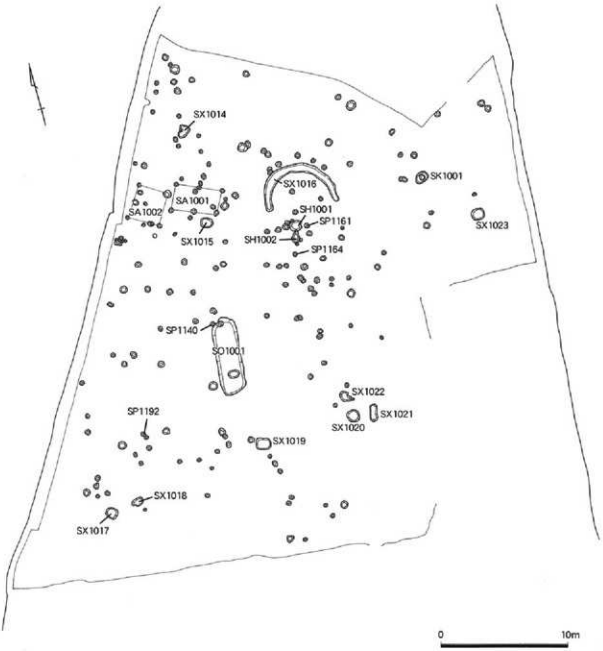
不明遺構11（SX1011）（第28図）

A区中央部、R-9、Q-9、R-10グリッドで検出した不明遺構である。自然流路1（SR1001）の南、標高約110mに位置し、平面形は不整な楕円形を呈し、底面は平坦である。長軸1.40m、短軸0.85m、深さ0.13mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構12（SX1012）欠番

不明遺構13（SX1013）（第25図）

A区南部、P-10グリッドで検出した不明遺構である。標高約109.5mに位置する。南西部分が暗渠1（SJ1001）と切り合っているが平面形は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で北部に向かって深くなっている。長軸1.05m、短軸0.60m、深さ0.23mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、3cm～5cm大の礫、土器片を少量含む。覆土中より器種不明の土師質土器の細片1個が出土したが実測不能であった。



第29図　B区遺構配置図

B　区（第29図）

調査区の中では中央部に位置し、A区より少し下がった標高約110mから108mを測る。また、B区も南東方向に向かって低くなっている。遺構はB区北部に多く、南東部は少ない。B区からは、掘立柱建物跡2棟、炉跡2基、土坑1基、窯跡1基、柱穴175基、不明遺構10基を検出した。出土土器は全体に中世室町時代のもので、A調査区と同じように土師質土器の皿、土釜、擂鉢が多い。また、出土した土器片は小さく実測不可能なものが多かった。

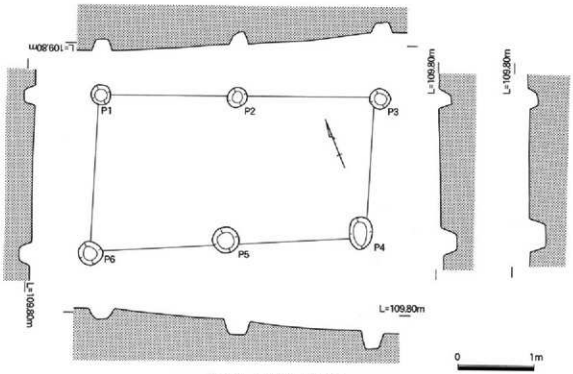
B区の遺構と遺物

掘立柱建物跡1（SA1001）（第30図）

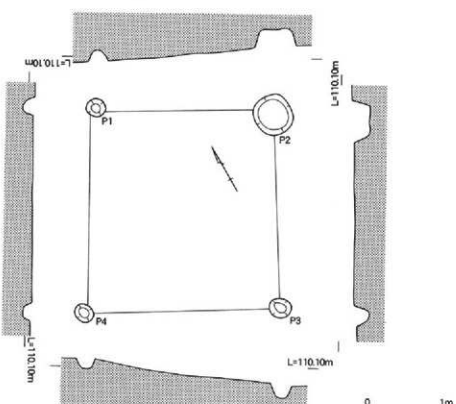
B区の北西部、N-6．7、O-6グリッドで検出した掘立柱建物跡である。6基の柱穴により構成される。B区の最頂部近く標高約109.9m～約109.6mに位置し、梁間1間（2.12m）、桁行2間（3.68m）で棟方向はN-69°-Wで、緩斜面に対しほぼ直角に建っていたと思われる。柱間距離は梁間1.9m～2.12m、桁行1.76m～1.88mを測る。柱穴の掘り方は不整円形を呈し、直径0.22m～0.29m、深さ0.15m～0.27mを測る。P1は、直径0.24m、深さ0.15mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～3cm大の礫を含む。P2は、直径0.22m、深さ0.19mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で、やや粘性が有り、0.2cm～1cm大の礫を含む。P3は、直径0.27m、深さ0.16mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1.0cm大の礫を含む。P4は、直径0.29m、深さ0.27mを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で粘性強く0.2cm～0.5cm大の礫を小量含む。また、P4の柱穴覆土中より土師質土器の釜と皿の破片が出土したが、実測不能であった。P5は、直径0.29m、深さ0.21mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～3cm大の礫を小量含む。P6は、直径0.24m、幅0.15mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。また、掘立柱建物跡1（SA1001）より南約10mのところで炭窯跡1（SO1001）が検出され、その炭窯跡に関連した遺構の可能性もある。時期は出土遺物より室町時代と考えられる。

掘立柱建物跡2（SA1002）（第31図）

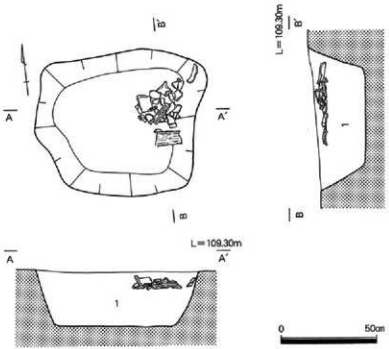
B区の北西端部、掘立柱建物跡1（SA1001）の西、N-6、O-6グリッドで検出した。4基の柱穴により構成される。B区の最頂部約110.2m～109.9mに位置し、掘立柱建物跡1（SA1001）よりやや高い所で検出された。北西から南東へ柱間距離2.4m～2.55m、北東から南西へ柱間距離2.65m～2.66mを測り、棟方向はN-60°-Wで、緩斜面に対しほぼ平行に建っていたと思われる。柱穴の掘り方は不整円形を呈し、直径0.17m～0.49m、深さ0.13m～0.28mを測る。P1は直径0.17m、深さ0.15mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。P2は直径0.49m、深さ0.21mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。P3は直径0.24m、深さ0.28mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土は埋土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。P4は直径0.20m、深さ0.13mを測り、平面形はやや楕円形を呈する。覆土はにぶい黄褐



第30図　SA1001実測図

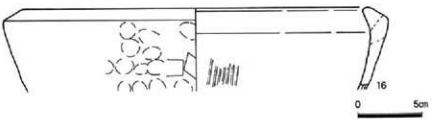


第31図　SA1002実測図

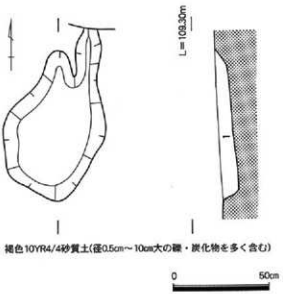


1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(砂性強く炭化物・土器を多く含む)

第32図　SH1001実測図



第33図　SH1001出土遺物実測図



1. 褐色10YR4/4砂質土(径0.5cm～10cm大の礫・炭化物を多く含む)

第34図　SH1002実測図

色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。SA1002もSA1001と同様に南東約10mで検出された炭窯跡1（SO1001）と関連がある遺構の可能性がある。埋土中より出土した遺物はなかった。

炉跡1（SH1001）（第32図）

B区北部中央、N-8・M-8グリッドより検出した炉跡である。標高約109.2mに位置し、平面形は不整な方形を呈し、底面はほぼ平坦、長軸0.97m、短軸0.77m、深さ0.29mを測る。すぐ南にある炉跡2（SH1002）と接する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、炭化物・土器片を多量に含む。埋土中より土師質土器の鍋・釜・皿などの破片約10個が出土したが実測可能なものは少なかった。

出土遺物（第33図）

16は、土師質土器の擂鉢である。体部は外上方に立ち上がり、口縁部は肥厚し、内方へ屈曲する。端部は丸くおさめる。体部内面は3条/cmの櫛描条線を施す。外面はユビオサエ後ナデ、内面はナデ、櫛描条線を施す。16世紀ごろの土器と思われる。

炉跡2（SH1002）（第34図）

B区北部中央、M-8グリッドより検出した炉跡である。炉跡1（SH1001）の南端と接する。標高は炉跡1（SH1001）と同じ約109.2mに位置し、平面形は一部が大きく窪んだ不整形である。長軸0.94m、短軸0.36m、深さ0.09mを測る。底面はほぼ平坦で北に向かって浅くなっている。覆土は褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を少量含み、0.5cm～10cm大の礫および炭化物を多量に含む。覆土中より土師質土器の擂鉢および器種不明の土器片2個が出土したが実測不能であった。

窯跡1（SO1001）（第35図）

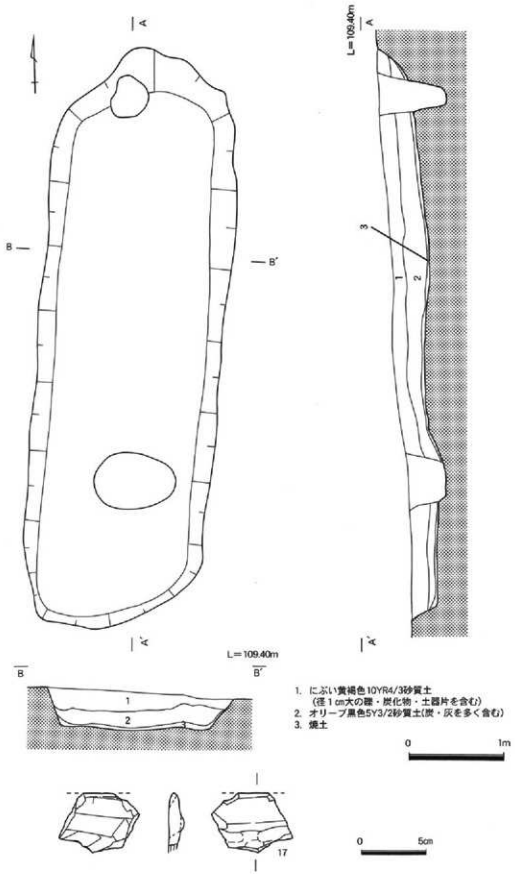
B区中央部西寄り、K-7・L-7グリッドで検出した。標高約109.3m～約108.9mに位置し、長軸方向はN-89°-Eに向く。平面形は不整な隅丸長方形で長軸5.9m、短軸1.95m、深さ0.4mを測る。北から南に向いて下る緩斜面上に構築されており北の隅の中央部でピットが検出された。底面は緩やかに南から北に上昇している。埋土は3層で、1層は、にぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を少量、炭化物、土器片を含む。2層は、厚さ20cmほどでオリーブ黒色砂質土、炭や灰が多量に含まれていた。3層は、焼土で底から壁際に沿って遺構面に達していた。埋土中より木炭、土師質土器の皿、鍋、釜などが数点出土したが、いずれも細片で釜以外は実測不能であった。

出土遺物（第35図）

17は、土師質土器の釜である。径は測定不能であった。口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。鍔は退化して突帯状となる。内面はナデ、外面はユビオサエ後ナデ調整を施す。

柱穴140（SP1140）（第36図）

B区の中央部西側寄り、L-7グリッドで検出した。炭窯跡1（SO1001）の北西の隅に隣接する。平面形はほぼ円形、底面は平坦である。標高約109.3mに位置し、長軸0.28m、短軸0.27m、深さ0.20mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を少量、炭化物および土器片を含む。埋土中



第35図　SO1001遺構・出土遺物実測図

より土師質土器の釜が出土した。

出土遺物（第37図）

18は、土師質土器の釜である。破片が小さく口径は測定できなかった。口縁部は体部上位より内傾し、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。断面三角形の短い鍔が口縁部と体部との境に突帯状につく。外面はユビオサエ、内面は板状工具によるナデ調整である。時期は室町時代のものと考える。

柱穴161（SP1161）（第38図）

Ｂ区中央の炉跡１（SH1001）の東隣、M-8グリッドで検出した。標高約109.2mに位置し、長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な円形で、底面はほぼ平坦である。覆土は褐色砂質土、0.2cm～１cm大の礫、および10cm大の礫、土器片を少量含む。埋土中より長さ28.3cm、幅13.5cmの焼けた石と土師質土器の茶釜が出土した。出土遺物から付近の炉跡と何らかの関係があると思われる。

出土遺物（第39図）

19は、土師質土器の茶釜である。口径13.9cm、器高16.4cm、鍔径28.0cmを測る。球形の体部にやや外傾気味に直立する短い口縁がつく。口縁端部は方形におさめる。体部中央、口縁部と平行に長い鍔がつく。鍔端部は方形に仕上げる。体部最張部２ヶ所に板状の把手を貼り付け、把手の基部内側に円孔を施す。

柱穴164（SP1164）（第40図）

Ｂ区の中央部、M-８グリッドで検出した柱穴である。炉跡２（SH1002）の約１m南に位置し、標高約109.1m、長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.16mを測る。平面形はほぼ円形を呈し、底面はやや丸くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で粘性やや有り、0.2cm～3cm大の礫、および炭化物を少量含む。覆土中より土師質の擂鉢が出土した。

出土遺物（第41図）

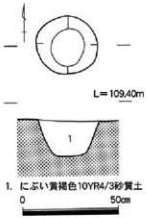
20は、備前系陶器の擂鉢である。口縁部は肥厚し、口縁端部は欠損している。体部内面に３条/0.9cm１単位の櫛描条線を施す。胎土は結晶片岩を含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。時期は15世紀から16世紀のものと思われる。

柱穴192（SP1192）（第42図）

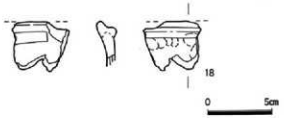
Ｂ区の南西部、K-５グリッドで検出した。標高約109.2m、長軸0.28m、短軸0.26m、深さ0.24mを測る。平面形は不整な円形を呈し、底面はやや丸くなっている。覆土は、にぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を少量含み、炭化物、土器片を含む。覆土中より土師質土器の擂鉢が出土した。

出土遺物（第43図）

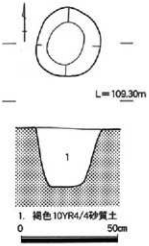
21は、土師質土器の擂鉢である。体部は底部より直線的に立ち上がり、底部は外方向に突出する。体部内面はヨコハケ（7本/cm）後櫛描条線（4条/1.3cm）、外面はユビオサエ後ナデを施す。時期は室町時代のものと思われる。



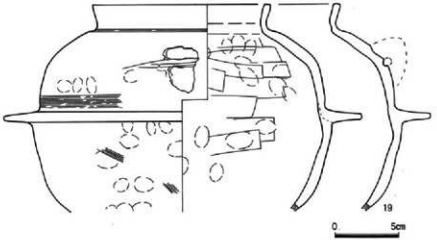
第36図　SP1140実測図



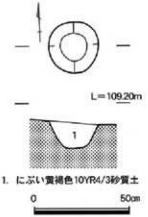
第37図　SP1140出土遺物実測図



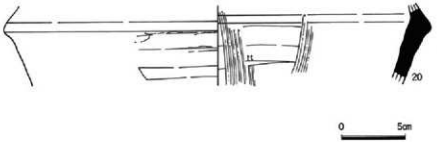
第38図　SP1161実測図



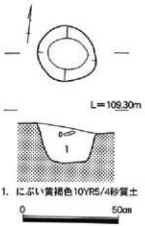
第39図　SP1161出土遺物実測図



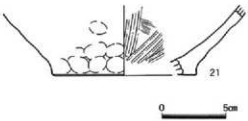
第40図　SP1164実測図



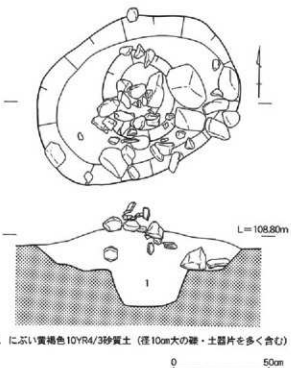
第41図　SP1164出土遺物実測図



第42図　SP1192実測図



第43図　SP1192出土遺物実測図



第44図　SK1001実測図

土坑１（SK1001）（第44図）

Ｂ区北東部、N-10グリッドより検出した土坑である。標高108.7mに位置し、平面形は不整な楕円形を呈する。長軸0.95m、短軸0.85m、最深部で0.34mを測り、底面は中央部が一段と深くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含み、10cm大の礫および土器片を多量に含む。埋土中より土師質土器の鍋・擂鉢・甕の底部など数点が出土したが、いずれも細片で実測不能であった。

不明遺構14（SX1014）（第45図）

Ｂ区の北西部、O-７グリッドより検出した不明遺構である。標高約110mに位置し、長軸1.00m、短軸0.70m、深さ0.10mを測る。平面形は不整な隅丸三角形を呈し、底面はほぼ平坦で東に向かって低くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～0.5cm大の礫および0.5cm～10cm大の礫を含む。また、炭化物を多量に含む。出土遺物はなかった。

不明遺構15（SX1015）（第46図）

Ｂ区の北西部、掘立柱建物跡１（SA1001）のすぐ南、N-７グリッドより検出した不明遺構である。標高は約109.6mに位置し、長軸0.88m、短軸0.70m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～0.5cm大の礫、および５cm～10cm大の礫、土器片を含む。覆土中より土師質土器の皿、器種不明の細片などが出土した。

出土遺物（第47図）

22は、土師質土器の皿である。底径10.5cmを測る。内外面とも丁寧なナデを施し、体部は底部より外上方に直線的に立ち上がる。底部と体部との境は不明瞭である。

不明遺構16（SX1016）（第48図）

B区の北部中央、掘立柱建物跡1（SA1001）より約3.5m東に位置するN-8グリッドより検出した不明遺構である。標高約109m～109.4mに位置し、長軸0.65m、短軸0.52m、深さ0.20mを測る。平面形は隅丸な三日月状を呈する。底面はほぼ平坦で、東の方向へ向かって低くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～10cm大の礫を多量に含む。出土遺物はなかった。

不明遺構17（SX1017）（第49図）

B区の南西部、J-4グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構18（SX1018）より1.5m西、標高約109mに位置し、長軸0.85m、短軸0.74m、深さ0.20mを測る。平面形は不整な楕円形で底面は平坦、東に向かって低くなっている。出土遺物はなかった。

不明遺構18（SX1018）（第50図）

B区の南西部、J-5グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構17（SX1017）の約1.5m東、標高約109mに位置し、長軸0.88m、短軸0.6m、深さ0.15mを測る。平面形はひとつの角が窪んだ不整な隅丸長方形を呈し、底面は平坦である。出土遺物はなかった。

不明遺構19（SX1019）（第51図）

B区南部の中央、J-7グリッドで検出した不明遺構である。標高約108.7mに位置し、長軸1.12m、短軸0.92m、0.15m深さを測る。平面形は不整な楕円形を呈し、底面は平坦である。出土遺物はなかった。

不明遺構20（SX1020）（第52図）

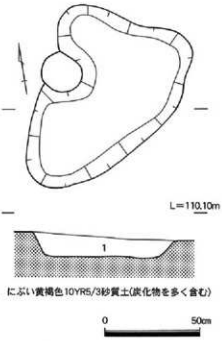
B区の南部、J-8グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構22（SX1022）の約1m南、および不明遺構21（SX1021）の約0.8m西と比較的近くに3つの不明遺構が検出された。標高約108.4mに位置し、長軸0.95m、短軸0.85m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な円形で底面は平坦である。覆土中に礫を含む。出土遺物はなかった。

不明遺構21（SX1021）（第53図）

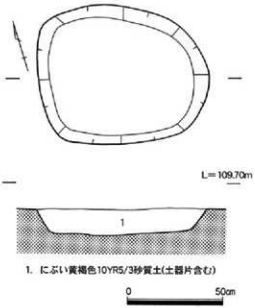
B区の南部、J-9グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構20（SX1020）の約0.8m東、標高約108.4mに位置し、長軸0.86m、短軸0.66m、深さ0.16mを測る。平面形は南側に面する半分が丸く半楕円形、北側の半分が長方形を呈する。覆土中に礫を含む。出土遺物はなかった。

不明遺構22（SX1022）（第54図）

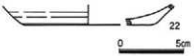
B区の南部、K-8グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構20（SX1020）の約0.8m北、標高



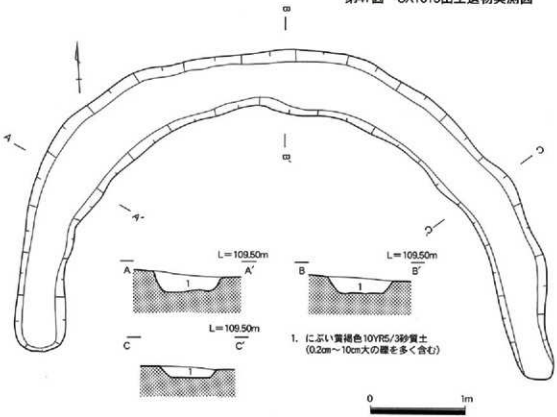
第45図　SX1014実測図



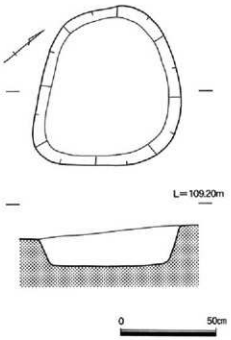
第46図　SX1015実測図



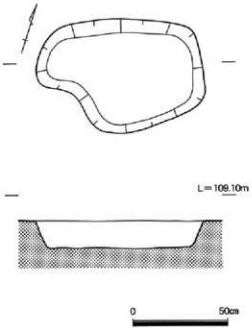
第47図　SX1015出土遺物実測図



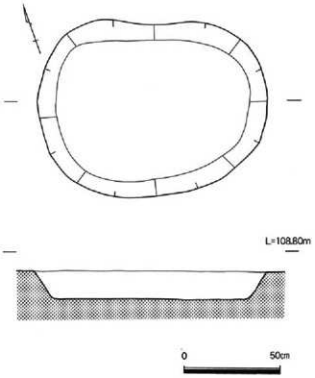
第48図　SX1016実測図



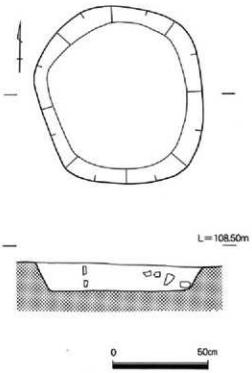
第49図　SX1017実測図



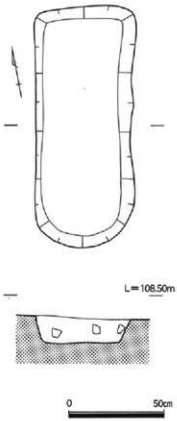
第50図　SX1018実測図



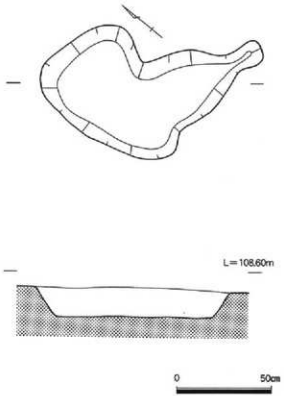
第51図　SX1019実測図



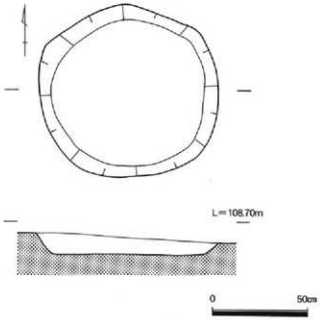
第52図　SX1020実測図



第53図　SX1021実測図



第54図　SX1022実測図

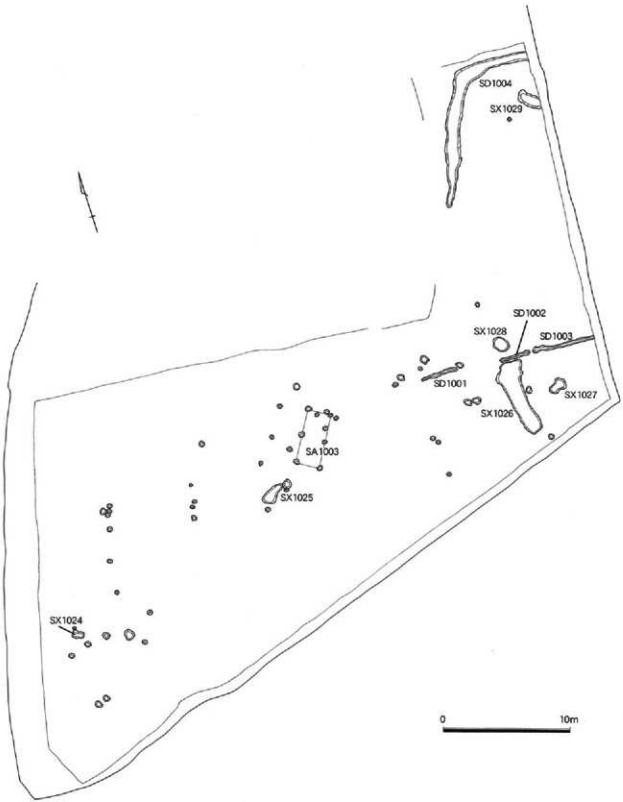


第55図　SX1023実測図

約108.5mに位置する。長軸1.24m、短軸0.48m、深さ0.15mを測る。平面形は、不整な甕箪型で北西の隅はやや角ばり、南東の隅は少し低くなり甕箪の口のように狭くなっているが、2つの遺構が切り合っている可能性も考えられる。底面はほぼ平坦である。出土遺物はなかった。

不明遺構23（SX1023）（第55図）

B区の中央部東端、M-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約108.6mに位置し、平面形は不正な円形を呈する。底面はほぼ平坦で東に向かって低く浅くなっている。長軸0.92m、短軸0.85m、深さ0.10mを測る。出土遺物はなかった。



第56図　C区遺構配置図

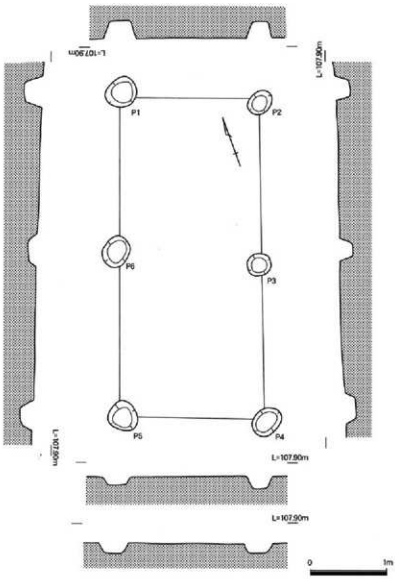
C　区（第56図）

C区は調査区の一番南に位置し、B調査区よりさらに一段下がる。標高約108m～107.3mを測り、南に向かって緩やかに傾斜している。C区では、掘立柱建物跡1基、溝4条、柱穴53基、不明遺構6基を検出した。遺構からの出土遺物は少なかったが、包含層からは中世の土師質土器の釜、擂鉢、近世の陶器などが出土した。

C区の遺構と遺物

掘立柱建物跡3（SA1003）（第57図）

C区中央部、G-6・G-7グリッドで検出された掘立柱建物跡である。6基の柱穴で構成される。標高約107.8m～107.6mに位置し、傾斜に対してほぼ直角に構築されている。梁間1.9m、桁行4.25mを測る。棟方向はN-60°-Wである。柱間距離は梁間1.85m～1.9m、桁行は2.05m～2.2m、柱穴の平面形はどれも不整な円形、あるいは楕円形で、直径0.36m～0.23m、深さ0.12m～0.22mを測る。P1は直径0.30m、深さ0.22mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～3cm大の礫を少量含む。P2は直径0.23m、深さ0.22mを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土はP1と同じである。P3は直径0.30m、深さ0.18mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～0.5cm大の礫を多量、2cm～3cm大の礫および炭化物を少量含む。P4は直径0.36m、深さ0.14mを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を含む。P5は直径0.33m、深さ0.15mを測り、平面形は不整な隅丸三角形を呈する。覆土は褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。P6は直径0.32m、深さ0.12mを



第57図　SA1003実測図

測り、平面形は楕円形を呈する。覆土は褐色砂質土でＰ５と同じく0.2cm～１cm大の礫を多量、５cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

溝１（SD1001）（第58図）

Ｃ区の東側、G-９グリッドで検出した溝である。溝１（SD1001）、溝２（SD1002）、溝３（SD1003）とほぼ東西方向に一直線上に並んで検出された。標高も約107.8m～107.7mと高低差は少なく、極緩やかに西から東に向かって低くなっている。溝１（SD1001）は、３本の中で一番西に検出され、標高約107.8m、長軸2.8m、短軸0.3m、深さ0.1mを測る。左端から右端までほとんど高低差はなく、平面形はほぼ帯状に伸びた長い楕円形で、覆土はにぶい黄褐色砂質土、0.2cm～１cm大の礫および炭化物を含む。また５cm～10cm大の礫を少量含む。付近から掘立柱建物跡などの遺構が検出されていないので、その性格は不明である。覆土中遺物の出土はない。

溝２（SD1002）（第59図）

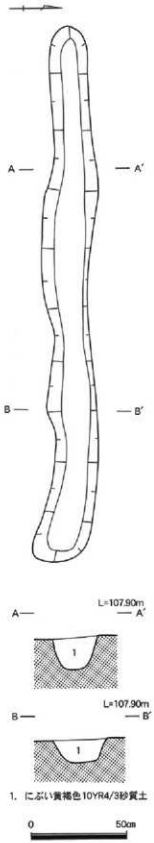
Ｃ区の東側、G-10グリッドで検出した溝である。溝１（SD1001）より約3.5m東で、標高もやや低く約107.7mに位置する。平面形は長い帯状の楕円形を呈する。長軸2.9m、短軸0.26m、深さ0.08mを測り、3本の溝の中では一番短い。埋土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～２cm大の礫を多量、５cm大の礫および炭化物を少量含む。この２号溝付近からも掘立柱建物跡などの遺構は検出されていないので、その性格は不明であるが、0.2m南に不明遺構26（SX1026）が検出されており何らかの関係があるとも考えられる。覆土中より遺物の出土はない。

溝３（SD1003）（第60図）

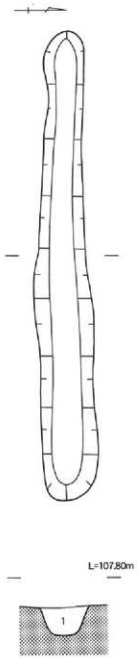
Ｃ区の東端、G-10・G-11グリッドで検出した溝である。３本の溝の中では一番東端に有り、一番長い。標高も溝２（SD1002）と同じで約107.7mに位置し、端から端まであまり高低差はなく、長軸4.85m、短軸0.35m、深さ0.07mを測る。覆土は溝１（SD1001）と同じでにぶい黄褐色砂質土、0.2cm～１cm大の礫および炭化物を含み、５cm～10cm大の礫を少量含む。検出状況から３本の溝は、もともとはつながっていた可能性が考えられる。また、３号溝付近からも掘立柱建物跡などの遺構は検出されていないのでその性格は不明である。覆土中より遺物の出土はなかった。

溝４（SD1004）（第61図）

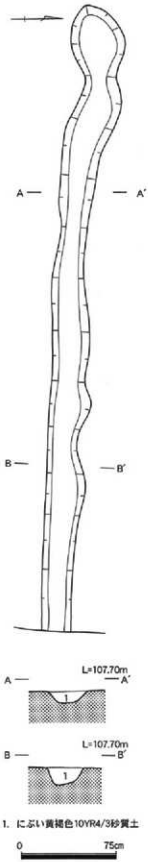
Ｃ区の北東端、L-10・11・12・K-10・11・J-10グリッドで検出した溝である。標高約108.4m～108.1mに位置し、長軸16.0m、短軸1.25m、深さ0.1mを測る。平面形は中央で大きく屈曲した帯状で東西に約６m、南北に約10m延びている。東西方向の高低差は約12cmで東に向かって低くなっている。また、南北方向の高低差は約37cmで南に向かって低くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～２cm大の礫を多量、５cm大の礫および炭化物を少量含む。溝４は、他の溝１から溝３より約13m北で、標高も約45cm高い所に位置している。この付近からも掘立柱建物跡などの遺構は検出されずその性格は不明である。覆土中より遺物の出土はない。



第58図　SD1001実測図



第59図　SD1002実測図



第60図　SD1003実測図

不明遺構24（SX1024）（第62図）

C区の南部の西端、E-2グリッドで検出した不明遺構である。標高約107.4mに位置し、長軸0.95m、短軸0.45m、深さ0.20mを測る。平面形は瓢箪のような形をした不整な楕円形で、2つの遺構が切り合っている可能性もある。底面は，ほぼ平坦で東の方がやや深くなっている。覆土は褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫、10cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構25（SX1025）（第63図）

C区の中央部、F-6グリッドで検出した不明遺構である。掘立柱建物跡3（SA1003）より2m南西に位置し、標高約107.5m、長軸1.85m、短軸0.66m、深さ0.9mを測る。平面形は不整な楕円形で底面はほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土で炭化物を含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構26（SX1026）（第64図）

C区の東南端近く、G-10グリッドで検出した不明遺構である。溝2（SD1002）の約0.2m南に隣接する。標高約107.7m～107.5mに位置し、南に向かって低くなり、傾斜に対して直角方向に検出された。長軸5.98m、短軸1.28m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。覆土は褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～2cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構27（SX1027）（第65図）

C区の東南端、G-11グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構26（SX1026）の約1.8m東に位置し、標高約107.6m、長軸1.36m、短軸1.03m、深さ0.23mを測る。平面形は中央部が窪んだ不整な楕円形で底面はやや丸くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を含み、5cm～10cm大の礫を少量、炭化物を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構28（SX1028）（第66図）

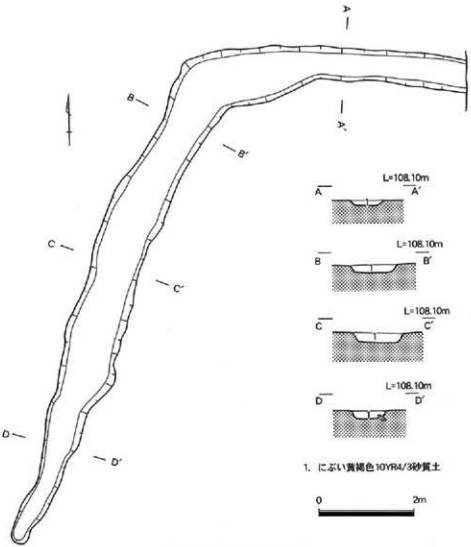
C区の東南、G-10・H-10グリッドより検出した不明遺構である。溝2（SD1002）の0.4m北に位置し、標高約107.8m、長軸1.20m、短軸0.92m、深さ0.08mを測る。平面形は楕円形で、底面はほぼ平坦であり、南東に向かって低くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～5cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構29（SX1029）（第67図）

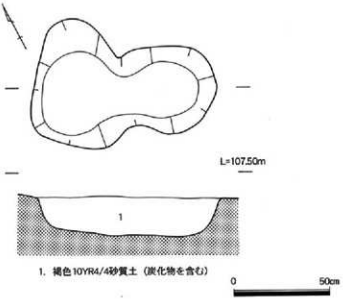
C区の北東端、K-11・K-12グリッドで検出した不明遺構である。南東部の端は調査区の溝で切られている。標高約108.3mに位置し、長軸1.66m、短軸0.90m、深さ0.28mを測る。平面形は不整な隅丸長方形で底面は東側が浅くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を含み、5cm～10cm大の礫を少量、炭化物を多量に含む。覆土中より近世の陶器が出土した。

出土遺物（第68図）

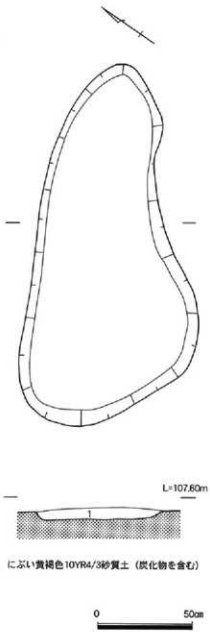
23・24は、緑釉の皿である。見込に型押成形による雲龍文の陽刻がある。高台には千鳥の陰刻がある。



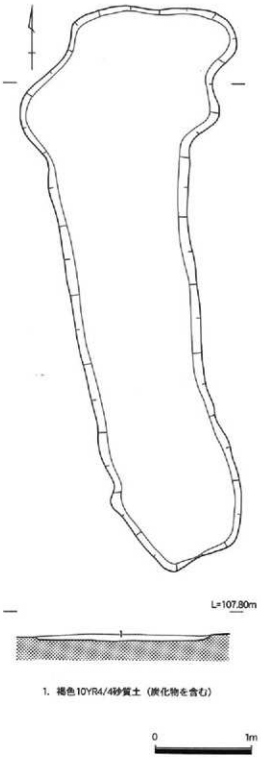
第61図　SD1004実測図



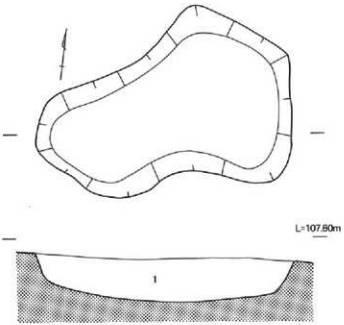
第62図　SX1024実測図



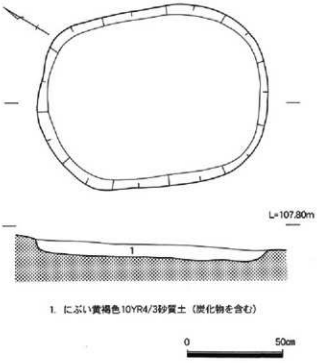
第63図　SX1025実測図



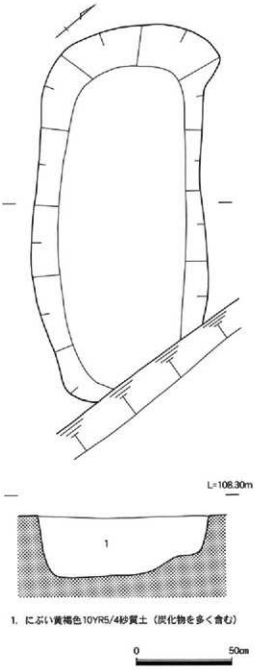
第64図　SX1026実測図



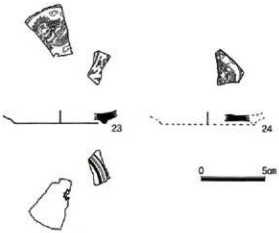
第65図　SX1027実測図



第66図　SX1028実測図



第67図　SX1029実測図



第68図　SX1029出土遺物実測図

胎土は灰白色で緻密であるが、陶器質である。緑釉の全釉である。19世紀中葉から19世紀末にかけてのものと思われる。

遺物包含層の出土遺物

中世以前の遺物

石器（第69図）

25は、サヌカイト製の石鏃である。長さ2.6cm、幅2.2cm、厚さ0.35cm、重さ2.8gを測る。先端が欠損しているが、鏃身三角形の平基無茎式の石鏃である。表裏面とも細かな調整加工が施され、横断面形は凸レンズ状を呈する。

中世の遺物

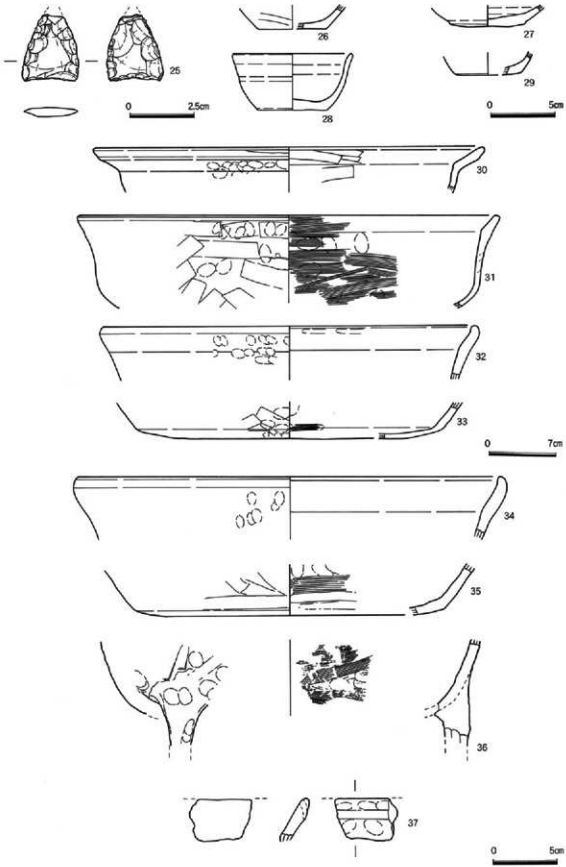
土師質土器・皿・杯（第69図）

26・27は、土師質土器の皿である。いずれも内外面にヨコナデを施す。27は、体部外面の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。28・29は、土師質土器の杯である。28は、口径に比して器高が高く、内外面をヨコナデし、底部を静止糸切りする。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部わずかに外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。底部の器壁は中心部に向かって厚くなる。29は、体部は直線的に外上方に立ち上がり、内外面に丁寧なヨコナデを施す。いずれも底部と体部との境は明瞭である。

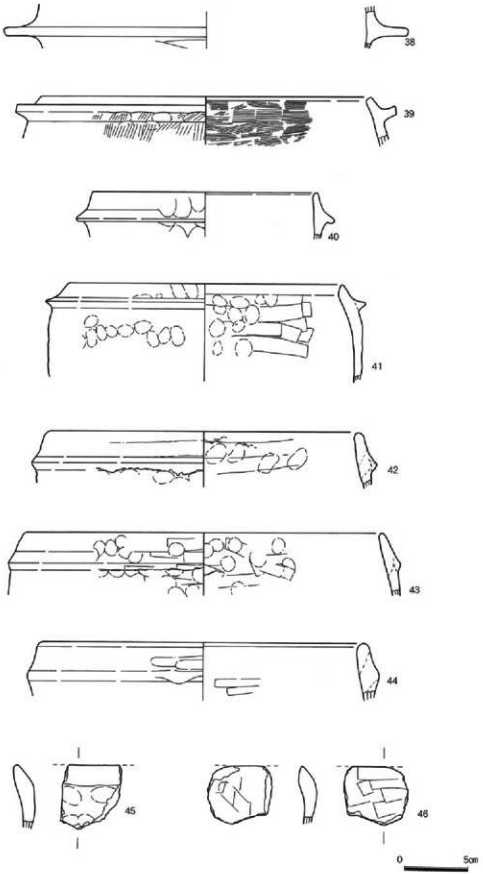
土師質土器・鍋（第69図）

30～37は、土師質土器の鍋である。外面に鍔を持たず、口縁部が外反するものを鍋とした。30は、口縁部が体部との境で大きく「く」の字状に外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面の口縁部と体部との境は明瞭である。内面は板状工具によるナデ、外面は板ナデとユビオサエを施す。31は、体部が下位で彎曲し直線的に立ち上がる。口縁部は体部との境で「く」の字状に外反し肥厚、口縁端部は方形にまとめる。内面は緻密なハケ（8本/cm）・ユビオサエ、外面は板ナデおよびユビオサエ調整を施す。また、内面の口縁部と体部との境は明瞭である。32は、口縁部が体部との境で「く」の字状にわずかに外反し肥厚する。口縁端部は上方へつまみ上げ丸くおさめる。内面はユビナデ、外面はユビオサエをとどめる。34は、口縁部が「く」の字状に外反し肥厚、口縁端部はやや内上方につまみ上げ、尖り気味におさめる。内面はナデ、外面はユビオサエのちナデ調整を施す。37は、口径は不明であるが、口縁部は同じく「く」の字状に外反し肥厚、口縁端部は丸くおさめる。30・31・37は、外反の度合いが強く、32・34は、外反の度合いが弱く、また口縁端部を上方へ摘み上げている。

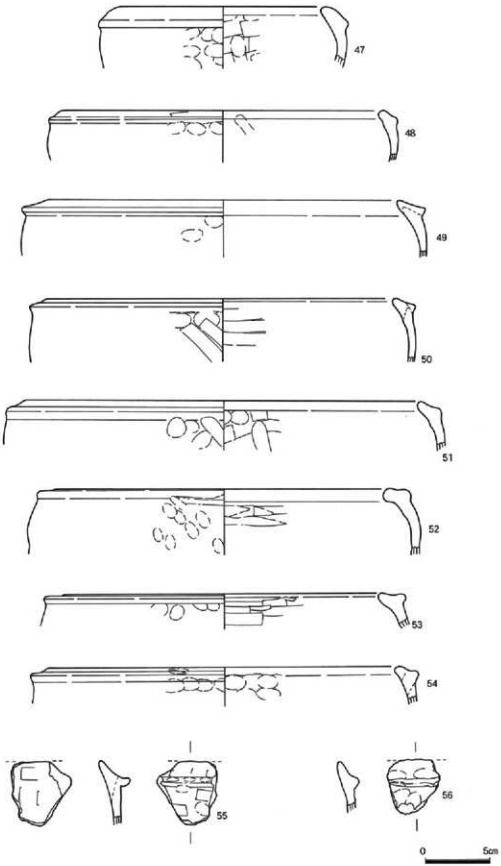
33・35は、鍋の底部である。いずれも底部はやや丸みを持つ。底部から外上方に直線的に立ち上がり、底部と体部の境は不明瞭である。また、内面にヨコハケを密に施す。36は、脚付きの鍋である。体部は底部より直線的に立ち上がり、底部に脚がつく。内面は緻密なハケ（10本/cm）後ユビオサエで外面はユビオサエ後ナデ調整である。



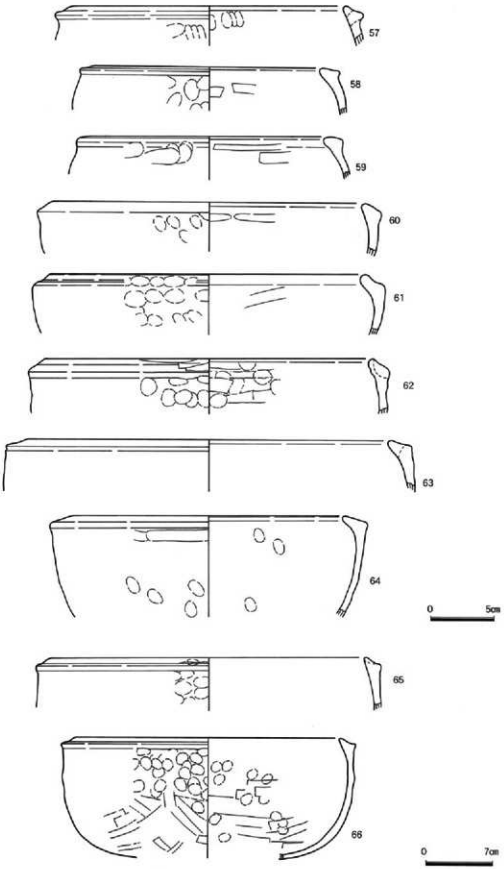
第69図　包含層出土遺物実測図(1)



第70図　包含層出土遺物実測図(2)



第71図　包含層出土遺物実測図(3)



第72図　包含層出土遺物実測図(4)

土師質土器・釜（第70～75図）

38～83は、土師質土器の釜である。口縁部外面に鍔を持ち、断面方形のしっかりとした鍔を持つものから、口縁部上端近くおよび下方に痕跡程度に形骸化した鍔をもつものまでを含めて釜とした。

38・39は、断面方形のしっかりした鍔がつく。38は、口径は不明であるが、鍔径が31.8cmを測り、内面はナデ、外面は板状工具によるナデ調整、口縁部は直立し断面方形の長い鍔が水平につく。39は、口径23.8cm、鍔径29.8cmを測る。口縁部は内傾し、口縁部外面に板状工具によるナデ、ユビオサエをとどめ、体部外面にハケ、内面は口縁部から体部にかけヨコハケを密に施す。断面方形の長い鍔が上向きにつく。

40・41・55は、やや長めの鍔がつく釜である。40は、口径17.6cm、内外面ともナデ調整、外面にはユビオサエをとどめる。口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味におさめる。長めの断面台形の鍔が下向きにつく。41は、口径21.3cm、鍔径25cmを測る。体部は直立し、口縁部は体部上方より内彎する。口縁端部は尖り気味におさめる。断面三角形の長めの鍔が水平につく。55は、口径は不明であるが、口縁部は体部上方より内傾し、口縁端部は丸くおさめる。断面台形状の長めの鍔が水平につく。

42～44・56は、口縁部やや内傾し、断面三角形の退化した鍔が形骸的につく。45・46は、口縁部が内傾し、鍔部分は退化して肥厚し認められない。

47～54・57～70は、口縁部が体部上位より内彎し、だんだんと退化した鍔が口縁部上端近くにつくものである。

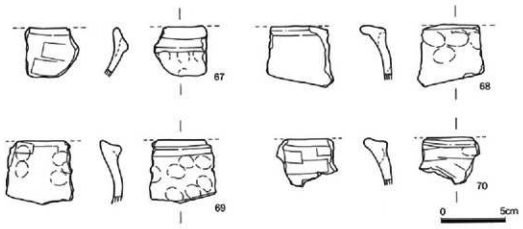
71～77は、土師質土器の内耳の釜である。口縁部は体部上位より内傾し、口縁部上端に退化した鍔をめぐらし、一部耳状に突出させ内側に円孔を施す。

78は、釜の底部である。内面はハケ、外面は格子目タタキをとどめる。79～83は、茶釜である。内彎した体部に短く直立した口縁部がつき、口縁端部は方形におさめる。79は、体部最張部に把手の痕跡があり、内側に円孔を施す。口縁部について81は内傾し、83はわずかに外傾している。

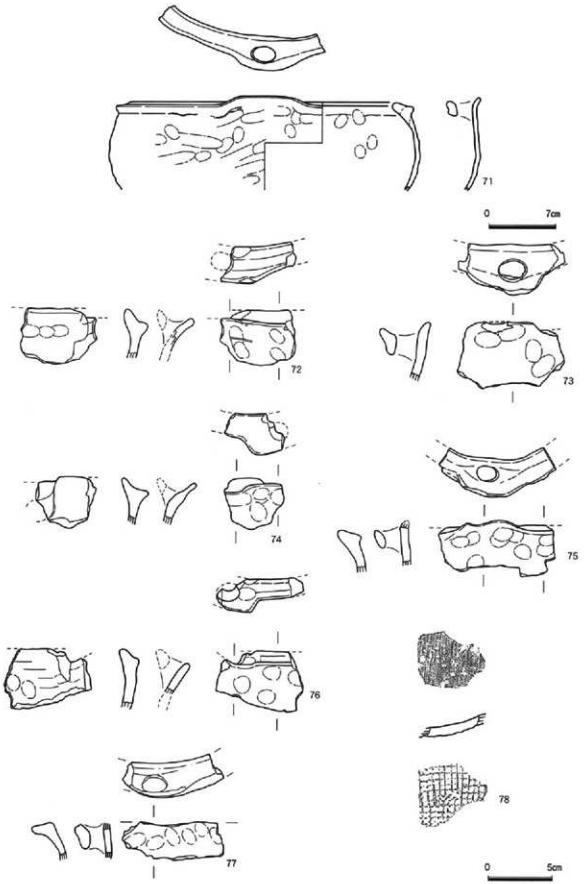
84～91は、釜あるいは鍋の脚である。身部はヘラケズリとナデにより仕上げられている。90・91は、基部が屈曲し周辺には貼り付けによるユビオサエが顕著である。

土師質土器・擂鉢・埋鉢・鉢（第76・77図）

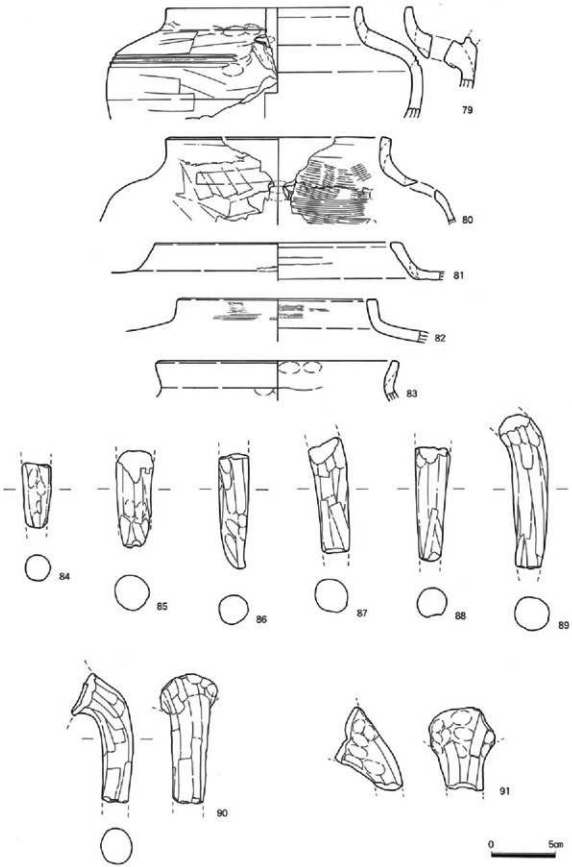
92～113は、土師質土器の擂鉢である。92・95・96・101は、口縁部が内傾する。92は、口縁端部が内



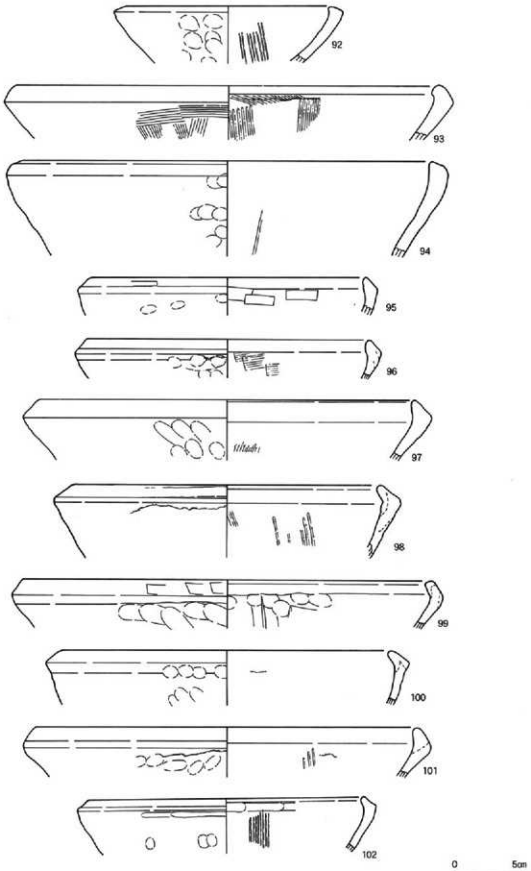
第73図　包含層出土遺物実測図(5)



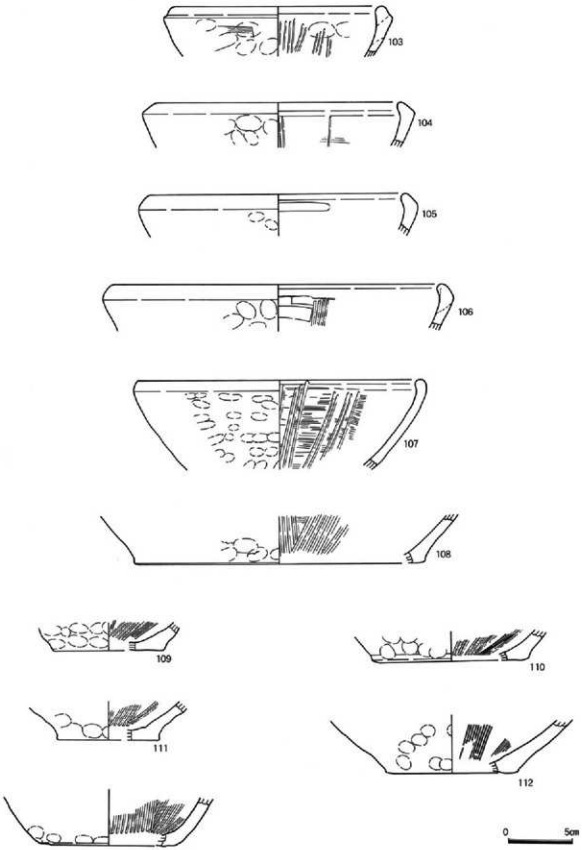
第74図　包含層出土遺物実測図(6)



第75図　包含層出土遺物実測図(7)



第76図　包含層出土遺物実測図(8)



第77図　包含層出土遺物実測図(9)

方向に拡張する。94は、口縁部が上方に立ち上がる。93・98・99・107は、口縁部は内傾し、口縁部内面に段を有する。97～100・102・104～106は、口縁部が体部との境で内方向に「く」の字状に屈曲する。いずれも摺り目上端は下位である。107は、内面にハケ後摺り目を施している。108～113は、擂鉢の底部である。108～112は、体部外面の強いヨコナデにより底部が外方向に突出する。

114は、土師質土器の捏鉢である。口径21.7cmを測る。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は、内上方につまみ出し口縁端部丸くおさめる。内面板ナデ、外面ユビオサエ後ナデ調整を施す。

115は、土師質土器の鉢である。口径26.6cmを測る。口縁部は内方向へ屈曲し肥厚する。口縁端部は丸くおさめる。内面は板状工具によるナデ、外面はユビオサエ後板状工具によるナデ調整である。

輸入陶磁器（第78図）

116は、天目茶碗である。口径13.6cmで内外面黒褐色の鉄釉を施釉し体部下位は無釉である。胎土は灰黄色である。輸入陶器の可能性がある。117～123は、青磁の碗である。117は、口径12.6cmを測り、外面蓮弁文である。119は、全体に釉が厚く、高台が高い。内底面は釉を剥ぎ、高台は内面まで釉がかかっている。焼成は悪い。120・122は、端反碗である。120の外面は蓮弁文であるが不明瞭である。122は、内外面に陰刻の文様がある。121は、釉が厚く、高台部畳付に釉を施す。123は、内面に沈線文が2条、外面に蓮弁文が認められる。

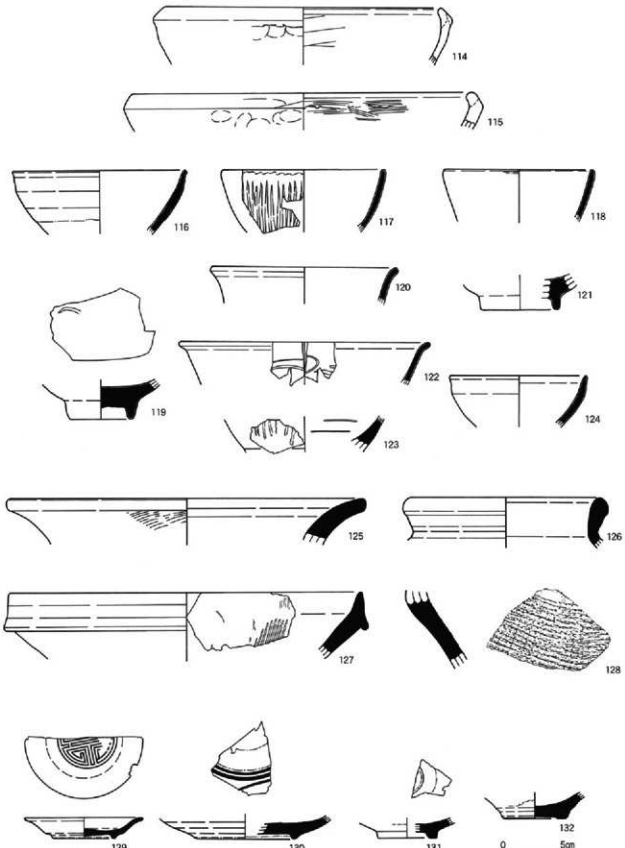
国産陶器（第78図）

124は、瀬戸美濃系の天目茶碗で、口径10.6cmを測る。内外面にぶい褐色の鉄釉を施す。胎土は黄味をおびた灰白色で焼成はあまい。125は、備前陶器の甕である。内外面ロクロナデ調整で、外面にタタキの痕が認められる。126は、備前焼の壺である。内外面とも褐灰色。胎土断面芯部は、にぶい赤褐色、表面部は褐灰色を呈する。16世紀後半のものである。127は、備前焼締陶器の擂鉢である。胎土は断面、表面とも灰色である。間壁忠彦編『備前編年図表』の室町Ⅳ期の擂鉢である。128は、須恵器の甕である。内面はナデ、外面は格子目タタキ調整である。

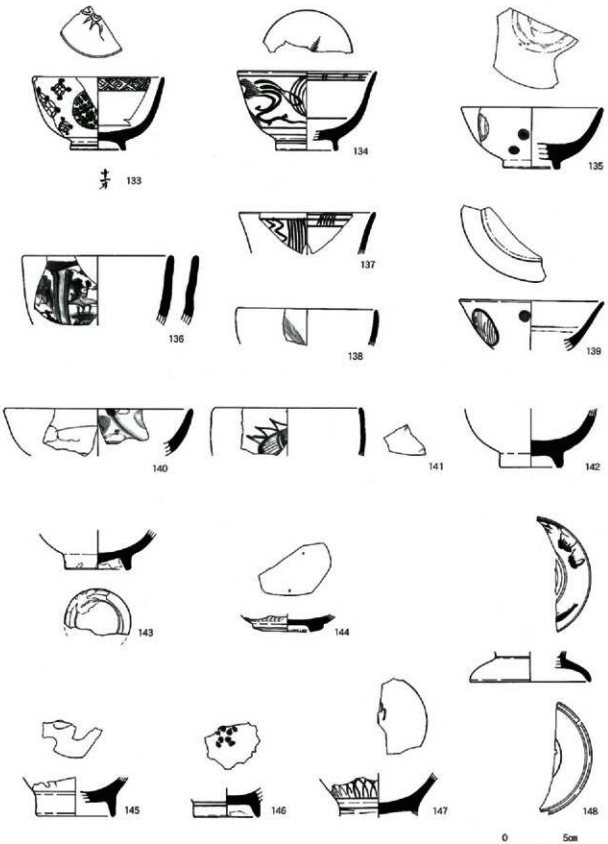
近世の遺物

国産の陶磁器（第78～81図）

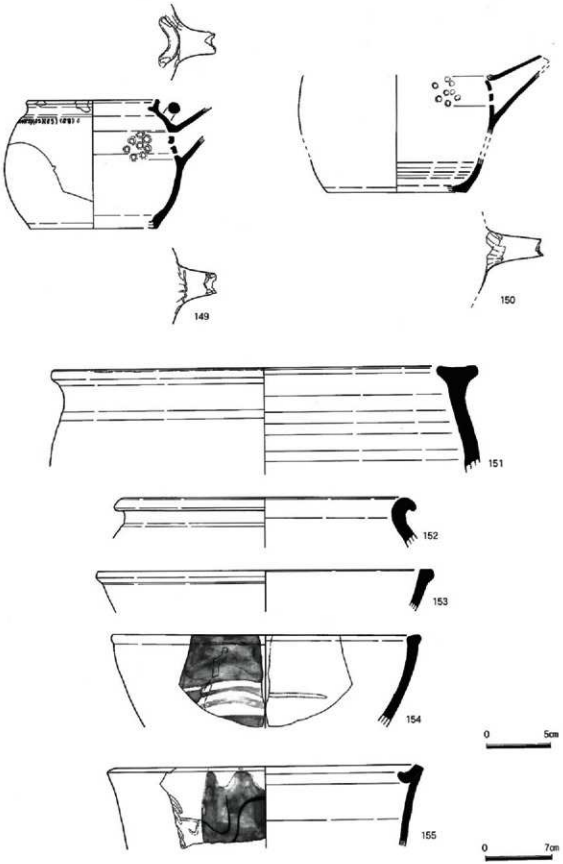
129は、瀬戸美濃系の白磁寿文皿である。130は、肥前系の染付皿である。見込蛇ノ目釉剥ぎで畳付は無釉である。131は、肥前系の陶器皿である。内面に銅緑釉をかける。見込蛇ノ目釉剥ぎである。132は、肥前系陶器の皿である。見込に砂目痕があり、高台以外の内外面に灰釉をかける。畳付に回転糸切りの痕がある。133は、肥前系の染付け碗である。見込に捻子文、外面に丸文を染め付ける。高台は撥高台で、褐色の焼継師の印「ナーオ」あるいは「十一オ」がある。134は、肥前系の染付端反碗である。外面は流水文、見込は山水文である。胎土は、灰色に近い灰白色である。135は、肥前系染付碗である。畳付に砂が付着し、見込は蛇ノ目釉剥ぎし、透明なアルミナ土を塗り、環状の窯道具痕がある。136は、肥前系の陶胎染付碗である。体部の一ヶ所を押圧している。外面は楼閣山水文である。137は、肥前系の染付碗である。外面はよろけ縞模様である。138は、京信楽系の灰釉陶器碗である。胎土灰白色の陶器質である。緑色と金色の笹文を上絵付けしている。139は、肥前系の染付鉢である。見込は蛇ノ目釉剥ぎし、淡黄色を呈するアルミナ土を塗っている。外面は丸文である。140は、肥前系の染付皿である。



第78図　包含層出土遺物実測図(1)



第79図　包含層出土遺物実測図(1)

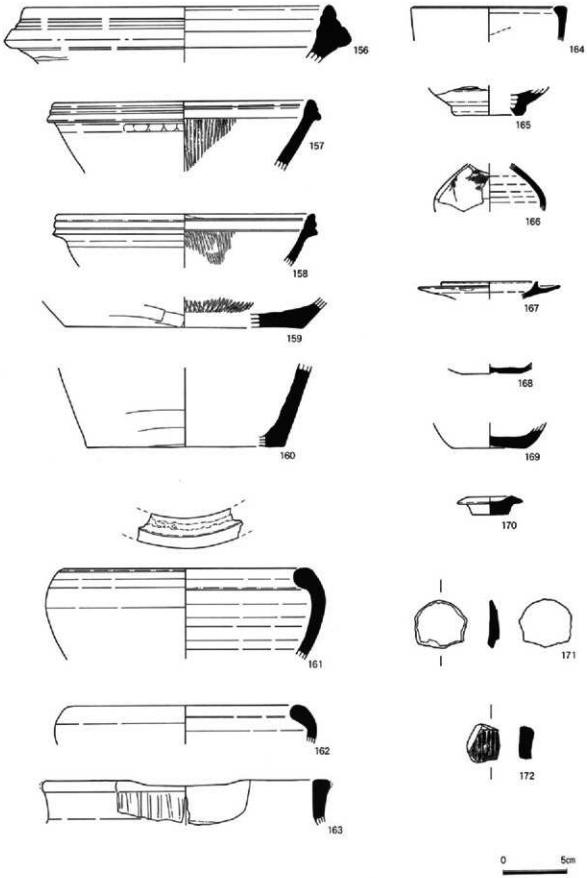


第80図　包含層出土遺物実測図(12)

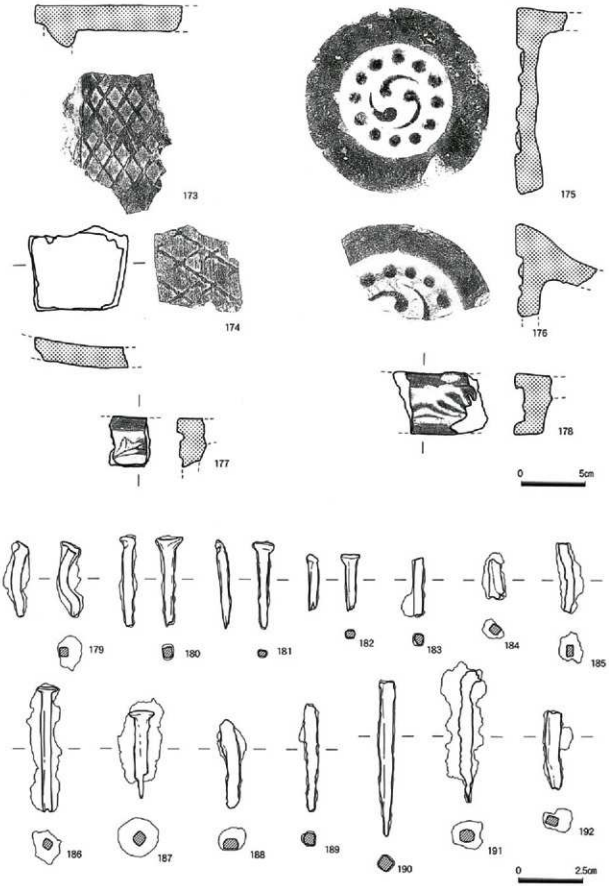
外面は唐草文である。141は、京信楽系の灰釉陶器碗である。赤で海老、緑でしめ縄を上絵付けしている。胎土は灰白色の陶器質である。142は、肥前系の呉器手碗である。畳付はわずかに砂が付着している。143は、肥前系の青磁碗である。高台は無釉で畳付に砂が付着している。また、見込に溶着痕が認められる。いわゆる初期伊万里である。144は、京信楽系の陶器の碗である。見込にハリビン痕があり、外面は飛び鉋装飾を施し鉄釉をかける。内面は灰釉をかける。145は、肥前系の広東碗である。146は、瀬戸美濃系の太白手広東碗である。見込は五弁花文で、胎土はにぶい黄橙である。147は、肥前系の染付広東碗である。外面は網目文、胎土は灰色に近い灰白色である。148は、肥前系の染付蓋である。撥高台の碗に伴う。149・150は、産地不明の焼締陶器の土瓶である。149は、口径10.2cmを測る。胎土は、断面・表面ともに明赤褐色で焼成はあまり硬くない。注ぎ口の貼り付け部を幅5mmぐらいのヘラで押さえており、肩部上位に陰刻文を押印する。穴は8個で不整である。煤は、内面が顕著であり、外面にも一部付着している。150は、底径10.8cmを測り、胎土は暗赤褐色で149より焼成が硬い。それ以外は共通しているが、内面に煤は付着していない。外面は一部煤が付着している。151は、大谷焼陶器の甕である。内外面に鉄釉を施し、口縁端部上面は無釉である。胎土はにぶい赤橙色で黒色・白色粒を含む。152は、瀬戸美濃系の陶器甕である。内外面鉄釉をかける。153は、肥前系陶器片口である。内外面に鉄釉を施釉する。口縁内端部に積み重ね痕がある。154は、肥前系の鉢である。内外面鉄釉と白泥の刷毛目装飾を施す。口縁上端部は無釉である。内面に環状の積み重ね痕がある。155は、瀬戸美濃系の陶器水甕である。外面に流水文を陰刻し、灰釉地に緑釉を流し掛けする。156は、備前の擂鉢である。断面・表面ともに胎土は灰赤色である。口縁部内側の段差は弱く、外面の顎は張り出している。内面の摺り目上端が下位である。顎部下に積み重ね痕がある。157は、堺明石系の擂鉢である。口縁部内面に段差がなく、外面の顎は張り出しているが積み重ね痕はない。内面の摺り目は緻密で、口縁帯と内面に塗り土を施す。158は、備前焼の擂鉢である。口縁部内面の段差は退化し、外面の顎が強く張り出し、積み重ね痕がある。摺り目は細密である。口縁帯に塗り土を施している。159は、堺明石系の擂鉢である。底部外面に積み重ね痕がある。胎土はにぶい赤橙色である。160は、備前の瓶類である。胎土は暗赤褐色で内面に米粒大の工具痕が無数にある。161は、大谷焼の陶器火鉢である。外面に褐色の鉄釉をかける。口縁上端部に連続する敲打痕が顕著である。162は、備前焼の鉢である。断面・表面ともに灰褐色に焼き締めている。外面に火襷が見られる。163は、瀬戸美濃系の火鉢である。いわゆる瓶掛けである。口縁部内外面に緑釉を施釉する。敲打痕が非常に顕著であり、口縁部が磨耗している。164は、肥前系青磁の香炉である。内面の露胎部が橙色を呈する。165は、肥前系の陶胎染付の香炉である。内面無釉で見込に砂目がある。166は、肥前系の染付油壺である。内面に黒色物質が付着している。167は、京信楽系の灰釉陶器の灯明受け皿である。仕切りの端部は無釉である。168は、備前の灯明皿である。胎土は赤褐色で焼成はあまい。内面は塗り土を施している。外面は回転糸切り後同心円削りを施す。169は、産地不明の焼締陶器の極小甕である。断面は灰白色で微細な黒粒を含む。表面は暗赤褐色を呈する。170は、産地不明の土瓶の蓋である。胎土は暗褐色で精良で硬い。底部は右回転糸切り離しである。外面に鉄釉をかける。内面は黒色を呈する。171・172は、陶器加工円盤である。171は、大谷焼の灯明具の上皿を転用している。172は、堺明石焼の擂鉢からの転用である。

瓦（第82図）

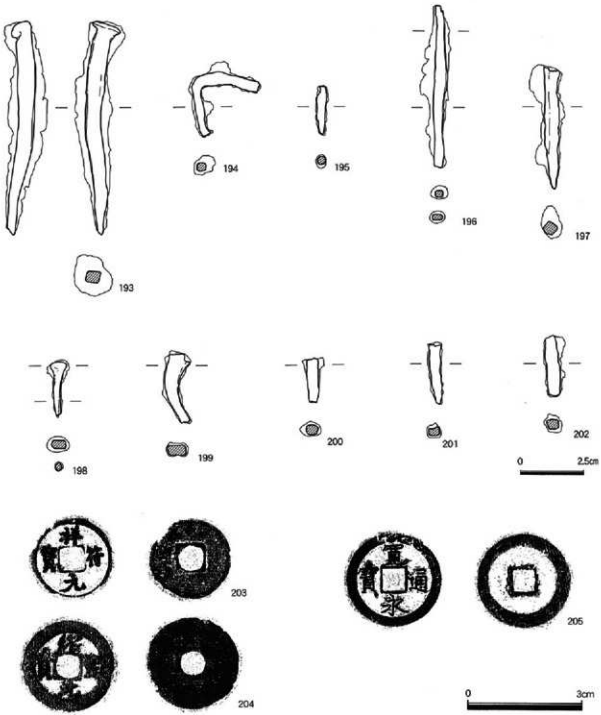
173・174は、軒平瓦である。ともに凸面に格子目タタキを施し、土師質である。175・176は、軒丸瓦



第81図　包含層出土遺物実測図(3)



第82図　包含層出土遺物実測図04



第83図　包含層出土遺物実測図19

である。175は、瓦当面径13.8cm、瓦当厚1.7cm、外縁幅2.8cm、外縁高0.6cmを測る。左巻き三ツ巴に12の連珠を配している。176は、瓦当面径16.0cm、瓦当厚1.3cm、外縁幅2.3cm、外縁高0.6cmを測る。右巻き三ツ巴に13前後の連珠を配している。瓦質で暗灰色を呈する。177・178は、均整唐草文軒平瓦である。177は、外縁幅1.1cm、外縁高0.5cmを測る。178は、瓦当厚2.0cm、外縁幅1.1cm、外縁高0.9cmを測る。175・177・178は、ともに瓦質で灰色を呈する。

金属製品（第82・83図）

179～202は、金属製品の釘である。

銭貨（第83図）

203は、北宋銭の祥符元寶で縁が加工されている。初鋳年は北宋1009年である。204は、北宋銭の紹聖元寶である。初鋳年は、北宋1094年である。205は、寛永通寶である。

(3) まとめ

花園遺跡は、阿讃山脈裾部に位置し、吉野川の支流である河内谷川によって形成された扇状地の西側に立地する。標高110m付近の北東から南東に傾斜して下る緩傾斜面上にある遺跡である。そのため、ここは大雨などにより土石流が発生しやすい場所で、近年では昭和50年代に一度発生して家が流されている。調査地の現状は、みかん畑・桑畑であり、３段の段々畑になっている。そのため段々畑に伴う削平や石垣の構築などによる盛り土、あるいは大雨などによる土砂崩れなどにより遺構の遺存状況は良好とはいえない。特にＣ区は、Ａ・Ｂ区で見られた上層が剥ぎ取られ、表土直下に地山がみられた。

花園遺跡は、分布調査で弥生土器片や中世以前の紡錘車、試掘調査でサヌカイト製の石鏃や中世の釜の脚の一部などの遺物が採取、検出されたが、また近くの花園中365番地より中世の花園窯跡の存在が確認されたことなどから、それに関係する遺構の存在や中世以前の遺構の存在などが予想された。しかし、今回の発掘調査では、掘立柱建物跡３棟、炭窯跡１基、炉跡２基、焼土墓１基、暗渠３条、自然流路１条、土坑１基、溝４条、柱穴280基、不明遺構29基などが検出されたが、そのほとんどが室町時代後半のものと考えられ、花園窯跡との関連の遺構も検出されなかった。また、検出された３棟の掘立柱建物跡も規模が小さく、Ｂ区に２棟、Ｃ区に１棟と散発的に存在しているため集落跡とは考えにくく、Ｂ区２棟の掘立柱建物跡の近くで検出された炭窯跡の遺構と関連があると考えた方が自然である。遺物は表土からは近世の陶磁器や銅銭などが、遺構面や遺構直上の遺物包含層からは、おもに土師質土器の鍋、釜、擂鉢、捏鉢など煮沸具や調理具などが多く出土した。また、須恵器の土器片や1009年初現の『祥符元寶』や1094年初現の『紹聖元寶』の北宋銭も出土した。したがって、遺跡の性格としては、近くに花園窯跡が存在したこと、炭窯跡の遺構が検出されたこと、出土遺物等を考え合わせて集落跡というよりは、就労の場として臨時的な生活が営まれていた室町時代後半の遺跡と考えられる。

第１表　花園遺跡検出遺構一覧表　掘立柱建物跡

遺構名	地　区	規模				棟方向	出土遺物	時　期	備　考
		間数	梁間(m)	桁行(m)	面積(㎡)				
SA1001	B区	1×2	2.12	3.68	7.80	N-69°-W			
SA1002	B区	1×1	2.55	2.66	6.78	N-60°-W			
SA1003	C区	1×2	1.90	4.25	8.08	N-60°-W			

第２表　花園遺跡掘立柱建物柱穴観察表

掘立柱建物	柱穴番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	土色・土質	備　考
SA1001（B区）	P1	0.24	0.22	0.15	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～3cm大の礫を含む。
	P2	0.22	0.20	0.19	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～1cm大の礫を含む。
	P3	0.27	0.20	0.16	1.にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を含む。
	P4	0.29	0.26	0.27	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
	P5	0.29	0.20	0.21	1.にぶい黄褐色砂質土	砂性強く、0.2cm～3cm大の礫を少量含む。
	P6	0.24	0.21	0.15	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
SA1002（B区）	P1	0.17	0.17	0.15	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
	P2	0.49	0.44	0.21	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
	P3	0.24	0.24	0.28	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。
	P4	0.20	0.20	0.13	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。
SA1003（C区）	P1	0.30	0.29	0.22	1.にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～3cm大の礫を少量含む。
	P2	0.23	0.23	0.22	1.にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～3cm大の礫を少量含む。
	P3	0.30	0.28	0.18	1.にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を多量、2cm～3cm大の礫および炭化物を少量含む。
	P4	0.36	0.28	0.14	1.にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を含む。
	P5	0.33	0.27	0.15	1.褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。
	P6	0.32	0.30	0.12	1.褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。

第３表　花園遺跡　Ａ区　主な検出遺構一覧表

遺構名	出土地点	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	主軸方向	年代	出土遺物
SJ1001	Q-8	－	280	160	57	北西-南東	近世	相器碗・陶器鉢・瓦・土師質土器の釜・皿の細片・石臼
SJ1002	Q-8	－	840	170	32	東西	近世	
SJ1003	P-11	－	550	170	50	南東-南西	近世	土師質土器の釜, 鍋, 器種不明の土器片
SR1001	R-9	－	1050	160	22	北西-南東		
ST1001	P-10	不整半円形	100	80	21	N-58°-W	室町	土師質土器の小皿
SX1001	S-12	不整楕円形	84	52	21	N-8°-W	室町	土師質土器片
SX1002	S-11	隅丸長方形	103	70	20	N-65°-W	室町	土師質土器皿の細片
SX1003	S-11	不整隅丸長方形	114	72	19	N-25°-E		
SX1004	R-11	不整楕円形	132	60	25	N-7°-W	室町	土師質土器皿の細片
SX1006	R-11	不整楕円形	88	52	16	N-42°-E		
SX1008	S-11, R-11	不整楕円形	90	22	15	N-83°-W		
SX1007	S-10, S-11	不整形	95	74	16	N-52°-E		
SX1013	P-10	不整楕円形	105	60	23	N-72°-E	室町	土師質土器の器種不明の細片
SX1009	R-10, R-11 Q-10, Q-11	不整円形	455	440	18	N-29°-E	室町	土師質土器の擂鉢・器種不明の細片
SX1010	S-9, R-9	円形	84	78	13	N-85°-W		
SX1011	R-9, Q-9 R-10	不整楕円形	140	85	13	N-54°-E		

第4表　花園遺跡　B区　主な検出遺構一覧表

遺構名	出土地点	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	主軸方向	年代	出土遺物
SH1001	M. N-8	不整方形	86	77	29	N-83°-W	室町	土師質土器の鍋・釜・皿の細片
SH1002	M-8	不整形	92	36	9	N-13°-E	室町	土師質土器の擂鉢・器種不明の土器片
SO1001	K. L-7	不整隅丸長方形	590	195	40	N-5°-E	室町	木炭、土師質土器の皿・鍋・釜
SK1001	N-10	不整楕円形	95	85	34	N-67°-E	室町	土師質土器の鍋・擂鉢・壺の細片
SX1014	O-7	不整隅丸三角形	100	70	10	N-42°-E		
SX1015	N-7	不整楕円形	88	70	17	N-74°-W	室町	土師質土器の皿・器種不明の細片
SX1016	N-8	隅丸三日月状	－	幅75	20	－		
SX1017	J-4	不整楕円形	85	74	20	N-48°-W		
SX1018	J-5	不整楕円長方形	87	58	14	N-70°-E		
SX1019	J-7	不整楕円形	120	90	15	N-78°-W		
SX1020	J-8	不整円形	95	85	19	N-7°-W		
SX1021	J-9	不整隅丸長方形	86	66	16	N-12°-E		
SX1022	K-8	不整形	124	48	15	N-57°-W		
SX1023	M-11	不整円形	92	85	10	N-64°-W		

第5表　花園遺跡　C区　主な検出遺構一覧表

遺構名	出土地点	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	主軸方向	年代	出土遺物
SD1001	G-9	－	280	30	10	東西		
SD1002	G-10	－	290	26	8	東西		
SD1003	G-10, 11	－	485	35	7	東西		
SD1004	K-10, 11 J-10	－	1600	125	10	－		
SX1024	E-2	不整楕円形	95	45	20	N-65°-W		
SX1025	F-6	不整楕円形	185	66	9	N-64°-E		
SX1026	G-10	不整隅丸長方形	598	128	17	N-11°-W		
SX1027	G-11	不整楕円形	136	103	23	N-60°-E		
SX1028	H-10	楕円形	120	92	8	N-39°-W		
SX1029	K-11	不整隅丸長方形	166	90	28	N-48°-W	近世	近世の陶器

第6表　花園遺跡出土遺物観察表（土器）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	SJ1001	磁器 碗	底径4.0 高台高0.8		畳付のみ無釉で砂付着。見込みに「寿」の字。外面によろけ縞の文様を染め付ける。	緻密	灰白色	肥前系
2	SJ1001	磁器 碗	底径4.4		見込釉剥ぎ。外面に丸文が描かれる。	緻密	灰白色	肥前系
3	SJ1001	陶器 片口(鉢)	口径22.0		内外面鉄釉を施釉。		にぶい赤褐色	大谷焼 4と同一個体
4	SJ1001	陶器 片口(鉢)	底径8.6 高台高1.1		高台および底面は無釉。内外面鉄釉を施釉。		にぶい赤褐色	大谷焼 3と同一個体
5	SJ1001	土師質土器 碗	底径4.6	内面ナデ。外面ナデ。底部静止糸切り。	体部は内湾しながら外上方に立ち上がり底部と体部の境は外方向に突出する。	焼成は良好。精良。	橙色	
6	SJ1001	土師質土器 釜	口径26.0 鍔径30.0	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。接合痕。	体部直立。口縁部やや内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に断面楕円形の長めの鍔が水平につく。	焼成は良好。1mm～4mmの石英を含む。	にぶい黄橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
7	SJ1001	土師質土器 釜	口径23.4	内面ナデ、ユビオサエ、接合痕。外面ナデ、板ナデ、ユビオサエ。	体部直立。口縁部は体部との境で内方向へ屈曲し肥厚、口縁端部丸くおさめる。造化した脚が口縁部と体部との境に突出したようにつく。	焼成は良好。1mm～3mmの砂粒を少し含む。	内面　にぶい黄橙色 外面　浅黄橙色	
8	SJ1001	土師質土器 茶釜	口径17.4	内面ユビオサエ後ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。	焼成は良好。4mm大の砂粒を含む。	内面　橙色 外面　明黄褐色	
11	SJ1003	土師質土器 鍋	—	内面ナデ、板状工具によるナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	口縁部は「く」の字状に大きく外上方に屈曲し、口縁端部は尖りぎみにおさめる。	焼成は良好。3mm大の砂粒を含む。	橙色	
12	SJ1003	土師質土器 釜	口径33.2 鍔径37.4	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	体部上位より口縁部にかけて内傾し、口縁端部丸くおさめる。断面楕円形の長めの鍔が口縁部下方に水平につく。	焼成は良好。1mm～3.8mmの砂粒をやや多く含む。	内面　にぶい橙色 外面　にぶい黄橙色	内面に黒斑。
13	SP1019	土師質土器 皿	底径5.3	内外面ヨコナデ。	体部は底部から外上方に直線的に立ち上がる。体部外面の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。	焼成は良好。精良。	浅黄橙色	
14	ST1001	土師質土器 皿	口径5.7 器高2.3 底径4.7	内外面ナデ。底部静止糸切り。	体部は、底部より外上方に直線的に立ち上がる。口縁端部は尖りぎみにおさめる。	焼成は良好。精良。	橙色	
15	ST1001	土師質土器 皿	口径11.1 器高2.4 底径4.8	内外面ヨコナデ。底部静止糸切り。	体部は、底部より直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。	焼成は良好。精良。	浅黄橙色	
16	SH1001	土師質土器 擂鉢	口径30.8	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は肥厚し、内方へ屈曲。端部は丸くおさめる。体部内面は（3条/cm）の櫛描条線。	焼成は良好。4mm大の砂粒を多く含む。	内面　灰白色 外面　浅黄橙色	
17	SO1001	土師質土器 釜	—	内面板ナデ、接合痕。外面ナデ、ユビオサエ。	口縁部直立し、口縁端部丸くおさめる。鍔は造化して突帯状となる。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少し含む。	内面　橙色 外面　にぶい赤褐色	内外面に黒斑。
18	SP1140	土師質土器 釜	—	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ、ナデ。	口縁部は内傾し、口縁端部やや尖りぎみにおさめる。断面三角形の短い鍔が体部と口縁部との境に突帯状につく。	焼成は良好。2mm～3.5mm大の砂粒を少し含む。	浅黄橙色	
19	SP1161	土師質土器 茶釜	口径13.9 器高16.4 鍔径28.0	内面ナデ、ユビオサエ。外面ナデ、板状工具によるナデ。	球形の体部にやや外傾ぎみの直立する短いロ縁がつく。口縁端部は方形におさめる。体部中央、口縁部と平行に長い鍔がつく。鍔端部は方形に仕上げる。体部最張部に板状の肥手を貼りけけ、肥手の基部内側に円孔を穿す。	焼成は良好。3.5mm大の砂粒を含む。	浅黄橙色	
20	SP1164	陶器 擂鉢	最大径33.6	内面板ナデ。外面ナデ、板ナデ、接合痕、ユビオサエ。	口縁部は肥厚。口縁端部は欠損している。体部内面は（3条/0.9cm）の櫛描条線。		内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	備前系
21	SP1192	土師質土器 擂鉢	底径11.0	内面横方向ハケ（7本/cm）。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部内面に（4条/1.3cm）の櫛描条線。底部外方向に突出。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	橙色	
22	SX1015	土師質土器 皿	底径10.0	内外面ナデ。	体部は、底部との境から外上方に直線的に立ち上がる。体部と底部との境は不明瞭。	焼成は良好。精良。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
23	SX1029	陶器 皿	底径7.1 高台高0.3		見込に型押成形による雲龍文の隔剥。高台内に千鳥の捻刻。		内外面　緑釉 素地　灰白色	
24	SX1029	陶器 皿	—		見込に型押成形による雲龍文の隔剥。		内外面　緑釉 素地　灰白色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
26	I-7 包含層	土師質土器 皿	底径5.3	内面ナデ。外面板ナデ。	体部は、底部との境から外上方に直線的に立ち上がる。体部と底部の境明瞭。底部の器壁平坦。	焼成は良好。精良。	橙色	
27	M-9 包含層	土師質土器 皿	底径5.8	内外面ナデ。	体部は底部から外上方に大きく開く。体部外面の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。	焼成は良好。精良。	橙色	
28	N-9 包含層	土師質土器 杯	口径9.2 器高4.5 底径5.4	内外面ナデ。底部静止糸切り。	体部内彎しながら立ち上がり、口縁部やや外反する。口縁端部尖り気味におさめる。底部の器壁は中心部に向かって厚くなる。底部と体部の境は明瞭。	焼成は良好。精良。	橙色	
29	K-5 包含層	土師質土器 杯	底径5.2	内外面ナデ。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がる。底部と体部との境は明瞭。	焼成は良好。精良。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
30	S-10 包含層	土師質土器 鍋	口径40.6	内面板状工具によるナデ。外面ナデ、板ナデ、ユビオサエ。	口縁部は体部との境で「く」の字状に大きく外反し、内面の口縁部と体部の境は明瞭。口縁端部丸くおさめる。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	にぶい黄橙色	
31	G-4 包含層	土師質土器 鍋	口径43.2	内面ハケ(8本/cm)、ユビオサエ、接合痕。外面ナデ、板ナデ、ユビオサエ、接合痕。	体部は、下位で緩曲し直線的に立ち上がる。口縁部は体部との境で「く」の字状に外反し、口縁端部方形にまとめる。	焼成は良好。1mm大の砂粒を多量に含む。	内面　にぶい橙色 外面　黒褐色	
32	I-8 包含層	土師質土器 鍋	口径39.0	内面ユビナデ。外面ユビオサエ。	口縁部は体部との境で「く」の字状に外反し肥厚。口縁端部は上方へつまみあげ丸くおさめる。	焼成は良好。1mm～5mmの砂粒を多く含む。	橙色	
33	K,J-4,5 包含層	土師質土器 鍋	底径32.2	内面ハケ(13本/2cm)、ユビオサエ。外面ユビオサエ後板ナデ。	体部はやや丸みをもつ底部から外上方に直線的に立ち上がる。底部と体部との境は不明瞭。	焼成は良好。精良。	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄橙色	
34	L-9 包含層	土師質土器 鍋	口径33.2	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は「く」の字状に外反し肥厚。口縁端部はやや内上方につまみ上げ尖り気味におさめる。	焼成は良好。1mm～3mmの砂粒をやや多く含む。	内面　にぶい赤褐色 外面　にぶい褐色	外面に黒斑。
35	P-11,12 包含層	土師質土器 鍋	底径19.2	内面ユビオサエ、ユビナデ、ハケ(11本/1.6cm)、外面板ナデ。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がる。	焼成は良好。精良。	浅黄橙色	
36	P-11,12 包含層	土師質土器 鍋	—	内面ハケ(10本/cm)後ユビオサエ、外面ユビオサエ後ヘラケズリ。	体部は底部より外上方に直線的に立ち上がり、底部に三脚がつく。	焼成は良好。精良。	橙色	
37	M-10 包含層	土師質土器 鍋	—	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は、「く」の字状に外反し肥厚、口縁端部丸くおさめる。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を含む。	にぶい橙色	
38	G-10 包含層	土師質土器 釜	鍔径31.8	内面ナデ。外面板状工具によるナデ。	体部・口縁部直立し、断面方形の長い鍔が水平につく。	焼成は良好。5mm大の砂粒を含む。	にぶい橙色	
39	P-10 包含層	土師質土器 釜	口径23.8 鍔径29.8	内面ハケ(9本/cm)。外面板状工具によるナデ。ユビオサエ後ハケ(4本/cm)。	口縁部内傾し、口縁端部方形におさめる。断面方形の鍔が上向きにつく。	焼成は良好。精良。	内面　赤褐色 外面　にぶい赤褐色	
40	N-6 包含層	土師質土器 釜	口径17.6 最大径17.0	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部直立し、口縁端部やや尖り気味におさめる。断面台形の長めの鍔が口縁部下方に下に向いてつく。	焼成は良好。精良。	内面　黄橙色 外面　浅黄橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
41	R-8 包含層 石垣下	土師質土器 鍋	口径21.3 胴径25.0	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部直立。口縁部は体部上方より内彎し、口縁端部は尖りぎみにおさめる。口縁部下方に断面三角形の長めの脚が水平につく。	焼成は良好。2mm～3mm大の砂粒を多く含む。	内面　明黄褐色 外面　浅黄橙色	
42	S-10 包含層	土師質土器 鍋	口径24.0 胴径27.0	内面ユビオサエ後板ナデ、接合痕。外面板ナデ、ユビオサエ後ナデ、接合痕。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。口縁部下方に低く退化した断面三角形の脚が突帯状につく。	焼成は良好。2mm～4mm大の砂粒を多く含む。	内面　にぶい橙色 外面　明黄褐色	
43	S-10 包含層	土師質土器 鍋	口径27.9	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	口縁部は内傾し、口縁端部は尖り気味におさめる。脚は、口縁部下方に低く退化し突帯状につく。	焼成は良好。2mm～3mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　橙色 外面　明橙色	
44	I-6 包含層	土師質土器 鍋	口径25.4	内外面板ナデ。	口縁部内傾し肥厚、口縁端部丸くおさめる。脚は低く退化し突帯状となる。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒を多く含む。	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	
45	J-4 包含層	土師質土器 鍋	—	内面ナデ、外面板ナデ、ユビオサエ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。脚部分は退化して肥厚し認められない。	焼成は良好。2mm～3mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい黄橙色	
46	J-4 包含層 (西壁)	土師質土器 釜	—	内面ユビナデ後板状工具によるナデ。外面ヘラケズリ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。脚部分は退化して肥厚し認められない。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
47	J-4 包含層	土師質土器 釜	口径16.4	内面ナデ、板ナデ、ユビオサエ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	口縁部は肥厚し、体部上方より内傾する。口縁端部丸くおさめ、断面三角形の低く退化した脚が口縁部下方につく。	焼成は良好。5mm大の砂粒を含む。	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄褐色	
48	M-10 包含層	土師質土器 釜	口径25.0 胴径27.4	内面ナデ。外面板状工具によるナデ、ユビオサエ後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。断面三角形の低く退化した脚が上向きにつく。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	灰白色	
49	L-8 包含層	土師質土器 釜	口径27.6	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後板ナデ。	体部内彎し、口縁部内傾。口縁端部は尖りぎみにおさめる。低く退化した断面三角形の脚が上向きにつく。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を多く含む。	内面　黄橙色 外面　浅黄橙色	
50	M-10 機械掘削	土師質土器 釜	口径27.4	内面ナデ、板ナデ。外面ナデ、板ナデ、ユビオサエ、接合痕。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。断面三角形の低く退化した脚が上向きにつく。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を多く含む。	にぶい橙色	外面に煤付着。
51	N-8 包含層	土師質土器 釜	口径31.0 最大径34.0	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。低く退化した三角形の脚が上向きにつく。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　にぶい黄橙色 外面　黄灰色	
52	L-7 包含層	土師質土器 鍋	口径26.0	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	体部直立。口縁部は体部上方より内傾し、口縁端部は丸くおさめる。断面三角形の低く退化した脚が上向きにつく。内面は口縁部と体部との境に段を有する。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	淺黄橙色	把手？注ぎ口？
53	O-10 包含層	土師質土器 鍋	口径24.8	内面板ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。低く退化した断面三角形の脚がつく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	淺黄橙色	
54	I-7 包含層	土師質土器 鍋	口径27.6	内面ナデ、ユビオサエ後ナデ。外面ユビオサエ後ナデ、接合痕。	口縁部内傾し口縁端部丸くおさめる。断面三角形の低く退化した脚がつく。	焼成は良好。1mm～2.5mm大の砂粒をやや多く含む。	淺黄橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
55	F-9 包含層	土師質土器 釜	—	内面板状工具によるナデ。外面板状工具によるナデ、ユビオサエ後板ナデ。	口縁部内傾し口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に短い断面台形状の長めの鍔が水平につく。	焼成は良好。精良。	明赤褐色	
56	G-8 包含層	土師質土器 釜	—	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に断面三角形の過化した鍔が水平につく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
57	I-7 包含層	土師質土器 釜	口径21.6 鍔径24.3	内外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部内傾し口縁端部尖りぎみにおさめ、断面三角形の短い鍔が水平につく。	焼成は良好。1mm～6mm大の砂粒を少し含む。	浅黄橙色	
58	M-6 包含層	土師質土器 釜	口径18.2 最大径20.4	内面板状工具によるナデ。外面ユビナデ。	口縁部内傾し口縁端部は丸くおさめる。断面三角形の低く退化した鍔が水平につく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を多く含む。	浅黄橙色	
59	M-6 包含層	土師質土器 釜	口径18.0 最大径20.8	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部内傾し肥厚。口縁端部丸くおさめる。断面三角形の過化した鍔が突帯状につく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	
60	L-5 包含層	土師質土器 釜	口径24.7	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。断面三角形の低く退化した鍔が上向きにつく。	焼成は良好。1mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	把手？注ぎ口？耳が付いていた可能性あり。
61	J-4 包含層	土師質土器 釜	口径24.6	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ、ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。鍔は短く退化して突帯状となる。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を多く含む。	にぶい黄橙色	外面に黒斑。
62	P-11, 12 包含層	土師質土器 釜	口径25.8	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部は丸くおさめる。鍔部分は退化し、低い突帯状となる。	焼成は良好。3mm大の砂粒を少量含む。	にぶい橙色	
63	M-10 包含層	土師質土器 釜	口径28.4	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。断面三角形の低く退化した鍔が上向きにつく。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい橙色	
64	M-10 包含層	土師質土器 釜	口径21.4	内面ナデ、ユビオサエ後ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	体部は内彎し、外上方に立ち上がる。口縁部は内傾しむ縁端部丸くおさめる。鍔は短く退化して突帯状となる。	焼成は良好。1mm大の砂粒を少量含む。	浅黄橙色	
65	I-8 包含層	土師質土器 釜	口径33.0	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ、接合痕。	体部上位より口縁部にかけて内傾し、口縁端部尖り気味におさめる。口縁部下方に断面三角形の鍔がつく。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　橙色 外面　にぶい黄橙色	
66	M-10 機械掘削	土師質土器 釜	口径28.0 最大径30.7	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	体部は内彎しながら立ち上がり、体部上位より口縁部にかけて内傾。口縁端部尖り気味におさめる。断面三角形の鍔が水平につく。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　橙色 外面　にぶい褐色	外面に煤付著。
67	D-1 包含層	土師質土器 釜	—	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に低く過化した断面三角形の鍔がつく。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	内面　明黄褐色 外面　にぶい黄橙色	
68	M-9 包含層	土師質土器 釜	—	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ、接合痕。	体部直立。口縁部は体部上方より内傾し、口縁端部丸くおさめる。鍔は短く退化して突帯状となる。内面は口縁部と体部との境に段がある。	焼成は良好。4mm大の砂粒を含む。	浅黄橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
69	L-8 包含層	土師質土器 釜	—	内面ナデ、ユビオサエ後ナデ。外面ユビオサエ後板ナデ。	体部内湾し、口縁部は内傾する。口縁端部は尖りぎみにおさめ、口縁直下に低く過化した断面三角形の鍔がつく。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	
70	G-6, 7 包含層	土師質土器 釜	—	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	体部は、内傾し、口縁端部は丸くおさめる。低く過化した断面三角形の鍔がつく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	内面　黄橙色 外面　灰黄褐色	
71	M-10 包含層	土師質土器 内耳型釜	口径27.6	内面ユビオサエ後ナデ、接合痕。外面ナデ、接合痕、ユビナデ、ユビオサエ。	口縁部は体部上位より内湾し、口縁端部丸くおさめる。口縁部上端近くに過化した断面三角形の短い鍔をめぐらし、一部耳状に突出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒を少量含む。	にぶい黄橙色	外面に黒斑。
72	M-6 包含層	土師質土器 内耳型釜	—	内外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は体部上位より内傾し、口縁端部丸くおさめる。口縁部と体部との境に断面三角形の短く過化した鍔をめぐらし、一部を耳状に突出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。4.5mm大の砂粒を含む。	浅黄橙色	外面に煤付着。
73	M-10 機械掘削	土師質土器 内耳型釜	—	内面ナデ。外面ユビオサエ、ナデ。	口縁部は体部上位より内湾し、口縁端部尖り気味におさめる。口縁部上端近くに鍔の一部を耳状に突出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。5mm大の砂粒を含む。	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄橙色	外面に黒斑。
74	I-7 包含層	土師質土器 内耳型釜	—	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は体部上位より内湾し、口縁端部尖り気味におさめる。口縁部上端近くの鍔の一部を耳上に突出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒を多く含む。	内面　橙色 外面　浅黄橙色	
75	M-10 機械掘削	土師質土器 内耳型釜	—	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は体部上位より内傾し、口縁端部丸くおさめる。口縁部と体部との境に断面三角形の短く過化した鍔をめぐらし、一部を耳状に突出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。1mm～3.5mm大の砂粒を多く含む。	内面　浅黄橙色 外面　橙色	外面に黒斑。
76	P-11, 12 包含層	土師質土器 内耳型釜	—	内外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	口縁部は体部上位よりわずかに内傾し、口縁端部丸くおさめる。口縁部と体部との境に断面三角形の過化した鍔をめぐらし、一部を耳状に突出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	内面　赤褐色 外面　にぶい赤褐色	内外面に黒斑。
77	K-5 包含層	土師質土器 内耳型釜	口径28.6	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部は体部との境で内側へ大きく屈曲し口縁端部丸くおさめる。口縁部と体部との境にほとんど過化した鍔をめぐらし、一部を耳状に突出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。1mm～4.5mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい黄橙色	外面に煤付着。
78	F-8 包含層	土師質土器 鍋	—	内面ハケ(4本/cm)。外面格子目タタキ。	丸底気味。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少し含む。	内面　にぶい橙色 外面　褐灰色	外面に黒斑。
79	H-7 包含層	土師質土器 茶釜	口径15.3	内面ナデ、接合痕。外面ナデ、ユビオサエ後板ナデ、接合痕。	体部上位で大きく内湾し、口縁部直立、口縁端部方形におさめる。体部最張部に板状の把手を貼り付け、把手の基部内側に円孔と3条の凹線を施す。	焼成は良好。1mm～1.5mm大の砂粒を少量含む。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
80	P-11, 12 包含層	土師質土器 茶釜	口径16.2	内面ナデ、ハケ(5本/cm)、ユビオサエ、接合痕。外面ナデ、板ナデ。	体部上位より大きく内湾し、口縁部直立やや外傾する。口縁端部は方形におさめる。把手の基部内側に円孔を施す。	焼成は良好。1mm～3.5mm大の砂粒を少量含む。	内面　浅黄橙色 外面　にぶい橙色	
81	A区東壁 トレンチ	土師質土器 茶釜	口径19.2	内外面板ナデ、接合痕。	口縁部は、体部との境で大きく屈曲し内傾する。口縁端部方形におさめる。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を少量含む。	浅黄橙色	

番号	遺構名出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
82	J-6 包含層	土師質土器 茶釜	口径15.4	内外面板状工具によるナデ。	体部上位で大きく内彎。口縁部やや内傾し、口縁端部方形におさめる。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を少量含む。	浅黄橙色	
83	I-6 包含層	土師質土器 茶釜	口径18.3	内外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部やや外傾しながら直立し、口縁端部方形におさめる。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	
84	G-5 包含層	土師質土器 釜の脚	—	板状工具によるナデ、ユビオサエ。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。1mm～3.5mm大の砂粒を少量含む。	橙色	
85	I-7 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビオサエ、ケズリ。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を少量含む。	にぶい黄橙色	
86	R-8 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビナデ。	身部円柱状、断面円形、先端部は彎曲する。	焼成は良好。1mm大の砂粒をやや多く含む。	明赤褐色	
87	P-11, 12 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビナデ、ケズリ。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。1mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい橙色	
88	F-7 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ケズリ、ユビオサエ。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。3mm大の砂粒を含む。	にぶい黄橙色	
89	P-11, 12 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビナデ、ケズリ。	基部屈曲。身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。1mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい橙色	
90	P-11 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ケズリ、ユビオサエ。	基部強く屈曲。身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。1mm～2.5mm大の砂粒を少量含む。	にぶい黄褐色	
91	J-7 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビオサエ、ヘラケズリ。	基部緩やかに屈曲、断面円形。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	橙色	
92	L-6 包含層	土師質土器 擂鉢	口径15.2	内面回転ナデ。外面ナデ、ユビオサエ。	体部は直線的に外方向に立ち上がり、口縁部内傾する。口縁端部は内方向につまみ出す。体部内面は(5条/cm)の櫛描条線。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　にぶい黄色 外面　浅黄色	
93	S-10 包含層	土師質土器 擂鉢	口径33.2	内外面ナデ、ハケ(6本/cm)。	体部は外上方に直線的に立ち上がり、口縁部は内方に屈曲し、肥厚。端部は丸くおさめる。口縁部内面は体部との境に段を有し、体部内面は(6条/1.7cm)の櫛描条線。	焼成は良好。4mm大の砂粒を少量含む。	淡赤橙色	
94	M-10 機械掘削	土師質土器 擂鉢	口径32.0	内面ナデ。外面ユビオサエ、ナデ。	体部は直線的に立ち上がる。口縁部は内傾し、肥厚。端部はやや丸みを帯びた方形におさめる。体部内面は摩滅が激しく不明瞭だが櫛描条線。	焼成は良好。1mm～3.6mm大の砂粒を多量に含む。	橙色	
95	J-5 包含層	土師質土器 擂鉢	口径21.6	内面板状工具によるナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内傾し肥厚。端部つまみ上げ丸くおさめる。	焼成は良好。3mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	
96	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径22.2	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内傾し肥厚、端部つまみ上げ丸くおさめる。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	にぶい橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形 態 の 特 徴	胎土・焼成	色調	備考
97	M-10 包含層	土師質土器 擂鉢	口径29.4	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内傾し肥厚、端部つまみ上げ丸くおさめる。体部内面は櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒を多量に含む。	内面　灰白色 外面　浅黄橙色	
98	P-11,12 包含層	土師質土器 擂鉢	口径23.6	内面ナデ。外面板状工具によるナデ、接合痕。	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は肥厚し内方向に屈曲。端部は、丸くおさめる。体部と口縁部は境明瞭。体部内面は、(3条/cm)の櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を含む。	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄橙色	
99	M-9 包含層	土師質土器 擂鉢	口径32.1	内面ユビオサエ後板ナデ。外面板ナデ、ユビナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内方に屈曲し、端部丸くおさめる。口縁部内面は体部との境で段を有する。体部内面は櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	にぶい橙色	
100	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径26.0	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内方に屈曲し、端部丸くおさめる。	焼成は良好。1mm～3.5mm大の砂粒を少量含む。	浅黄橙色	
101	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径29.8	内面ナデ。外面ナデ、接合痕。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内傾し、肥厚。端部つまみ上げ丸くおさめる。体部内面は(3条/cm)の櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	
102	O-12 包含層	土師質土器 擂鉢	口径21.6	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内方に屈曲し、端部は丸くおさめる。体部内面は(8条/1.5cm)の櫛擂条線。	焼成は良好。1mm大の砂粒を含む。	浅黄橙色	
103	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径16.6	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内傾し肥厚、端部丸くおさめる。体部内面は(6条/1.6cm)の櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　浅黄橙色 外面　にぶい橙色	
104	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径19.4	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内方に屈曲し肥厚、端部丸くおさめる。体部内面は、櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒を多く含む。	浅黄橙色	
105	G-5 包含層	土師質土器 擂鉢	口径20.1	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサエ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内方に屈曲し、端部丸くおさめる。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	浅黄橙色	
106	M-6 包含層	土師質土器 擂鉢	口径25.6	内面ナデ、板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部は内方に緩く屈曲し肥厚、端部丸くおさめる。体部と口縁部の境はやや不明瞭な段を有する。体部内面は、(3条/cm)の櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい橙色	
107	D-1 包含層	土師質土器 擂鉢	口径22.2	内面横方向ハケ(7本/cm)。外面ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部はやや内傾し、端部丸くおさめる。体部は(3条/cm)の櫛擂条線。	焼成は良好。1.5mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	
108	I-5 包含層	土師質土器 擂鉢	底径28.8	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ、接合痕。	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部内面に（5条/2cm）の櫛擂条線。底部外方向に突出。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒を多く含む。	内面　浅黄橙色 外面　橙色	
109	G-4 包含層	土師質土器 擂鉢	底径8.6	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がる。底部は外方向にやや突出。体部内面は、(5条/1.7cm)の櫛擂条線。	焼成は良好。1mm～4mm大の砂粒を多く含む。	内面　浅黄橙色 外面　灰白色	
110	O-8 包含層	土師質土器 擂鉢	底径11.1	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がる。体部内面に(4条/0.9cm)の櫛擂条線。底部外方向にやや突出。	焼成は良好。1mm大の砂粒を少量含む。	橙色	
111	M-7 包含層	土師質土器 擂鉢	底径7.8	内底面は使用による摩耗。外面ユビオサエ。	体部は外上方に立ち上がる。体部内面に(4条/1.4cm)の櫛擂条線。底部外方向にやや突出。	焼成は良好。5mm大の砂粒を含む。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
112	T-11 包含層	土師質土器 擂鉢	底径10.3	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部内面に(10条/2cm)の櫛描条線。底部外方向にやや突出。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	にぶい黄橙色	
113	C区西壁	土師質土器 擂鉢	底径11.0	内面ナデ。外面ユビオサエ、ナデ。	体部はやや丸みを帯びながら、外上方に立ち上がり体部内面は、(5条/1.5cm)の櫛描条線。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を多量に含む。	内面　にぶい褐色 外面　灰黄褐色	
114	B-1 包含層	土師質土器 擂鉢	口径21.7	内面ナデ、板ナデ。外面ナデ、ユビオサエ後ナデ、接合痕。	体部内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部内上方へつまみ出し丸くおさめる。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
115	J-8 包含層	土師質土器 鉢	口径26.6	内面板状工具によるナデ、接合痕。外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	口縁部は内方へ屈曲し肥厚、口縁端部丸くおさめる。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい橙色	
116	S-10 包含層	天目茶碗	口径13.6		内外面とも鉄釉を施釉。 外面の下位は無釉。		黒褐色の鉄釉 素地　灰黄白色	
117	K, J-4, 5 包含層	青磁 碗	口径12.6		外面蓮弁文。	緻密	灰白色	
118	I-7 包含層	青磁 碗	口径11.6		内外面とも施釉。	緻密	灰白色	
119	S-11 包含層	青磁 碗	底径5.3 高台高0.95		独が厚い。高台は高く、内底面は釉を剥ぎ高台は内面まで釉がかかっている。	緻密 焼成は悪い。	灰白色	
120	F-8 包含層	青磁 碗	口径14.4		内外面施釉。外面蓮弁文は不明瞭。	緻密	灰白色	
121	K, J-4, 5 包含層	青磁 碗	底径6.2 高台高0.85		釉が厚い。高台部の畳付に釉を施す。	緻密	灰白色	
122	K, J-4, 5 包含層	青磁 碗	口径19.6		内外面とも陰刻文。	緻密	灰白色	
123	F-4, 5 包含層	青磁 碗	—		内面に沈線文が2条。外面に蓮弁文。	緻密	灰白色	
124	K-9, 10 包含層	天目茶碗	口径10.6		内外面とも鉄釉を施釉。	焼成はあまい。	にぶい褐色の鉄釉 素地　灰白色	瀬戸美濃系
125	S-10 包含層	陶器 甕	口径27.4		内外面ともロクロナデで外面にタタキ痕。		灰褐色	備前系
126	C区西壁	陶器 壺	口径14.8		口縁端部肥厚。		褐灰色 素地　にぶい赤褐色	備前系
127	M-10 包含層	陶器 擂鉢	口径27.3		内外面とも無釉焼締。		灰色 素地　灰色	備前無釉焼締陶器
128	H-9 包含層	須恵器 甕	—	内面ナデ。外面格子目タタキ。		焼成は良好。精良	内面　褐灰色 外面　にぶい褐色	
129	R-9 包含層	白磁 小皿	口径9.0 器高1.65 底径4.9 高台高0.3		寄文皿。	緻密	灰白色	瀬戸美濃系
130	T-11, 12 包含層	磁器 皿	底径8.0 高台高0.4		見込蛇ノ目釉剥ぎ。畳付は無釉。	緻密	灰白色	肥前系
131	G-8 包含層	陶器 皿	底径4.6 高台高0.5		内面に銅緑釉をかける。見込蛇ノ目釉剥ぎ。	緻密	灰白色	肥前系
132	G-4 包含層	陶器 皿	底径5.0 高台高0.2		見込に砂目痕がある。高台以外の内外面に灰釉をかける。畳付に回転糸切りの跡。	緻密	灰白色	肥前系

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
133	T-11 包含層	磁器 碗	口径10.2 器高5.75 底径4.4 高台高0.5		見込は捻子文、外面は丸文。高台に褐色の焼締銅の印。畳高台。	緻密	灰白色	肥前系
134	R-12 包含層	磁器 碗	口径10.8 器高6.3 底径4.9 高台高0.9		染付端反碗。外面は流水文、見込は山水文。	緻密	灰白色	肥前系
135	T-12溝	磁器 碗	口径11.0 器高4.8 底径4.5 高台高0.8		見込は蛇ノ目釉剥ぎし、透明なアルミナ土を塗る。環状の窯道具痕。	緻密	灰白色	肥前系
136	T-11 包含層	陶胎染付 碗	口径11.6		体部の一ヶ所を押圧。外面樣闌山水文。		灰白色	肥前系
137	G-6 包含層	磁器 碗	口径10.7		端反碗。外面はよろけ縞模様。	緻密	灰白色	肥前系
138	C区西壁	陶器 碗	口径11.0		灰釉陶器碗。緑色と金色の笹文を上絵付け。	緻密	灰白色	京信楽系
139	T-11, 12 包含層	磁器 鉢	口径11.3		染付の鉢。見込は蛇ノ目釉剥ぎし、淡黄色を呈するアルミナ土を塗る。外面は丸文。	緻密	灰白色	肥前系
140	F-9 包含層	磁器 皿	口径13.6		染付の皿。外面は唐草文。	緻密	灰白色	肥前系
141	S-9 包含層	陶器 碗	口径11.5		灰釉陶器碗。赤で海老、緑でしめ縄を上絵付け。胎土は陶器質。	緻密	灰白色	京信楽系
142	S-10, T-11 包含層	陶器 碗	底径4.8 高台高0.8		呉器手碗。畳付に砂が僅かに付着。	緻密	浅黄橙色	肥前系
143	Q-9 包含層	青磁 碗	底径5.0 高台高1.0		高台無釉で、畳付に砂が付着。見込に溶着痕。	緻密	灰白色	肥前系
144	H-9 包含層	陶器 碗	底径5.5 高台高0.4		見込にハリピン痕。内面は灰釉。外面飛鉋装飾を施し、鉄釉をかける。	緻密	灰白色	京信楽系
145	F-10 包含層	磁器 碗	底径6.2 高台高1.0		広東碗。	緻密	灰白色	肥前系
146	F-9 包含層	陶器 碗	底径5.2 高台高0.95		太白手広東碗。見込は五弁花文。		にぶい黄橙色	瀬戸美濃系
147	G-10 包含層	磁器 碗	—		染付広東碗。外面は網目文。	緻密	灰白色	肥前系
148	T-11 包含層	磁器 蓋	底径9.6 高台高1.15		染付中碗の蓋。畳高台の碗に伴う。	緻密	灰白色	肥前系
149	P-11 包含層	陶器 土瓶	口径10.2		焼締陶器。肩部上位に陰刻文を押印。注ぎ口の貼り付け部は幅5mmぐらいのヘラで押さえる。穴は8個で不整。	焼成はあまい。緻密	明赤褐色	外面に煤付着。内面におこげ付着。
150	P-11 包含層	陶器 土瓶	底径10.8		焼締陶器。肩部上位に陰刻文を押印。注ぎ口の貼り付け部は幅5mmぐらいのヘラで押さえる。穴は8個で不整。	焼成は硬い。緻密	暗赤褐色	外面に煤付着。
151	R-11 包含層	陶器 壺	口径32.8		内外面に鉄釉を施釉し、口縁端部上面は無釉。		にぶい赤橙色	大谷焼
152	S-10 包含層	陶器 壺	口径21.2		内外面は鉄釉を施釉。		浅黄橙色	瀬戸美濃系
153	S-11 包含層	包含層 片口鉢	口径26.0		内外面に鉄釉を施釉。口縁内端部に積み重ね痕。		にぶい橙色	肥前系
154	S-12 包含層	鉢	口径24.0		内外面とも鉄釉と白泥のハケ目装飾。口縁上端部無釉。内面に環状の積み重ね痕。		明赤褐色	肥前系

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
155	S-9 包含層	水瓶？ 水鉢？	口径31.6		外面に流水文を陰刻。灰釉地に緑釉を流しかけする。		灰白色	瀬戸美濃系
156	Q.P-8.9 包含層	陶器 擂鉢	口径22.4		口縁部内側の段差は弱く、顎は張り出している。擂り目上端が下位である。頸部下に積み重ね痕。口縁部外面に2条の凹線。		灰赤色	備前系
157	T-12溝	陶器 擂鉢	口径20.1		口縁部内面に段差がない。顎は張り出し、擂り目は緻密である。口縁帯と内面に塗り土を施す。		明赤褐色	堺明石系
158	P-10 包含層	陶器 擂鉢	口径19.8		口縁部内面の段差は退化し、外面の顎が強く張り出す。頸に積み重ね痕。擂り目は緻密。口縁帯に塗り土を施す。		にぶい黄橙色	備前系
159	2次 5トレンチ 2層直上	陶器 擂鉢	底径18.6		内面に櫛擂条線。底部外面に積み重ね痕。		にぶい黄橙色	堺明石系
160	E-1 包含層	陶器 甕類	底径15.6		内面に米粒大の工具痕が無数。		暗赤褐色	備前系
161	R-9 機械掘削	陶器 火鉢	口径19.0		外面に褐色の鉄釉を施釉。	緻密	明赤褐色	大谷焼 口縁部に連続する敲打痕が顕著。
162	G-10 包含層	陶器 鉢	口径18.2		断面・表面とも褐色に焼き締めている。外面に火襷。		灰褐色	備前系
163	D-2.3 包含層	陶器 火鉢	—		口縁部内外面に緑釉を施釉。	緻密	灰白色	瀬戸美濃系 敲打痕が非常に顕著で、口縁部が磨耗している。
164	R-9 機械掘削	青磁 香炉	口径12.0		内面の露胎部が橙色を呈する。	緻密	灰白色	肥前系
165	D-3.4 包含層	陶器 香炉	口径5.8		陶胎染付。内面は無釉で見込に砂目。	緻密	にぶい褐色	肥前系
166	機械掘削	磁器 油壺			染付。内面は無釉。	緻密	灰白色	肥前系 内面に黒色物質が付着。
167	機械掘削	陶器 灯明皿	口径11.0		灰釉陶器。仕切りの端部は無釉。	緻密	灰白色	京信楽系
168	S-11 包含層	陶器 灯明皿	底径4.6		内面は塗り土を施す。外底面は回転糸切り後周心円削り。	緻密	赤褐色	備前系
169	E-8 包含層	陶器 徳小壺	底径5.7			緻密	灰白色	
170	F-4.5 包含層	陶器 土瓶の蓋	口径3.4 器高1.4 底径2.8		外面に鉄釉をかける。内面は黒色を呈する。外底面は右回転切り離し。	緻密	暗褐色	
171	Q.P-9 包含層	陶器 加工円盤	長さ3.8 厚さ0.8		灯明具の上皿からの転用。	緻密	にぶい橙色	大谷焼
172	E-8 包含層	陶器 加工円盤	長さ3.1 厚さ1.1		擂鉢からの転用。	石英、砂粒	内面　明赤褐色 外面　にぶい赤褐色	堺明石系

第７表　花園遺跡出土遺物観察表（石器）

番号	遺構名 出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	素材	石材	備考
9	SJ1001	石鏃	2.3	1.60	0.45	1.2	剥片	サヌカイト	平基無茎式、先端部一部欠損
10	SJ1001	石鏃	2.0	1.55	0.40	0.9	剥片	サヌカイト	平基無茎式
25	確認トレンチ１包	石鏃	2.6	2.20	0.35	2.8	剥片	サヌカイト	平基無茎式、先端部欠損

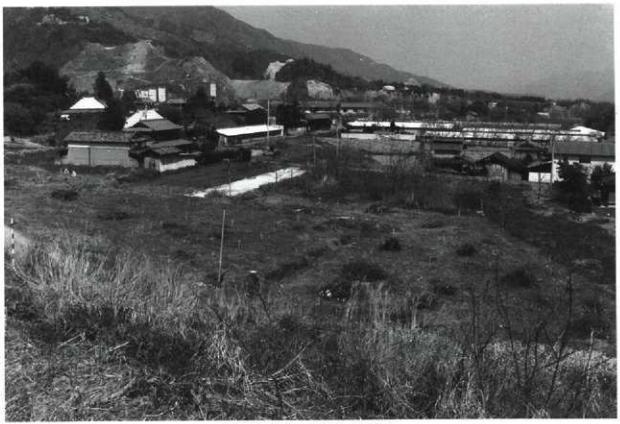
第８表　花園遺跡出土遺物観察表（瓦）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	色調	材質	特徴・備考
173	T-12溝	軒平瓦	厚さ2.0	にぶい橙色	土師質	凸面格子目タタキ
174	Q-12包含層	平瓦	厚さ1.1	にぶい黄褐色	土師質	凸面格子目タタキ
175	P-10包含層	軒丸瓦	瓦当面径13.8 瓦当厚1.7 外縁幅2.8 外縁高0.6	灰色	瓦質	左巻き三つ巴連珠12
176	Q-10包含層	軒丸瓦	外縁幅2.3 外縁高0.6	暗灰色	瓦質	右巻き三つ巴連珠13前後
177	F-4.5包含層	軒平瓦	外縁幅1.1 外縁高0.5	灰色	瓦質	均整唐草文
178	G-10包含層	軒平瓦	瓦当厚2.0 外縁幅1.1 外縁高0.9	灰色	瓦質	均整唐草文

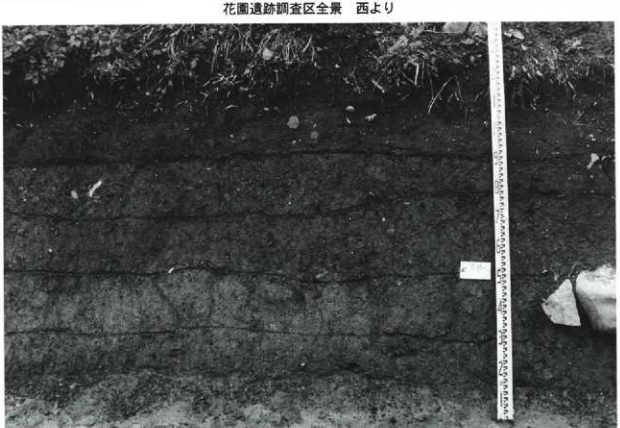
第９表　花園遺跡出土遺物観察表（金属製品）

番号	遺構名 出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
179	L-9　包含層	釘	－	0.55	0.40	5.25	
180	J-6　包含層	釘	3.45	0.60 0.45	0.40	2.72	
181	J-5　包含層	釘	3.90	0.80 0.30	0.30	1.67	
182	M-7　包含層	釘	2.30	0.70 0.40	0.40	1.27	
183	I-7　包含層	釘	2.25	0.40	0.40	2.24	
184	M-8　包含層	釘	1.50	0.60	0.40	2.02	
185	M-7　包含層	釘	2.65	0.40	0.45	3.96	
186	S-12　包含層	釘	5.00	0.75 0.40	0.40	11.79	
187	R-10　包含層	釘	4.00	1.00 0.50	0.50	12.20	
188	I-7	釘	3.50	0.80	0.40	3.54	
189	I-6　包含層	釘	4.20	0.55	0.50	3.12	
190	T-10　包含層	釘	6.10	0.55	0.60	5.23	
191	T-10　包含層	釘	5.20	0.80	0.50	11.30	

番号	遺構名 出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
192	I-7　包含層	釘	3.00	0.60	0.40	4.05	
193	K-9　包含層	釘	8.35	0.70	0.50	26.51	
194	I-6　包含層	釘	－	－	0.35	4.00	
195	M-6　包含層	釘	1.90	0.40	0.35	1.06	
196	R-10　包含層	釘	6.40	0.30 0.40	0.30 0.25	15.64	
197	M-6　包含層	釘	4.70	0.60	0.50	8.59	
198	I-7　包含層	釘	2.10	0.60 0.30	0.40 0.30	1.32	
199	K-6　包含層	釘	2.90	0.90	0.40	2.44	
200	M-6　包含層	釘	1.80	0.50	0.40	1.72	
201	K-6　包含層	釘	2.30	0.40	0.35	1.57	
202	J-9　包含層	釘	2.35	0.50	0.40	3.09	
203	南側排水溝	銭貨	－	－	－	－	祥符元寶（北宋初鋳年1009年） 縁が加工されている。
204	N-12　包含層	銭貨	－	－	－	－	紹聖元寶（北宋初鋳年1094年）
205	S-12　包含層	銭貨	－	－	－	－	寛永通寶



花園遺跡調査区全景　西より



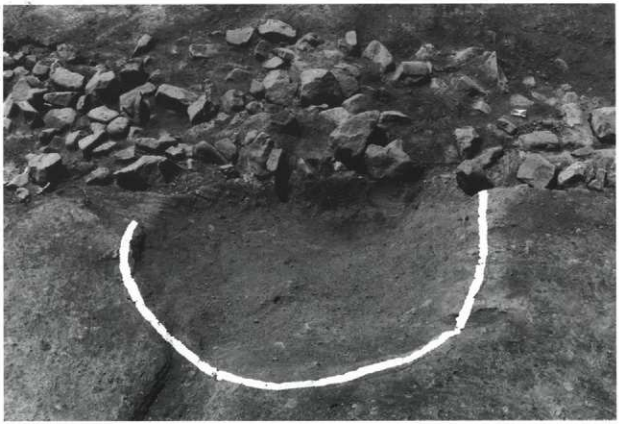
花園遺跡Ｂ区西壁土層

図版 2

SJ1001・1002・1003、SR1001遺構検出状況　東より

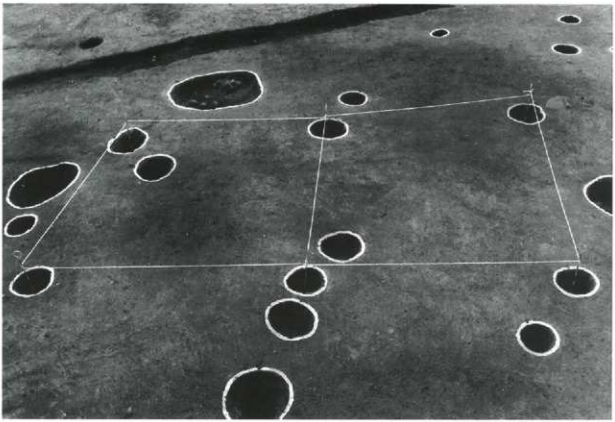
SJ1001・1002・1003、SR1001完掘状況　東より

ST1001土層断面　北より



ST1001完掘状況　北より

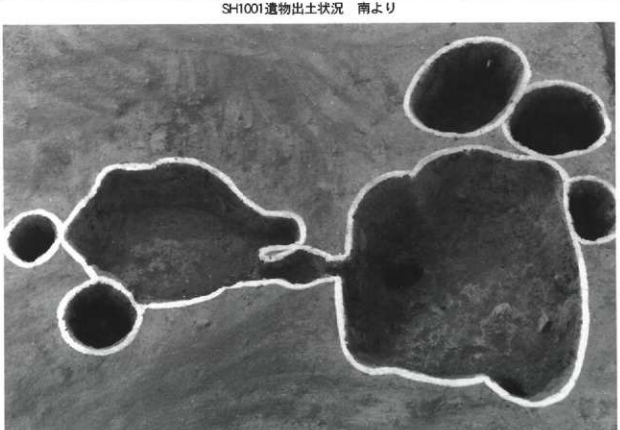
図版 4



SA1001完掘状況　南より

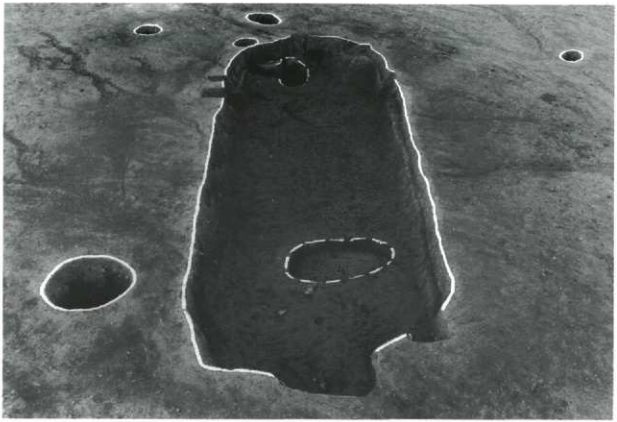
SA1003完掘状況　西より

SH1001遺物出土状況　南より

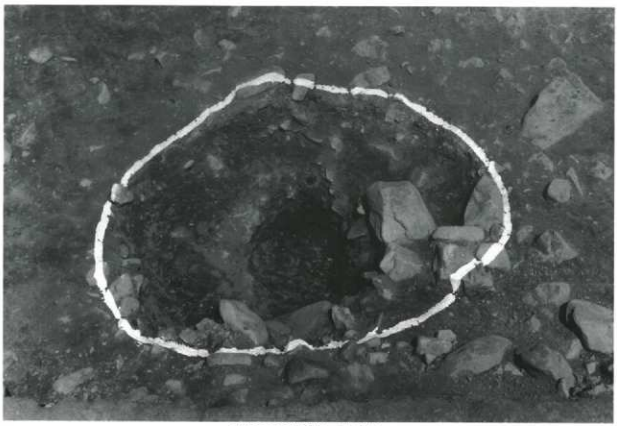


SH1001（右）・SH1002（左）完掘状況　東より

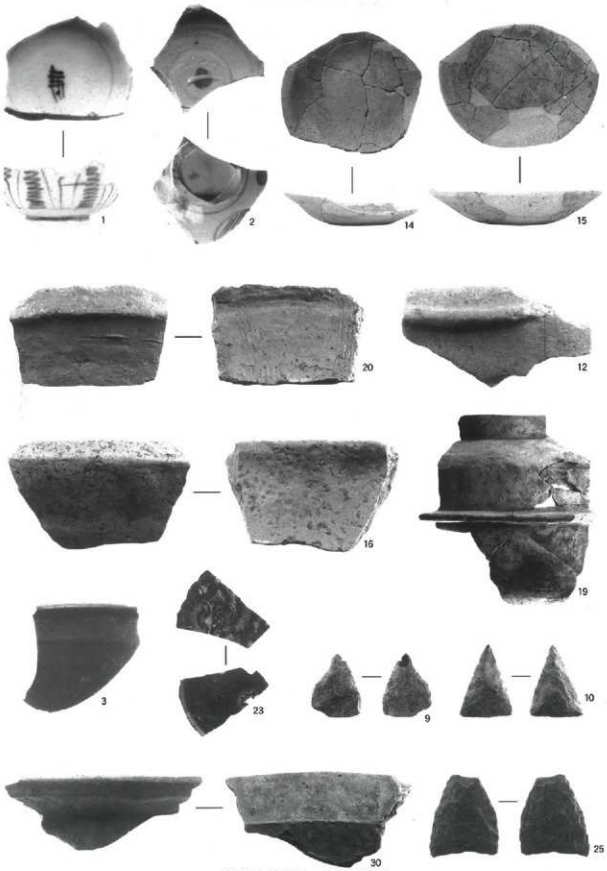
図版6



SO1001完掘状況　南より

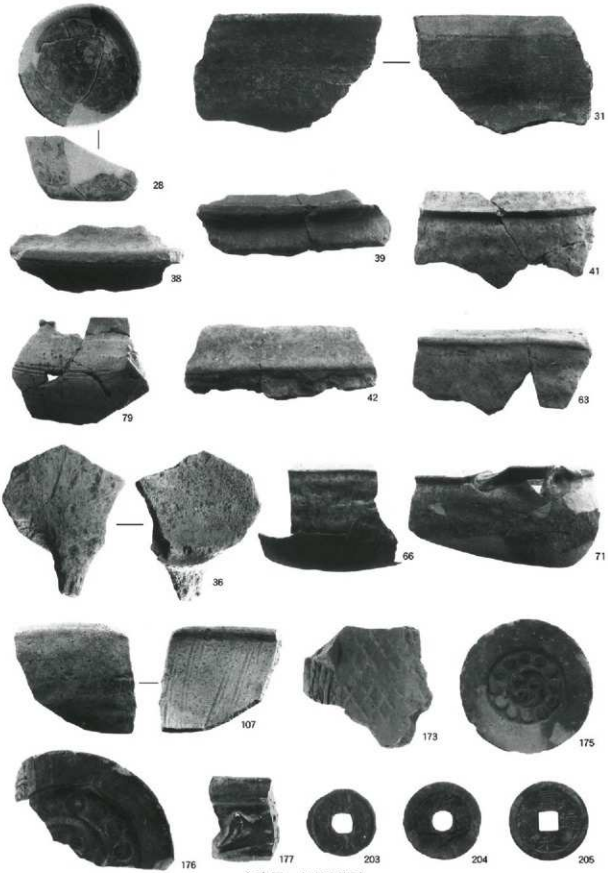


SK1001完掘状況　南より

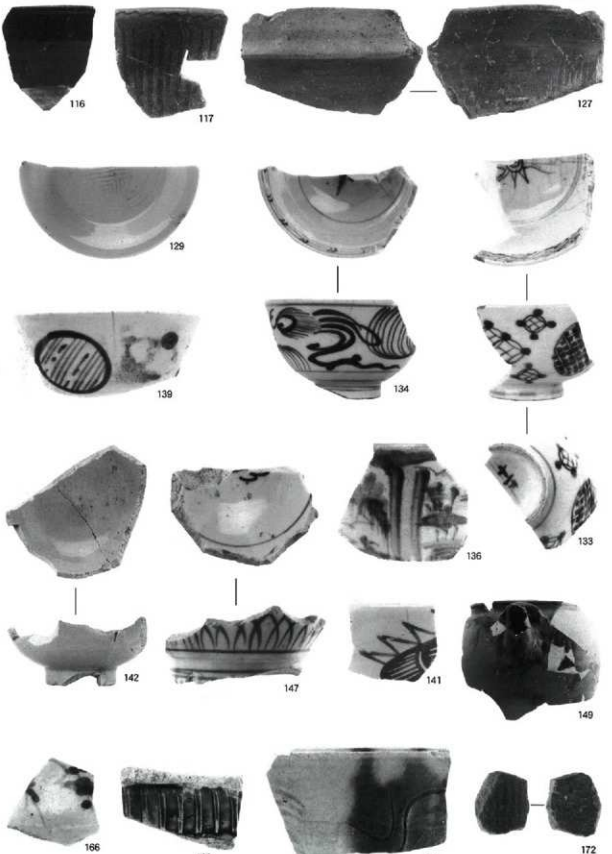


遺構内包含層　出土遺物(1)

図版8



包含層　出土遺物(2)



包含層　出土遺物(3)

Ⅲ　試掘調査総括

1　太刀野山遺跡（Ⅰ）

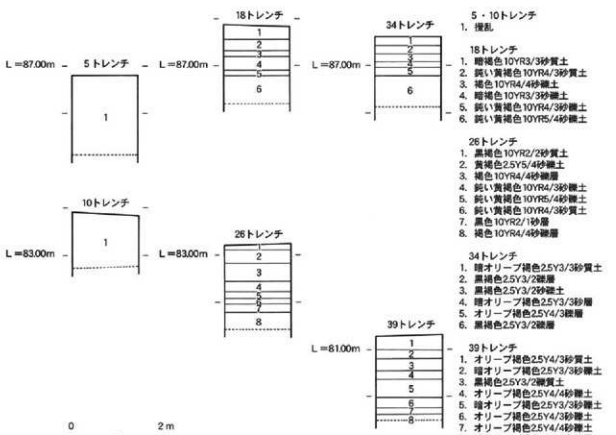
(1)　遺跡の位置（第２図）

太刀野山遺跡（Ⅰ）は、吉野川中流域北岸、花園遺跡の西側にある遺跡で、吉野川に向かって南流する孫十郎谷川によって形成された比較的小型の扇状地の扇頂部に位置し、標高は78m～93mを測る。現況はみかん畑である。分布調査では、土師器片・須恵器片・瓦質土器片・陶磁器片などの遺物が表採され、中世の遺構の存在が考えられた。

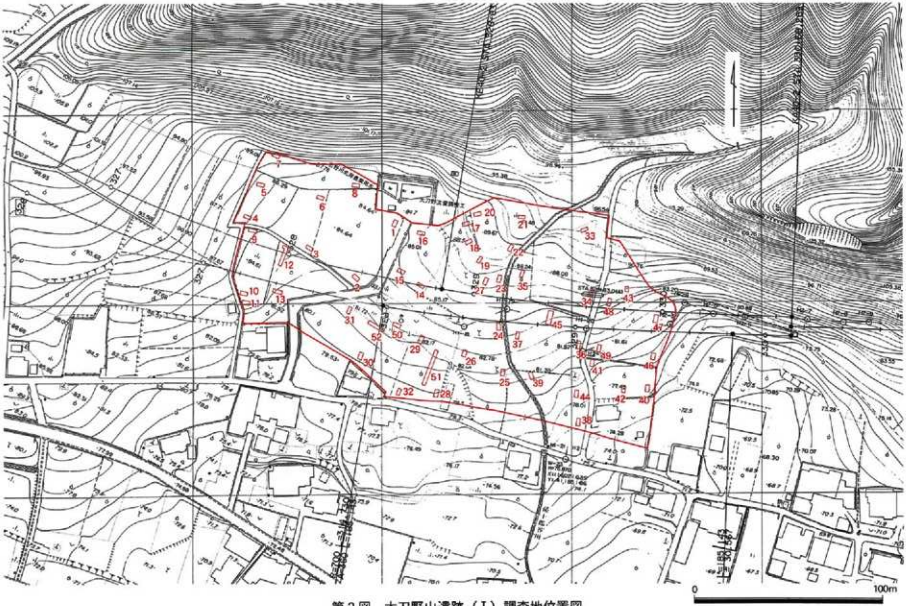
(2)　トレンチの設定（第２図）

調査対象面積は、6,000㎡である。調査区は果樹園（みかん畑）であり、試掘面積は調査対象面積の7.5％である450㎡とし、２m×６mのトレンチを52ヶ所に設定した。（№12は１m×10m、№４・７・８・12・17～22・43は２m×３m、№51は1.5m×20m、№52は２m×10m）

(3)　基本層序（第１図）



第１図　基本土層柱状図



第２図　太刀野山遺跡（Ⅰ）調査地位置図

調査区の北端には吉野川北岸用水が東西に走り、その工事に伴う排土でNo.1～13トレンチは撹乱を受けている。特にNo.13トレンチでは、地表下3.9mまで撹乱を受けている。No.14～52トレンチは、孫十郎谷川に伴う扇状地の押し出しの影響を受け、褐色の砂礫層と暗オリーブ褐色の礫層の互層となっている。浅い所では地表下約10cmから礫層が確認され、地表下約2mまで扇状地の影響がみとめられ、安定した土層は確認できなかった。

(4) 出土遺物（第3図）

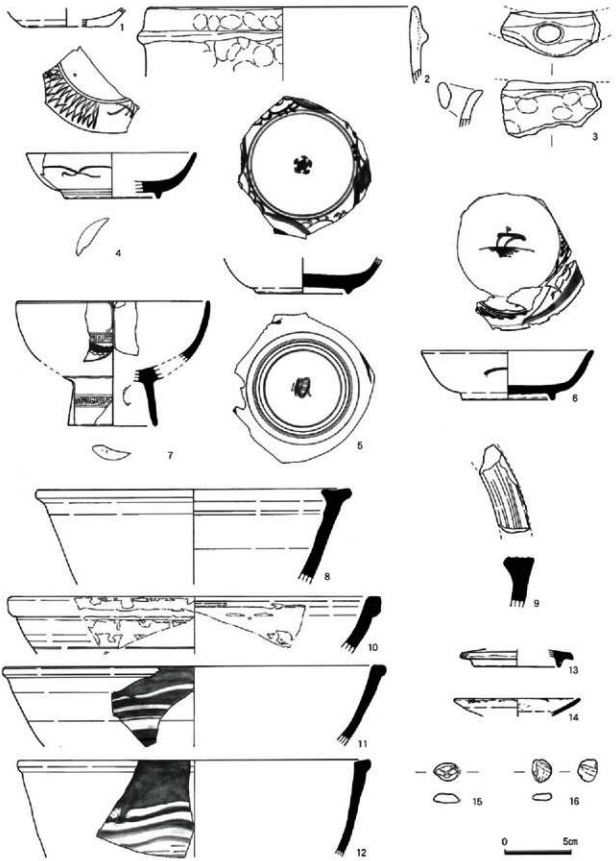
1は、土師質土器の杯である。体部は、底部より直線的に外上方に立ち上がる。体部と底部との境は、強いナデにより段を有する。内外面ともにナデ調整を施している。2・3は、土師質土器の釜である。2は、口縁部直立し端部はやや尖り気味におさめる。口縁下部に断面三角形の短い鍔がつく。外面に炭化物が付着している。3は、内耳の釜である。体部は上位より内傾し、短い直立した口縁がつく。口縁端部は丸くおさめる。口縁部と体部との境に鍔をめぐらし、一部耳状に突出させ、内側に円孔を施す。4は、肥前系の染付けの皿である。見込に溶着痕が有る。内面に区画文、外面に唐草文を描く。高台に圏線が有る。畳付部分に砂が付着する。

5は、肥前系の染付の皿である。見込に五弁花文がコンニャク印判で押されている。内外面とも手書きの唐草文で、外面は圏線の中に大きくくずれた満福の銘がある。また、高台に砂が付着している。6は、瀬戸美濃系の太白手の染付陶器の皿である。内面の見込は帆掛け舟を、周りに扇面文を描く。外面は流水文で、また、高台は蛇の目凹形高台状で、畳付部分は無釉である。7は、肥前系の青磁染付台付鉢である。内面は青磁、外面は染付である。ガラス焼継ぎを行っており、高台内に赤色の焼継師の印が見られる。8は、無釉の焼締陶器の鉢である。内外面ともロクロを回しながら塗り土を施している。内面はロクロ目が顕著である。9は、土師質土器の甕または鉢である。口縁上端部に2条の沈線がある。胎土はにぶい黄橙色で結晶片岩を含み、硬質な土器である。

10は、肥前系の陶器の鉢である。内外面鉄釉で、内面に灰釉をかけていて、外側に折り返し口縁がある。また、口縁上端部は無釉で環状の窯道具痕がある。胎土色は灰色で焼成が硬い。11は、肥前系の刷毛目片口である。内面は鉄釉、外面に白泥と鉄釉の刷毛目を施す。口縁上端部は無釉である。胎土色はにぶい橙で焼成が甘い。12は、肥前系の刷毛目の鉢である。内面は鉄釉、外面は白泥と鉄釉の刷毛目を施す。口縁上端部は無釉で、胎土色は明赤褐色で焼成が甘い。13は、土瓶の蓋である。外面は柿釉をかけ、口縁部に沈線を施している。また、口縁部には煤が付着している。14は、備前系の焼締陶器の灯明皿である。内外面ともロクロナデ調整、塗り土を施している。口縁部に灯芯油痕がある。胎土色は灰色で焼成は硬い。15・16は、泥面子の芥子面である。15は、十字文を施す。16は、欠損のため模様は不明である。他に銭種不明の銭貨が1枚出土している。

(5) まとめ

各トレンチの層序から調査区の西側部分については吉野川北岸用水工事の影響により、地表下約3mまで撹乱を受けていた。また調査区の北側部分では扇状地の押し出しの影響が地表下2mまで認められた。また、全てのトレンチより安定した層・遺物・遺構が検出されなかったことにより、この調査地点に遺構・遺物が残存する可能性は低いものと判断され、試掘調査のみで終了した。



第３図　出土遺物実測図

第１表　太刀野山遺跡（Ｉ）出土遺物観察表（土器）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	42トレンチ 9層	土師質土器 杯	器高(1.5) 底径6.4	内外面ナデ。	体部は底部より外上方に直線的に立ち上がる。体部と底部との境は強いヨコナデにより段を有する。	焼成は良好。1mm大の砂粒を少量含む。	橙色	
2	42トレンチ 9層	土師質土器 鍋	口径16.7 器高(5.9) 脚径19.8	内面ナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	口縁部直立、口縁部下部に断面三角形の短い脚がつく。	焼成は良好。1mm～2.5mm大の砂粒をやや多く含む。	内面　にぶい黄橙色 外面　橙色	外面に炭化物付着。
3	42トレンチ 6層	土師質土器 内耳鍋	—	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサエ後ナデ。	体部上位内傾し、短い直立した口縁がつき口縁端部丸くおさめる。口縁部と体部との境に凹をめぐらし、一部耳状に突出させ、内側に円孔を施す。	焼成は良好。2.5mm大の砂粒を少量含む。	にぶい橙色	
4	41トレンチ	磁器 皿	口径13.2 器高3.6 底径7.5 高台高0.5		内面に区画文。見込に溜痕あり。外面は唐草文、高台に圏線有り。	緻密	灰白色	肥前系、畳付部分に砂が付着。
5	41トレンチ	磁器 皿	底径7.4 高台高0.45		見込に五弁花文のコンニャク印判。外面は圏線の中に大きく崩れた渦雷の絵。内外面唐草文。	緻密	灰白色	肥前系、銘有り、畳付部分に砂が付着。
6	トレンチ 9層	陶器 太白手の皿	口径13.4 器高3.9 底径7.4 高台高0.5		内面は扇面文を周りに、見込に帆掛け舟を描く。外面は流水文。蛇ノ目凹型高台状。		灰白色	瀬戸黄瀬系
7	41トレンチ	青磁染付 台付鉢	口径15 底径6.4		内面は青磁、外面は染付。ガラス焼継ぎを施し、高台内に赤色の焼継師の印。	緻密	灰白色	肥前系、ガラス焼継師の印。
8	41トレンチ	陶器 鉢	口径24.4 器高(7.5)		口縁部は内外方に大きく突起、断面が「T」字状となっている。焼締陶器で口クロ目が顕著で、塗り土を施す。		橙色	
9	№42 トレンチ 砂質土層 2m40 10層	土師質土器 鉢？ 壁？	口径35.2	内面ユビオサエ後板状工具によるナデ。外面ナデ。	口縁部は内傾しながら内面に突出し、外面にも僅かに張り出す。口縁端部に２条の沈線。	焼成は良好。2.5mm大の砂粒を少量含む。	にぶい黄橙色	
10	41トレンチ	陶器 鉢	口径26.8		内外面鉄釉で内面に灰釉をかける。口縁上端部は無釉で環状の窯道具痕。口縁部は外側に折り返している。	焼成は硬い。	灰色	肥前系
11	41トレンチ	陶器 片口鉢	口径29.6		内面は鉄釉、外面に白泥と鉄釉のハケ目を施す。口縁上端部は無釉。		にぶい橙色	肥前系
12	42トレンチ ①	陶器 鉢	口径27.4 器高(7.7)		外面に白泥と鉄釉のハケ目を施す。口縁上端部は無釉。	焼成はあまい。	明赤褐色	
13	42トレンチ 砂質土層 2m40 10層	陶器 土瓶の蓋	—		土瓶の蓋を灯明皿に転用している。柿釉を外面にかける。外面の口縁部に沈線。		にぶい橙色	柿釉、土瓶の蓋を灯明皿に転用、灯芯油痕。
14	42トレンチ 6層	陶器 灯明皿	口径9.8		焼締陶器で、内外面に塗り土を施す。	焼成は硬い。	黄灰色	備前系、灯芯油痕。
15	14トレンチ	泥面子の芥子面	厚み0.7		表に十文字。		明赤褐色	
16	トレンチ 9層	泥面子の芥子面	厚み0.6		模様は欠損のため不明。		橙色	

調査前風景

No.47トレンチ土層堆積状況

調査風景

太刀野山遺跡（Ⅰ）

2　太刀野山遺跡（Ⅱ）

(1)　遺跡の位置

太刀野山遺跡（Ⅱ）は、吉野川中流域北岸、太刀野山遺跡（Ⅰ）の西側に位置する。吉野川に向かって南流する堂の谷川によって形成された扇状地の扇頂部に位置し、標高は77m～89mを測る。現況は、畑と原野である。分布調査では、調査対象区周辺より弥生土器片、土師質土器片などが表採され遺跡の存在が予想された。

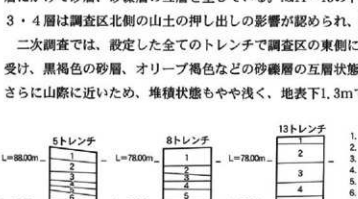
(2)　トレンチの設定（第２図）

調査地は、調査前には畑および原野であり、二次にわたって試掘調査が行われた。調査対象面積は、合わせて4,560㎡である。一次調査は、1994年10月４日～10月７日に行われ、その調査対象面積は、2,160㎡で試掘調査面積は103㎡であった。1.5m×５mのトレンチを13ヶ所に設定した（№5・10トレンチは2m×5m）。二次調査は、一次調査の未調査部分を対象として翌年1997年10月９日～10月11日に行われ、その調査対象面積は、2,400㎡で試掘調査面積は54㎡であった。2.0m×3.0mのトレンチを９ヶ所設定して調査された。

(3)　基本層序（第１図）

一次試掘調査では、№1～10のトレンチは調査区南側に位置する堂の谷川の影響を受け、上層から下層にかけて砂層、砂礫層の互層を呈している。№11～13のトレンチは上層の１・２層は川の影響を受け、３・４層は調査区北側の山土の押し出しの影響が認められ、地表下1.8mで地山が検出された。

二次調査では、設定した全てのトレンチで調査区の東側に位置する堂の谷川の堆積作用による影響を受け、黒褐色の砂層、オリーブ褐色などの砂礫層の互層状態を呈している。二次調査は、一次調査よりさらに山際に近いため、堆積状態もやや浅く、地表下1.3mで地山の灰黄褐色粘質土を検出した。



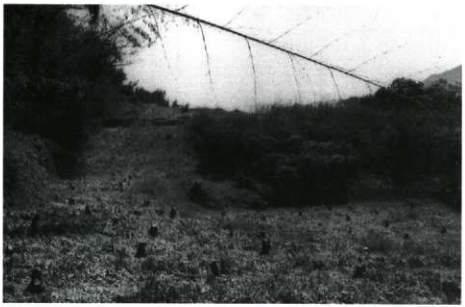
第１図　基本土層柱状図

(4)　まとめ

二次の試掘調査における各トレンチの堆積状態には多少の差はあるが、共通して堂の谷川の土の押し出しの影響を強く受けていることがうかがえ、遺構構築可能な安定した層は見られなかった。また、遺構および遺物は確認することができなかった。したがって、試掘対象地から遺構が検出される可能性は低いものと判断され、試掘調査のみで終了した。

第２図　太刀野山遺跡（Ⅱ）調査地位置図

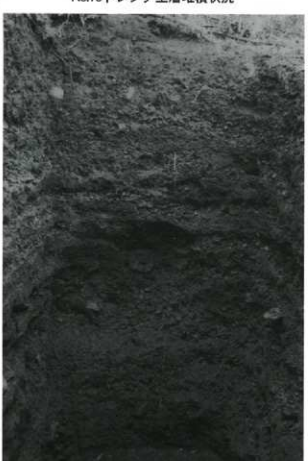
図版1



調査前風景

No.1 トレンチ土層堆積状況

No.10トレンチ土層堆積状況



太刀野山遺跡（Ⅱ）

3　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）

(1)　遺跡の位置

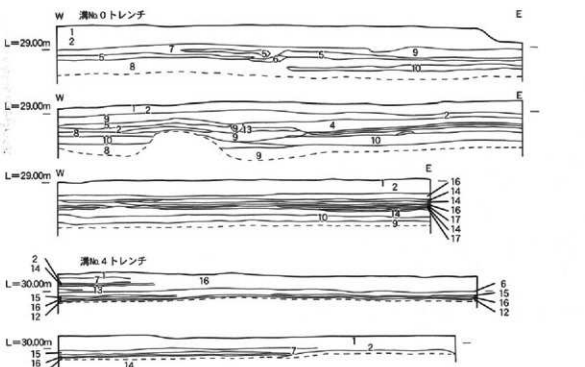
宮ノ岡遺跡（Ⅰ）は、吉野川上流域北岸、三好郡三好町の東部、台遺跡の南に位置する。標高約30m、緩傾斜の河岸段丘上に位置する。近くに中世の遺構が検出された東原遺跡があるので遺構の存在が期待された。

(2)　トレンチの設定（第２図）

調査対象面積は、29,940㎡である。試掘面積は、調査対象面積の約３％である898㎡とし、２m×５mのトレンチ30ヶ所を設定した（溝No.０～４は、２m×65m）。

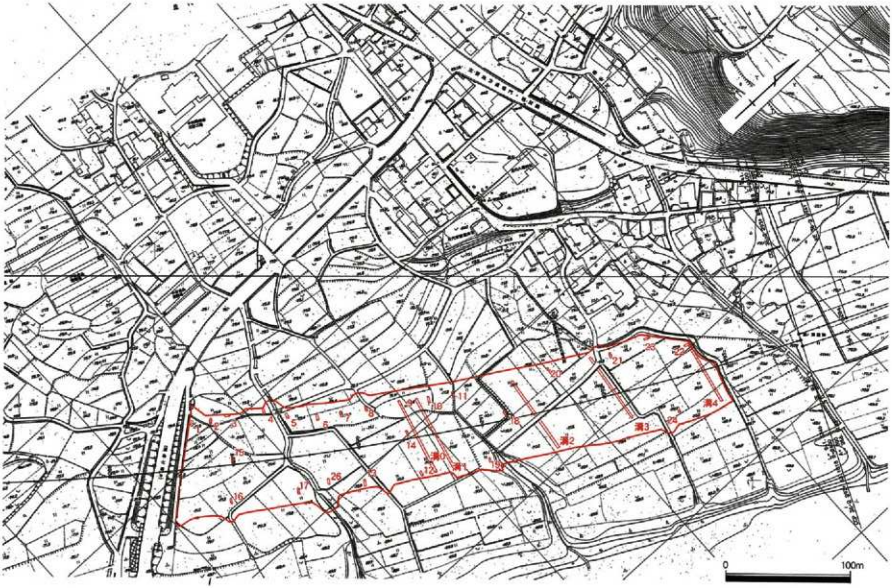
(3)　基本層序（第１図）

大きな洪水時には冠水するためか、堆積相互の対応関係は極めて複雑である。基本的には、耕作土床土、砂礫層および砂礫の混じり、黒褐色シルト層、砂礫層となっている。



1. 表土
2. 床土
3. 暗褐色10YR3/4砂質土（砂礫多く含む）
4. 暗褐色10YR3/4砂礫層
5. にぶい黄褐色10YR4/3砂礫層
6. にぶい黄褐色10YR4/3粘質土
7. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土（小礫混じる）
8. 灰黄褐色10YR4/2粘質土（マンガン含む）
9. 暗褐色10YR3/4シルト層
10. 暗褐色10YR3/3砂礫層
11. 褐灰色10YR4/1砂礫層
12. にぶい黄褐色10YR5/3粘質土
13. にぶい黄褐色10YR5/2砂礫層
14. 灰黄褐色10YR5/2粘質土（小礫含む）
15. 褐灰色10YR5/1粘質土
16. にぶい黄褐色10YR5/4（マンガン、鉄分多い）
17. 黄褐色10YR5/6粘質土

第１図　基本土層図



第２図　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）調査地位置図

しかし、吉野川側の低い地域は砂礫層は少なく、黒褐色シルト層は深い部分にある。№34トレンチ(溝)西側第９層で、弥生～古代と思われる土師質土器片を採集したものの、第11層より寛永通寶が出土し新しい遺物が下層より出土する層位の逆転現象が見られた。また、第３層以下の堆積層も途中で途切れたり消えたりしていた。溝№０トレンチ西側第４層黒褐色シルト層より古墳時代と思われる須恵器片を採集したため、溝トレンチを設定したが、土層が安定しておらず、河川の氾濫などによる影響のため、複雑な堆積層を形成したものと考える。

(4) 出土遺物（第３図）

１は、土師質土器の杯である。体部内面はナデ、外面は強いヨコナデにより底部との境に段を有する。底面は、回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。２は、須恵器の杯である。体部上位でややふくらみ、口縁部は僅かに外反する。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。内面および口縁部外面は黒色を呈する。３は、須恵器の台付杯である。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。内外面ともロクロナデ調整を施し、外面は、体部の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。４は、須恵器の杯身である。体部と底部の境は不明瞭。底面は静止糸切りである。５は、須恵器の椀である。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を施す。６・７は、白磁の碗である。６は、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は玉縁となる。横田・森田氏分類の大宰府型式分類Ⅳ類Ⅰａに属し、11世紀後半から12世紀のものである。胎土は灰白色である。７は、小片のため口径は不明であるが、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部を「く」の字状に外反する。同じく大宰府型式分類のⅥ類１ｂかⅧ類３に属する。11世紀後半から12世紀あるいは13世紀にかけてのものである。

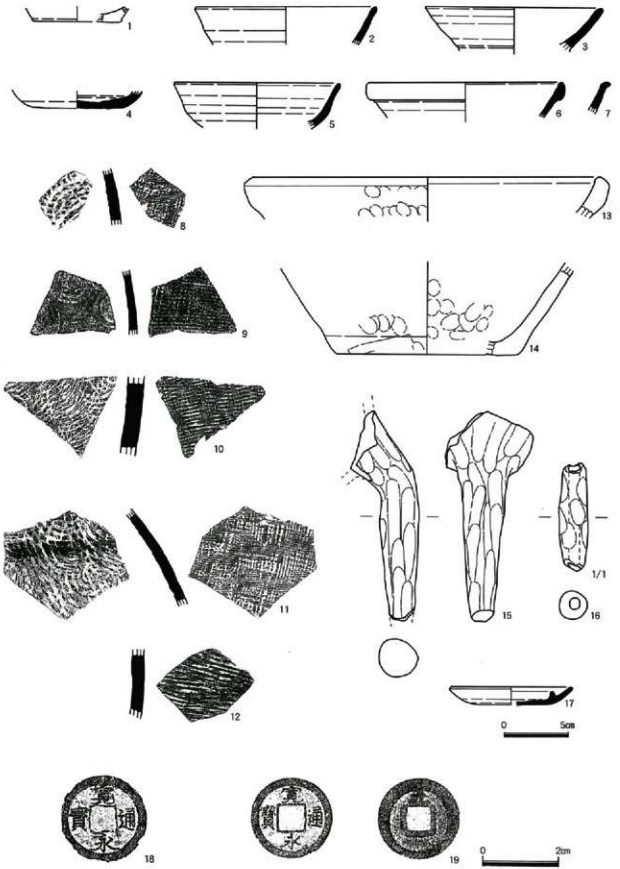
８～12は、須恵器の甕である。８・11は、内面は同心円文、外面はハケ後格子目タタキを施す。10は、内面は同心円文のタタキ目、外面はハケ後格子目タタキを施した後ナデ調整を施す。９は、内面は同心円文、外面はカキメ後格子目タタキ調整を施す。12は、内面ナデ、外面タタキ調整を施す。

13は、土師質土器の土鍋である。口縁上端部僅かに内傾し、肥厚、口縁端部方形におさめる。外面に煤が付着している。14は、土師質土器の捏鉢である。体部は底部より直線的に立ち上がる。調整は摩滅のため不明瞭であるが、内外面ともユビオサエ後ナデである。15は、土師質土器の鍋あるいは釜の脚部である。

16は、土師質土器の管状土錘である。17は、備前焼の灯明皿である。口縁端部より低い仕切りを有し、底部は回転糸切りである。18・19は、寛永通寶である。他に環状と棒状の金属製品が出土した。

(5) まとめ

今回の調査区は、中世の遺構が検出されている東原遺跡に近く、遺跡の存在が期待された。しかし、レベル的に約８ｍほど低く、洪水時冠水する地区であるためか、層位の逆転現象など、土層が安定しておらず、遺物は、かなり採集できるものの、遺物包含層および遺構面の確認はできなかった。したがって、今回の調査対象地区においては、試掘調査のみで終了した。



第３図　出土遺物実測図

第1表　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）出土遺物一覧表（土器）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1		土師質土器 杯	底径6.9	内外面ナデ。底部回転ヘラ切り。	体部は底部より直線的に立ち上がる。体部外面の強いナデにより底部との境に段を有する。	焼成は良好。1mm大の砂粒を少量含む。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	
2	溝4トレンチ マンガン層	須恵器 杯	口径15.5	内外面ナデ。	体部上位でややふくらみ、口縁部は僅かに外反する。内面および口縁部外面は黒色を呈する。	焼成は良好。1mm大の砂粒を多く含む。	内面　灰黄色 外面　灰白色	
3	溝0トレンチ 5層	須恵器 台付杯	口径16.9	内外面ロクロナデ。	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや尖り気味におさめる。高台がつく。	焼成は良好。1mm大の砂粒を含む。	内面　灰白色 外面　黄灰色	
4	溝0トレンチ 5層	須恵器 杯身	底径7.0	内外面ロクロナデ。	体部は底部よりやや内彎しながら立ち上がる。体部と底部との境は不明瞭である。底面は静止糸切り。	焼成は良好。1mm大の砂粒を含む。	灰白色	
5	溝0トレンチ 5層	須恵器 椀	口径13.0	内外面ロクロナデ。	体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。	焼成は良好。3mm大の砂粒を含む。	灰白色	
6	溝3トレンチ 3層	白磁 椀	口径15.2		体部は直線的に立ち上がり、口縁部は玉縁となる。	緻密	灰白色	
7	9トレンチ4層	白磁 椀	－		体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部を「く」の字状に外反する。	緻密	灰白色	
8	14トレンチ12層	須恵器	－	内面同心円文。外面ハケ後格子目タタキ。	体部はやや内彎気味に立ち上がる。	焼成は良好。精良。	灰白色	
9	溝0トレンチ 5層	須恵器 甕	－	内面同心円文後ナデ。外面カキメ後格子目タタキ。	体部はやや内彎気味に立ち上がる。	焼成は良好。1mm大の砂粒を含む。	灰白色	
10	7トレンチ5層	須恵器 甕	－	内面同心円文。外面ハケ後格子目タタキ後ナデ。	体部はやや内彎気味に立ち上がる。	焼成は良好。精良。	灰色	
11	溝0トレンチ 5層	須恵器 甕	－	内面同心円文。外面ハケ後格子目タタキ。	体部はやや内彎気味に立ち上がる。	焼成は良好。精良。	灰白色	
12	22トレンチ11層	須恵器 甕	－	内面ナデ。外面タタキ。	体部はやや内彎気味に立ち上がる。	焼成は良好。2mm大の砂粒を含む。	灰白色	
13	6トレンチ4層	土師質土器 鍋	口径27.2	内面ユビオサエ後ナデ。外面ナデ。	口縁上端部僅かに内傾し、肥厚。口縁端部方形におさめる。	焼成は良好。4mm大の砂粒を含む。	内面　橙色 外面　黒褐色	外面に煤付着。
14	8トレンチ4層 5層	土師質土器 控鉢	底径14.0	内外面ユビオサエ後ナデ。	体部は底部より直線的に立ち上がる。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を少量含む。	淡黄橙色	
15	19トレンチ9層	土師質土器 鍋か釜の脚部	－	ユビオサエ後ナデ。	基部屈曲。身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を多く含む。	橙色	
16	18トレンチ3層	土師質土器 管状土錘	最大長5.6 最大径1.5	ユビオサエ後ナデ。	紡錘状の管状土錘。	焼成は良好。1mm大の砂粒を少量含む。	淡黄橙色	
17		陶器 灯明皿	口径9.4		口縁端部より低い仕切りを有する。底部は回転糸切り。	緻密	赤褐色 素地　にぶい橙色	備前灯明皿

第２表　宮ノ岡遺跡（Ⅰ）出土遺物（金属製品）

番号	調　査　区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　　考
18	22トレンチ14層 マンガン層の下２枚目	銭貨	－	－	－	－	寛永通貨
19	22トレンチ14層 マンガン層の下２枚目	銭貨	－	－	－	－	寛永通貨

図版1

調査前風景

No. 1トレンチ
土層堆積状況

No. 12トレンチ
土層堆積状況

宮ノ岡遺跡（I）

4　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）

(1)　遺跡の位置

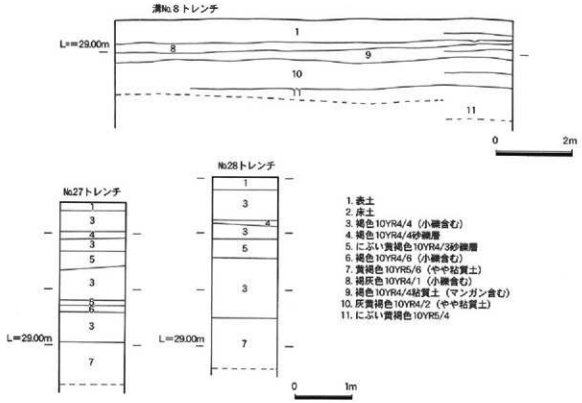
宮ノ岡遺跡（Ⅱ）は、宮ノ岡遺跡（Ⅰ）の北東に隣接しており、洪水の影響を受けるなど自然環境も似ている。また東原遺跡に隣接しているところから遺跡の存在が期待されていた。

(2)　トレンチの設定（第２図）

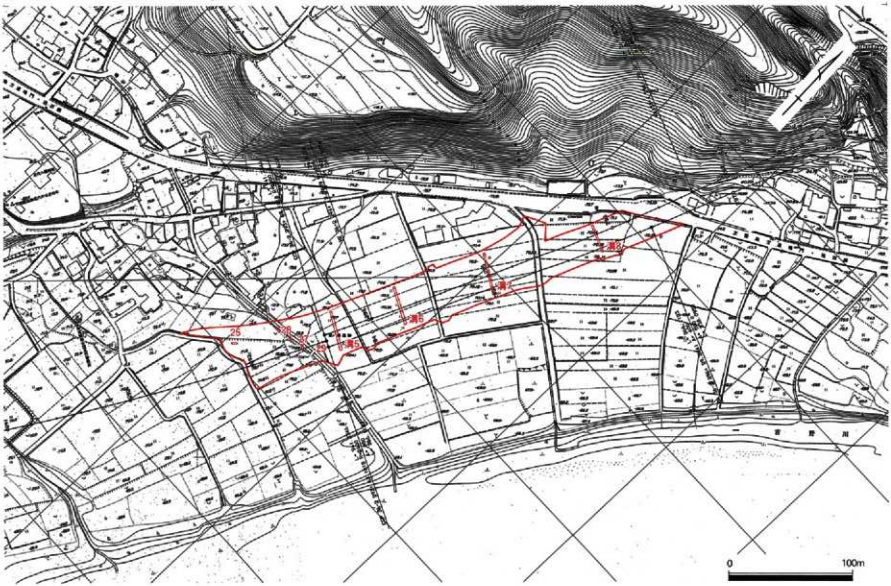
調査対象面積は、11,500m²である。試掘面積は、その３％である345m²で、２m×４mのトレンチ(No.25トレンチは２m×４m）を４ヶ所と溝２m×40m（溝No.８は、２m×35m）を４ヶ所設定した。トレンチ番号は、宮ノ岡（Ⅰ）遺跡の番号に続けた。

(3)　基本層序（第１図）

レベル的には、No.27～29トレンチ以外は宮ノ岡遺跡（Ⅰ）より少し低くなっている。No.25～28トレンチは、0.5cm～１cm程の礫を多く含む層が表土下2.5m程度堆積し、近世以前の遺物、遺構とも全く検出



第１図　基本土層図



第２図　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）調査地位置図

できなかった。溝№6～8トレンチ付近は、自然水路があった場所で、水田を造成したのではないかと思われ、床下もしまりがなく、表土下約2.0m以下はグライ化していた。溝№5トレンチ北側第4層で、中世と思われる土師質土器の皿を出土したが、第3層以下の堆積層の広がりも安定しておらず、途切れたり、消えたりしていたため、洪水の影響を受けたものと思われる。

(4) 出土遺物（第3図）

1～3は、土師質土器の小皿である。1は、体部は底部より直線的に短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内面ナデ、外面強いヨコナデを施す。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整である。2は、体部は底部より直線的に短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内面はユビオサエ後ナデ、外面はユビオサエ後板状工具によるナデ調整で、強いヨコナデで底部との境に段を有する。3は、体部は底部より外上方へ内彎しながら立ち上がり、内外面ともナデ調整。底部と体部との境は強いヨコナデにより段を有する。底部はヘラ切りである。内面は灰色、外面は浅黄橙色である。

4～12は、土師質土器の杯である。4は、口縁部は体部よりやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。5・8～12は、内面および見込部に強いヨコナデによる段が認められる。また、5・8・9・10の底部は回転ヘラ切りで、11・12の底部はナデ調整である。6は、体部は、底部より直線的に外上方に立ち上がる。体部と底部との境は不明瞭である。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。7は、体部は体部下位で少しふくらみ、外上方へやや反り気味に立ち上がる。内外面とも丁寧なナデ調整で、外面は強いヨコナデにより底部がやや突出する。外面に黒斑がある。13・14は、土師質土器の釜である。13は、口縁部は直立し、口縁端部は方形にまとめる。口縁下方に断面方形のしっかりとした鍔がつく。内面および鍔部分はハケ、口縁部外面はハケ後ナデ調整を施す。鍔の下部分に煤が付着する。14は、口径は不明であるが口縁部はやや外方向へ開き口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部下方に断面三角形の鍔がつく。外面に煤が付着する。15は、土師質土器の釜の脚である。ケズリ後丁寧なナデ調整で、外面に黒斑が見られる。16は、西村系の須恵器椀である。貼付高台で、畳付部分が外方向に張り出している。内面はハケ、外面はナデ調整である。

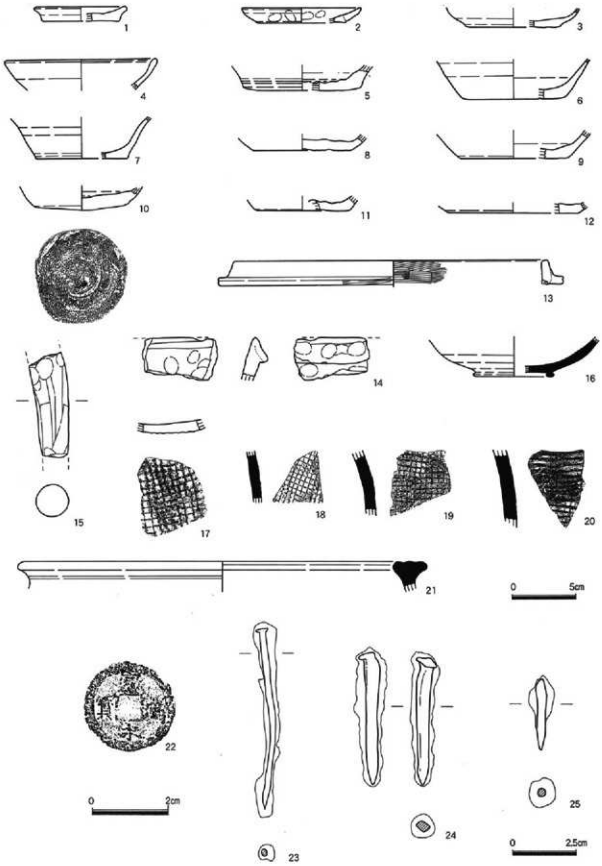
17は、土師質土器の鍋の底部である。内面はナデ、外面は格子目タタキを施す。18～20は、須恵器の甕である。18・19は、内面ナデ、外面格子目タタキを施している。20は、内面は丁寧なナデ、外面はタタキ調整である。

21は、丹波焼の甕である。口縁端部は内外方に拡張され、その口縁上端部に2条の凹線状の沈線が入る。胎土は灰白色で、白、黒色粒を多量に含む。

22は、銭貨で寛永通寶である。23～25は、金属製品で釘である。

(5) まとめ

今回の調査では、ほとんどの地点が吉野川および自然水路の氾濫に伴う堆積物に覆われる部分が多く、安定した遺物包含層および遺構面の検出はできなかった。唯一確認された中世遺物の包含層も面としての広がりが認められず、また、それに伴う遺構面も確認されなかった。東原遺跡に隣接していることもあり遺構の存在が期待されたが、レベル的に低いこともあり、弥生～中世の土器片、須恵器片など少量の遺物を出土しているものの、遺跡の存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで終了した。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
5cm
22
0
2cm
23
24
25
0
2.5cm

第３図　出土遺物実測図

第1表　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（土器）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	溝5トレンチ 石列中	土師質土器 小皿	口径7.0 器高1.15 底径6.1	内外面ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	体部は底部より直線的に短く立ち上がりの縁端部は丸くおさめる。	焼成は良好。	橙色	
2	溝5トレンチ 7層	土師質土器 小皿	口径5.3 器高1.2 底径7.0	内面ユビオサエ後ナデ。外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。接合痕。	体部は底部より直線的に短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。強いヨコナデによりに底部との境に段を有する。	焼成は良好。	にぶい橙色	
3	溝5トレンチ P-1西側	土師質土器 小皿	底径7.5	内外面ナデ。底部ヘラ切り。	体部は底部より外上方へ内彎しながら立ち上がる。体部と底部との境は強いヨコナデにより段を有する。	焼成は良好。	内面　灰色 外面　浅黄橙色	
4	27トレンチ 2層	土師質土器 杯	口径11.7	内外面ナデ。	口縁部は体部よりやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	焼成は良好。	内面　明黄褐色 外面　橙色	
5	溝5トレンチ5 P-2東側	土師質土器 杯	底径9.2	内外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	体部は底部より直線的に立ち上がりその境は不明瞭である。内面および見込部に強いヨコナデによる段が有る。	焼成は良好。	内面　にぶい橙色 外面　褐灰色	
6	溝5トレンチ SP1001	土師質土器 杯	底径6.9	内外面ナデ。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がりその境は不明瞭である。	焼成は良好。	内面　にぶい橙色 外面　明黄褐色	
7	溝5トレンチ SP1001西側	土師質土器 杯	底径7.0	内外面ナデ。	体部は体部下位で少しふくらみ、外上方へやや反り気味に立ち上がる。底部外面は強いヨコナデによりやや突出する。	焼成は良好。	内面　橙色 外面　にぶい橙色	外面に黒斑。
8	溝5トレンチ P-1	土師質土器 杯	底径7.6	内外面ヨコナデ。底部ヘラ切り。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がる。内面および見込部に強いヨコナデによる段が有る。	焼成は良好。	にぶい橙色	
9	溝5トレンチ 6層	土師質土器 杯	底径8.8	内外面ヨコナデ。底部回転ヘラ切り。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がる。内面に強いヨコナデによる段が有る。	焼成は良好。	橙色	
10	溝5トレンチ	土師質土器 杯	底径7.5	内面ユビナデ。外面ナデ。底部回転ヘラ切り。	体部は底部より直線的に立ち上がりその境は不明瞭である。内面見込部に指頭による ナデが有る。	焼成は良好。	内面　灰白色 外面　浅黄橙色	
11	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 杯	底径7.2	内外面ヨコナデ。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がる。内面見込部に強いヨコナデによる段が有る。	焼成は良好。	にぶい橙色	
12	溝8トレンチ 7層	土師質土器 杯	底径10.2	内面板状工具によるナデ。外面ナデ。	体部は底部より直線的に立ち上がりその境はやや不明瞭である。内面見込部は強いヨコナデによる段が有る。	焼成は良好。	橙色	
13	溝5トレンチ P-2東側	土師質土器 釜	口径23.2	内外面ヨコナデ。接合痕。	口縁部は直立し、口縁端部は方形におさめる。口縁部下方に断面方形のしっかりとした鍔がつく。	焼成は良好。	にぶい橙色	内外面に黒斑、外面に煤付着。
14	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 釜	－	内外面ユビオサエ後板状工具によるナデ。	口縁部はやや外方向へ開き、口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部下方に断面三角形の鍔がつく。	焼成は良好。	内面　浅黄橙色 外面　にぶい黄橙色	外面に煤付着。
15	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 脚部	長さ8.4 幅2.6 厚さ2.5	外面ケズリ、ユビオサエ後ナデ。	円柱状を呈する。	焼成は良好。	にぶい黄橙色	黒斑あり。

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
16	溝8トレンチ 8層	須恵器 椀	高台径6.35 高台高0.35	内面ハケ。外面ナデ。	体部は底部よりやや内彎しながら立ち上がる。貼付高台で、曇付部分が外方向に張り出している。	焼成は良好。	灰白色	西村系
17	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 鍋	－	内面ナデ。外面格子目タタキ。	底部やや丸みを帯びる。	焼成は良好。	橙色	
18	溝5トレンチ P-2東側	須恵器 甕	－	内面ナデ。外面格子目タタキ。	体部やや内彎しながら立ち上がる。	焼成は良好。	灰色	
19	溝5トレンチ 石列中	須恵器 甕	－	内面ナデ。外面格子目タタキ。	体部やや内彎しながら立ち上がる。	焼成は良好。	灰色	
20	溝5トレンチ P-2東側	須恵器 甕	－	内面板ナデ。外面タタキ（3本/cm）。	体部やや内彎しながら立ち上がる。		灰白色	
21	溝5トレンチ 4層	陶器 甕	口径31.0		口縁端部は内外方に拡張される。口縁上端部に2条の凹線状の沈線が入る。		灰白色	丹波焼

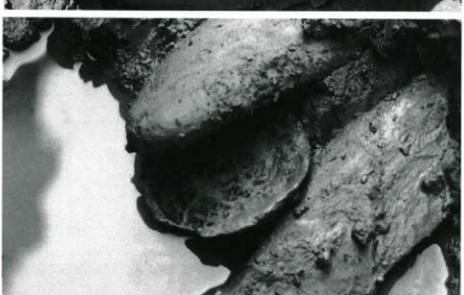
第2表　宮ノ岡遺跡（Ⅱ）出土遺物観察表（金属製品）

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
22	溝5トレンチP-2	銭貨	－	－	－	－	寛永通寶
23	25トレンチ1，2層	釘	7.15	0.50	0.25	8.05	
24	溝5トレンチP-1	釘	5.25	0.50	0.50	10.48	
25	27トレンチ、2層	釘	2.28	0.32	0.30	4.08	

図版1

調査前風景

No. 29トレンチ
土層堆積状況



溝 No. 5 トレンチ
遺物出土状況

宮ノ岡遺跡（Ⅱ）

5 台　遺　跡

(1) 遺跡の位置

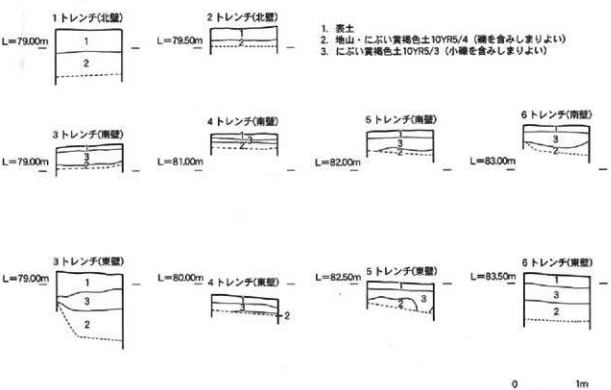
台遺跡は、三好郡三好町の東部、吉野川北岸上流域、標高約80m前後の中位段丘上の南へ緩傾斜した高台に位置する。調査地は、戦国期1582年まで三好氏の居域となっていた足代城に近く、分布調査でも須恵器片や土師器片が採集され中世の遺跡が期待されていた。

(2) トレンチの設定（第２図）

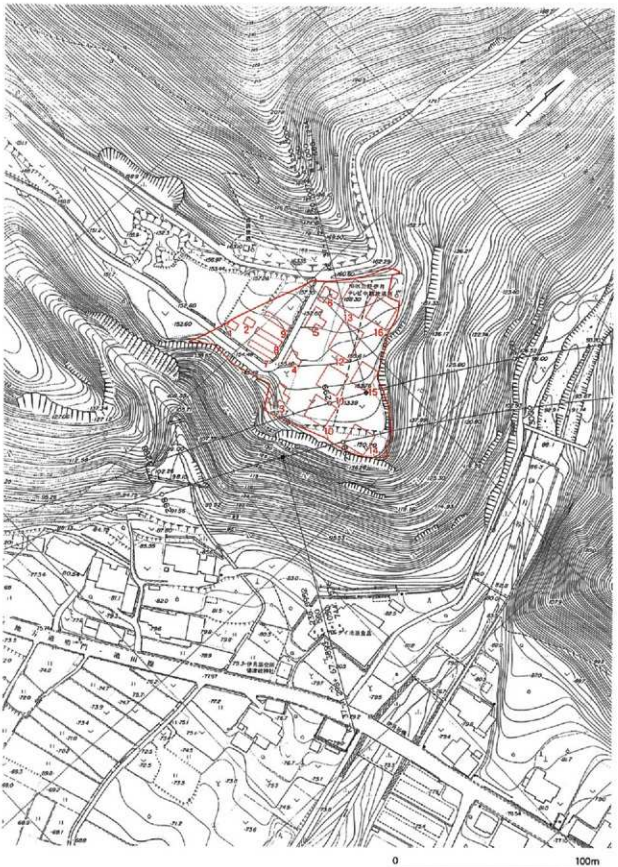
調査地は、調査前は畑として利用されていた。調査対象面積は、6,015㎡である。試掘面積は調査対象面積の20％である1,203㎡とした。１m×８mのトレンチを６ヶ所に設定（№.１・２は２m×４m）して調査を行った。

(3) 基本層序（第１図）

第１層は表土である。第２層はにぶい黄褐色土で礫を含み、しまりがよい地山である。第３層はにぶい黄褐色土で小さな礫を含みしまりがよい。№.１・２トレンチ、№.３・４・５・６トレンチは表土直下は地山となっており、№.７・８・９・10・11・12・13・14・15・16トレンチは表土がなく地山が露出していたため精査を行った。



第１図　基本土層柱状図

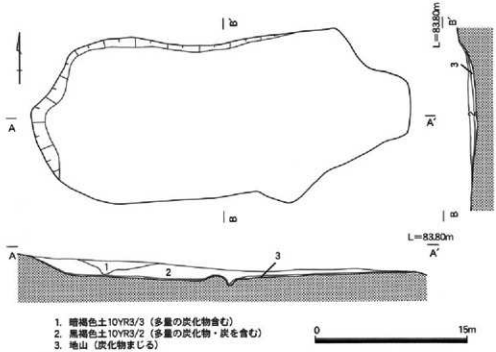


第２図　台遺跡調査地位置図

(4) 出土した遺構と遺物

炭焼き窯跡（SQ1001）（第３図）

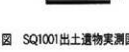
今回の調査地点No.13トレンチから明治期以降と思われる炭焼き窯跡（SQ1001）を検出した。東西に長軸約3.8m、南北に短軸1.6m、深さ約0.16mを測る。しかし、表土が削平・搬出されていたため特に深さは正確に計測できなかった。覆土は３層で、１層は暗褐色土で多量の炭化物を含む。２層は、黒褐色土で多量の炭化物と炭を含む。３層は、地山で炭化物が混じる。遺物は、炭の破片など多量の炭化物のみであった。



第３図　SQ1001実測図

出土遺物（第４図）

肥前系の磁器小杯である。口径6.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部外反、口縁端部尖り気味におさめる。胎土は緻密で素地および表面は灰白色である。



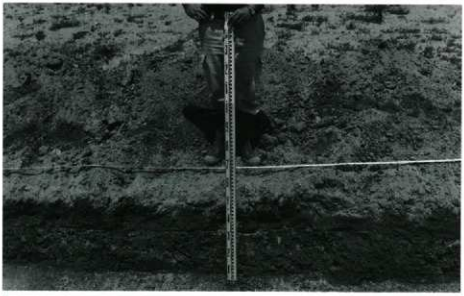
第４図　SQ1001出土遺物実測図

(5) まとめ

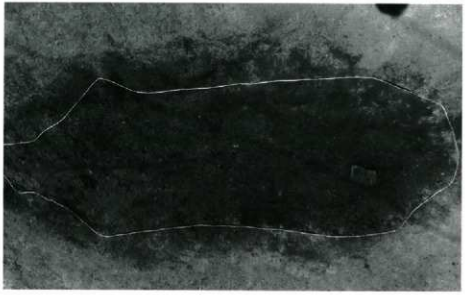
今回の調査地点では、戦国期1582年まで三好氏の居城であった足代城に近く、分布調査でも須恵器片や土師器片が採集され、中世の遺跡の存在が期待されていたが、調査地の表土の3/4は削平、搬出されていたため、近世以前の遺物包含層、遺構面とも確認できなかった。また、遺物も少量の近世陶磁器片が採集されたのみで、これらも二次的な混入と考えられる。したがって、遺跡の存在する可能性は希薄であると判断し試掘調査で終了した。

図版 1

調査前風景
西より



No. 1 トレンチ
土層堆積状況



SQ1001
完掘状況

台　遺　跡

報告書抄録

ふりがな	はなぞのいせき　しくつちょうさそうかつ
書名	花園遺跡　試掘調査総括
副書名	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	22
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 42 集
編著者名	烏野美子　貞野保仁
編集機関	財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
所在地	〒779-0108　板野郡板野町犬伏字平山86番2　TEL　088－672－4545
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
花園（はなぞの）	徳島県三好郡（とくしまけんみよしぐん） 三野町大字太刀野字花園猫他（みのちょうおおあざたちのあざはなぞのくぼねか）	36481		34度 2分 44秒	133度 57分 30秒	1995. 6. 5～1995. 6. 7 1995. 9.12～1995. 9.29 1996. 4. 3～1996. 9.30	4,345㎡ 25,255㎡ 3,100㎡	四国縦貫自動車道建設に伴う発掘
太刀野山(Ⅰ)（たちのやま）	徳島県三好郡（とくしまけんみよしぐん） 三野町字孫十郎谷他（みのちょうあざまごじゅうろうだにほか）	36481		34度 2分 43秒	133度 57分 15秒	1994. 5. 9～1996. 5.23	6,000㎡	
太刀野山(Ⅱ)（たちのやまに）	徳島県三好郡（とくしまけんみよしぐん） 三野町太刀野字西久保他（みのちょうたちのあざにしくぼほか）	36481		34度 2分 45秒	133度 54分 50秒	1994.10. 4～1994.10. 7 1995.10. 9～1995.10.11	2,160㎡ 2,400㎡	
宮ノ岡（Ⅰ）（みやのおか）	徳島県三好郡（とくしまけんみよしぐん） 三好町大字足代字宮ノ岡319-1他（みよしちょうおおあざあしろあざみやのおか）	36482		34度 2分 28秒	133度 54分 48秒	1996. 4.15～1996. 5. 8	29,940㎡	
宮ノ岡（Ⅱ）（みやのおかに）	徳島県三好郡（とくしまけんみよしぐん） 三好町大字足代字宮ノ岡319-1他（みよしちょうおおあざあしろあざみやのおか）	36482		34度 2分 28秒	133度 54分 46秒	1996. 5. 9～1996. 5.16	11,500㎡	
台（だい）	徳島県三好郡（とくしまけんみよしぐん） 三好町大字足代他（みよしちょうあざあしろほか）	36482		34度 2分 45秒	133度 54分 50秒	1996. 5.17～1996. 5.31	6,015㎡	

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花園	集落跡	室町時代	掘立柱建物跡3棟、炉跡2基、暗渠3条、土坑1基、柱穴280基、炭窯跡1基、火葬墓1基	土師質土器 須恵質土器 近世陶磁器 宋銭、石鏃	
太刀野山(Ⅰ)				土師質土器、陶器、磁器	試掘調査
太刀野山(Ⅱ)					試掘調査
宮ノ岡（Ⅰ）				須恵器、寛永通寶	試掘調査
宮ノ岡（Ⅱ）				土師質土器片	試掘調査
台			炭窯跡1基	磁器	試掘調査

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第42集

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　22

発行日　平成14年３月31日

編　集　財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108　徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番２
TEL (088)672-4545

発　行　徳島県教育委員会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

印　刷　株式会社教育出版センター
〒771-0138　徳島市川内町平石流通団地27番地